



東北大學埋蔵文化財調査室調査報告 5 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区 第16地点

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区

第16地点



仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点 (BK16)
北西から仙台城二の丸・千賀沢を望む

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告5
仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区
第16地点

東北大学埋蔵文化財調査室
2016



1. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点調査区全景（北西から）



2. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点調査終了状況（上が北）



3. 堀（新段階）埋土堆積状況（西から）



4. 堀（古段階）東側調査区埋土堆積状況（西から）

序

本報告書は、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』の5冊目として、川内北キャンパスにおける学生支援センター新営工事に伴い実施した、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の調査成果をまとめたものです。

東北大学埋蔵文化財調査室では、以前は『東北大学埋蔵文化財調査年報』として、年度ごとに事業概要と調査成果の報告をまとめて刊行してきました。2007年度より年度ごとの事業概要の報告は、『東北大学埋蔵文化財調査室年次報告』として別に刊行し、東北大学構内における埋蔵文化財調査の発掘調査の報告については『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』というシリーズで刊行しております。本報告書は、その5冊目となります。

今回報告する仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の調査では、仙台城二の丸の北側に位置する堀の北岸の状況が明らかとなりました。これまでにも、二の丸地区第8地点（『年報』5）、第12地点（『年報』11）の調査で、同じ堀の北岸を検出していました。また、北方武家屋敷地区第13地点（『調査報告』2）の調査では、二の丸北側を通っていた筋違橋通の一部を復元していました。こうした継続的な調査は、仙台城を研究する上で、非常に重要な成果となっています。

調査の実施から報告書の刊行まで、大学内外の関係機関の御協力を得て、滞りなく事業を進めることができました。ここに厚くお礼申し上げるとともに、本書で報告されるデータが各方面で活用されることを望むものです。

東北大学埋蔵文化財調査室
室長 阿子島 香

例　言

1. 本調査報告は、東北大學構内において、東北大學埋蔵文化財調査室が2013年度に行った仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点の調査成果をまとめたものである。
2. 報告する遺跡と略号、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

遺跡と略号：仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）
調査期間：2013年4月1日～12月19日
調査担当者：藤沢 敦・柴田恵子・菅野智則・大久保弥生
3. 調査・整理作業は、東北大學埋蔵文化財調査室が行った。
4. 本報告の編集・執筆は、菅野智則・柴田恵子・石橋宏が担当した。なお、第Ⅷ章に関しては、調査担当者の一人である藤沢敦（現東北大學総合学術博物館）からご教示を頂いた。

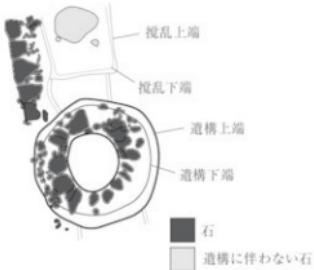
第Ⅰ章 石橋、菅野
第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅳ章・第Ⅴ章 菅野
第Ⅵ章 柴田
5. 英文要旨については、柴田恵子が作成し、阿子島香が校訂した。
6. 第Ⅶ章は、古代の森研究舎の吉川純子氏による分析報告を、本報告書の体裁に合わせて編集した。
7. 遺物実測図の作成にあたっては、原図はすべて手書きで作成している。この遺物実測図と遺構の測量図は、デジタルトレースによって原版を作成した。また、磁器と陶器の文様部分の図面原版は、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージジャーを用いたデジタル写真から作成した。
8. 遺物写真については、その大体は有限会社仙台写真工房に委託して撮影した。また、図版22～24の一部と図版30・31の遺物写真については、柴田が撮影した。
9. これまでに、本調査の概要是『年次報告』2013、「平成25年度宮城県遺跡調査成果発表会」で公表してきた。それらの内容より、本報告書の内容が優先する。
10. 発掘調査および整理・報告書作成にあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力を賜った。記して感謝申しあげる（敬称略）。

仙台市教育委員会、宮城県教育委員会、東北大學大学院文学研究科考古学研究室、
天野順陽（宮城県教育委員会）、鹿又喜隆（東北大學）、斎野裕彦（仙台市教育委員会）、
鈴木 隆（仙台市教育委員会）、波部 紀（仙台市教育委員会）、
本田秀生（金沢城調査研究所）、滝川重徳（金沢城調査研究所）
11. 出土遺物・調査記録は、東北大學埋蔵文化財調査室で保管・管理している。

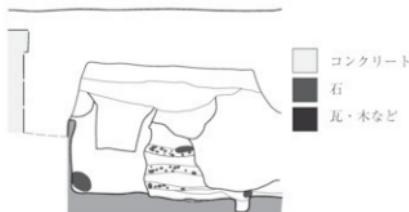
凡 例

1. 図1・2の背景の元図は、国土地理院発行の1万分の1地形図〔青葉山〕を使用した。図3-1の空中写真は、整理番号USA、コース番号M182-2、写真番号157、1952（昭和27）年11月2日撮影のものである。図3のほかの地形図の出典は、それぞれに示した。
 2. 掘図・写真等の方位は、それぞれに示した。
 3. 遺物の実測図および写真の縮尺は、それぞれに示した。
 4. 引用・参考文献は、巻末にまとめた。また、本文中で当室が刊行した報告書類を引用する際には、下記のように略した。
- 例 「東北大学埋蔵文化財調査年報」1 … 「年報」1
「東北大学埋蔵文化財調査室年次報告」2008 … 「年次報告」2008
「東北大学埋蔵文化財調査報告」1 … 「調査報告」1
5. 元号と西暦の標記は、通常は「西暦（元号）年」（例えば「2015（平成27）年」）と表記する。ただし、近世・近代が主体となる場合は、「元号（西暦）年」（例えば「天明6（1786）年」）と表記する。
 6. 掘図中の表記は、特に指示しないものについては、以下の通りである。これら以外については、それぞれに指示した。

①遺構平面図



②遺構断面図



目 次

巻頭カラー図版

序

例言

凡例

目次

図目次

表目次

図版目次

第Ⅰ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史	1
1. 仙台城と周辺武家屋敷の立地	1
2. 仙台城と仙台城下の武家屋敷	1
(1) 仙台城の歴史	1
(2) 仙台城周辺の武家屋敷の変遷	5
(3) これまでの調査区と屋敷地との対応	7
3. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査	11
第Ⅱ章 調査の方法と経過	17
1. 調査地点の位置と調査経緯	17
2. 調査の方法と経過	17
(1) 発掘調査の経過	17
(2) 記録方法	20
(3) 遺構の名称について	20
(4) 遺物の取り上げについて	22
(5) 整理作業	22
第Ⅲ章 基本層序と時期区分	24
1. 基本層序	24
2. 時期区分	24
第Ⅳ章 検出遺構	30
1. Ia期の遺構	30
2. Ib期の遺構	37
3. Ic期の遺構	43
4. I期以降の遺構	49
(1) II期以前の遺構	49
(2) II期の遺構	49
(3) III期の遺構	52
(4) I期以降における遺構の変遷	53
第V章 出土遺物	54
1. 陶磁器	54
2. 土師質土器・瓦質土器	56
3. 瓦	56
4. 金属製品	58
5. その他の遺物	59
第VI章 出土木材の樹種同定	73
1. 6号溝出土樹木の樹種同定	73
2. 11号溝出土雜手の樹種同定	74
第VII章 検出遺構の検討	75
1. I期の様相	75
2. II期・III期の様相	77
引用・参考文献	
英文要旨	
写真図版	
報告書抄録	

図 目 次

図1 仙台城周辺の地形区分図·····	2	図20 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (4) ····	39
図2 仙台城と二の丸の位置·····	3	図21 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (5) ····	40
図3 川内地区周辺の地形·····	6	図22 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (6) ····	41
図4 川内地区周辺の絵図・地図 (1) ····	8	図23 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (7) ····	42
図5 川内地区周辺の絵図・地図 (2) ····	9	図24 武家屋敷地区第16地点における	
図6 川内北地区調査地点·····	12	堀 (新段階) の分布範囲 ····	44
図7 武家屋敷地区第16地点調査区の位置·····	18	図25 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (8) ····	45
図8 武家屋敷地区第16地点調査区模式図·····	19	図26 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (9) ····	46
図9 武家屋敷地区第16地点東壁断面図·····	25	図27 堀 (新段階) 墓土の対応関係 ····	48
図10 武家屋敷地区第16地点東壁断面図注記···	26	図28 武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期以前の遺構 ····	50
図11 武家屋敷地区第16地点における		図29 武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期の遺構 ····	51
近代から現代の遺構 (1) ····	27	図30 武家屋敷地区第16地点出土磁器 ····	60
図12 武家屋敷地区第16地点における		図31 武家屋敷地区第16地点出土陶器 (1) ····	60
近代から現代の遺構 (2) ····	28	図32 武家屋敷地区第16地点出土陶器 (2) ····	61
図13 武家屋敷地区第16地点における		図33 武家屋敷地区第16地点出土	
近代から現代の遺構 (3) ····	29	土師質土器・瓦質土器 ····	61
図14 武家屋敷地区第16地点における		図34 武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒棟瓦 ····	61
堀 (古段階) とその他の遺構 ····	31	図35 武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦 ····	62
図15 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (1) ····	32	図36 武家屋敷地区第16地点出土古錢 ····	62
図16 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (2) ····	33	図37 武家屋敷地区第16地点出土煙管 ····	62
図17 堀 (古段階) 墓土の対応関係 ····	35	図38 6号溝出土木材の顕微鏡写真 ····	73
図18 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (3) ····	36	図39 11号溝出土縫手の顕微鏡写真 ····	74
図19 武家屋敷地区第16地点における		図40 武家屋敷地区第16地点付近の道路の推定 ····	76
堀 (古段階) 上面の遺構 ····	38	I b期における道路の推定 ····	

表 目 次

表1 仙台藩の家格·····	10	表9 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表 (近代・手書き) ····	63
表2 武家屋敷地区第13地点関連絵図人名·····	10	表10 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表 (近代・描絵) ····	64
表3 武家屋敷地区第16地点関連絵図人名·····	10	表11 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表 (近代・銅版転写) ····	64
表4 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧 (1) ····	15	表12 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表 (近代・白磁) ····	64
表5 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧 (2) ····	16		
表6 武家屋敷地区第16地点遺構名称対照表 ····	21		
表7 武家屋敷地区第16地点遺構属性表 ····	23		
表8 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表 (近世) ····	63		

表13	武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表 (近代・型打ち・クロム青磁・色釉) ······	65
表14	武家屋敷地区第16地点出土陶器集計表 ······	65
表15	武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表 (1) ······	66
表16	武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表 (2) ······	67
表17	武家屋敷地区第16地点出土土器・石製品・ 木製品・その他集計表 ······	68
表18	武家屋敷地区第16地点出土金属製品集計表 ······	68
表19	武家屋敷地区第16地点出土磁器観察表 ······	69
表20	武家屋敷地区第16地点出土土師質土器・ 瓦質土器観察表 ······	69
表21	武家屋敷地区第16地点出土陶器観察表 ······	70
表22	武家屋敷地区第16地点出土便所 埋め甕 (近代) 観察表 ······	70
表23	武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦観察表 ······	71
表24	武家屋敷地区第16地点出土軒桟瓦観察表 ······	71
表25	武家屋敷地区第16地点出土軒平瓦類観察表 ······	71
表26	武家屋敷地区第16地点出土平瓦観察表 ······	71
表27	武家屋敷地区第16地点出土棟瓦観察表 ······	72
表28	武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦観察表 ······	72
表29	武家屋敷地区第16地点出土古錢観察表 ······	72
表30	武家屋敷地区第16地点出土煙管観察表 ······	72
表31	武家屋敷地区第16地点出土金属製品観察表 ······	72
表32	竹櫛櫛手の樹種 ······	74

図 版 目 次

図版1	武家屋敷地区第16地点全景 (1).....	83
図版2	武家屋敷地区第16地点全景 (2).....	84
図版3	武家屋敷地区第16地点全景 (3).....	85
図版4	武家屋敷地区第16地点の遺構 (1).....	86
図版5	武家屋敷地区第16地点の遺構 (2).....	87
図版6	武家屋敷地区第16地点の遺構 (3).....	88
図版7	武家屋敷地区第16地点の遺構 (4).....	89
図版8	武家屋敷地区第16地点の遺構 (5).....	90
図版9	武家屋敷地区第16地点の遺構 (6).....	91
図版10	武家屋敷地区第16地点の遺構 (7).....	92
図版11	武家屋敷地区第16地点の遺構 (8).....	93
図版12	武家屋敷地区第16地点の遺構 (9).....	94
図版13	武家屋敷地区第16地点の遺構 (10).....	95
図版14	武家屋敷地区第16地点の遺構 (11).....	96
図版15	武家屋敷地区第16地点の遺構 (12).....	97
図版16	武家屋敷地区第16地点の遺構 (13).....	98
図版17	武家屋敷地区第16地点の遺構 (14).....	99
図版18	武家屋敷地区第16地点の遺構 (15).....	100
図版19	武家屋敷地区第16地点の遺構 (16).....	101
図版20	武家屋敷地区第16地点の遺構 (17).....	102
図版21	武家屋敷地区第16地点の遺構 (18).....	103
図版22	武家屋敷地区第16地点出土磁器.....	104
図版23	武家屋敷地区第16地点出土陶器 (1).....	104
図版24	武家屋敷地区第16地点出土陶器 (2).....	105
図版25	武家屋敷地区第16地点出土 土師質土器・瓦質土器.....	105
図版26	武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒棟瓦	106
図版27	武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦.....	106
図版28	武家屋敷地区第16地点出土煙管.....	106
図版29	武家屋敷地区第16地点出土古銭・金属製品	107
図版30	武家屋敷地区第16地点出土近代遺物 (1)	107
図版31	武家屋敷地区第16地点出土近代遺物 (2)	108

第Ⅰ章 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区の立地と歴史

1. 仙台城と周辺武家屋敷の立地

仙台平野は、宮城県のはば中央部に位置し、西は奥羽脊梁山脈とそこから派生する丘陵地帯に接し、東は仙台湾に開いた平野である。狹義では、北は仙台市域北部の丘陵地帯、南は阿武隈川によって区切られる範囲を指す。仙台平野には、奥羽脊梁山脈に源を発した河川が西から東へ流下している。北から七北田川、広瀬川、名取川である。この中の広瀬川は、丘陵地帯を抜けて仙台平野に入ると、青葉山などの丘陵地の北東麓を流下し、やがて名取川に合流し、太平洋にそいでいる。この広瀬川の両岸には、河岸段丘が発達している。河岸段丘は、高位から台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と分けられており、河岸段丘の間は段丘崖となっている。

仙台城は、宮城県仙台市青葉区川内および荒巻に所在する。現在の仙台市街地中心部から、広瀬川を西に渡った川内・青葉山地区に位置しており、市街地西部に張り出す青葉山丘陵の東縁辺と、その間に広がる河岸段丘上に立地している（図1）。広瀬川が青葉山などの丘陵地の北東麓を流下しているため、広瀬川の南西側にあたる川内地区の河岸段丘はさほど広くない。一方、広瀬川の北東側には、広い河岸段丘面が連なっており、その東縁は活断層である長町一利府線によって画され、沖積平野に接している。仙台城下のほとんどの範囲は、この広瀬川北東側の河岸段丘上に位置している。現在の仙台市街地中心部も、この広瀬川の河岸段丘上に立地する。

仙台城の構成は、大きく本丸・二の丸・三の丸（東丸）に分かれる（図2）。本丸は広瀬川と竜の口渓谷に囲まれた標高115～138mの、青葉山の高位段丘面（青葉山Ⅲ面）に立地している（図1）。本丸の北西側に二の丸が、北東側に三の丸が配置されているが、本丸だけは一段高い高位段丘面に位置している。本丸の東側は、60m以上の断崖となっている。現在の広瀬川は、本丸の立地する丘陵からやや離れたところを流れている。しかし江戸時代には、広瀬川は大きく蛇行して、本丸東側の崖下までせまっていた。本丸の南側は、広瀬川の支流である竜の口渓谷の急崖で画されている。本丸は防御を重視し、このような急峻な地形を利用して造られている。

本丸の北側に広がる川内地区は、広瀬川によって形成された河岸段丘の中の、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面にあたる。二の丸は標高54～71mの上町段丘面に、三の丸は標高40m前後の下町段丘面に立地する。周辺の武家屋敷も、西側の標高の高い部分から広瀬川に向かって順に、上町段丘面・中町段丘面・下町段丘面に立地する。東北大学の川内北地区は、東側の一段低いグラウンド部分が中町段丘面にあたり、それ以外の区域は上町段丘面に相当する。

これらの河岸段丘を開析しつつ、広瀬川の支流が、西から東へ流れている。これらの支流のひとつである千貫沢が、二の丸の北側を流れおり、千貫沢をはさんで南側が二の丸地区、北側が二の丸北方武家屋敷地区となる。千貫沢は、標高差の大きい河岸段丘を横切る形で流下していることから、これらの段丘面を深く切り込んでいる。二の丸裏門から北に延びる道路が千貫沢を渡るところに造られた千貫橋付近では、段丘面の標高が57m程度、千貫沢の沢筋の標高は46m程度である。千貫橋付近の段丘面と千貫沢の標高差は11mあまりになり、深くて急峻な沢筋となっている。大橋付近を流れる広瀬川の河原の標高は22m程度で、千貫橋付近の段丘面との標高差は、およそ35mとなる。また大手門の北側にも沢筋が残っており、仙台城の造営によって改変されていると思われるが、本来は急峻な沢筋であったと考えられる。

2. 仙台城と仙台城下の武家屋敷

(1) 仙台城の歴史

仙台城は、1600（慶長15）年から、仙台藩初代藩主である伊達政宗によって築城が開始された近世城郭である。その後、幾たびかの改変を受けつつ、幕末まで仙台藩の中核として機能していく。この仙台城は、本丸と二の丸の一部を除き、2003（平成15）年に国史跡に部分指定されている。

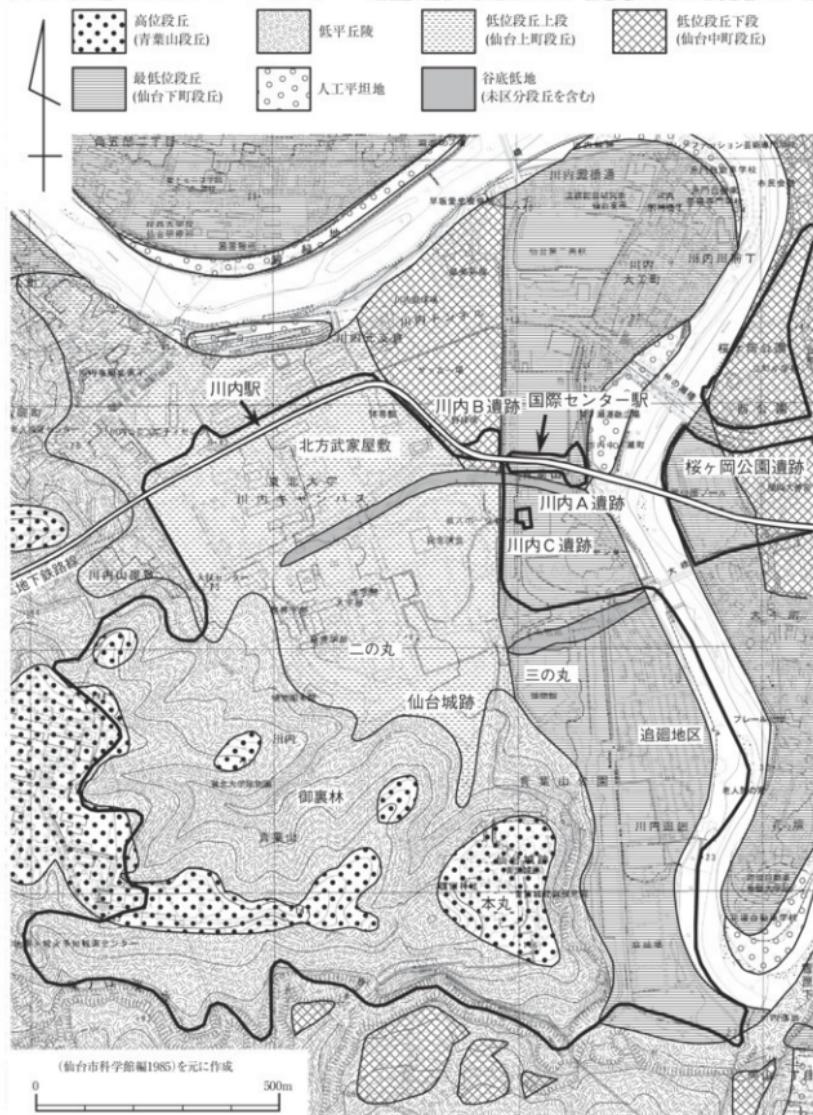


図1 仙台城周辺の地形区分図
Fig.1 Topographical map around Sendai Castle

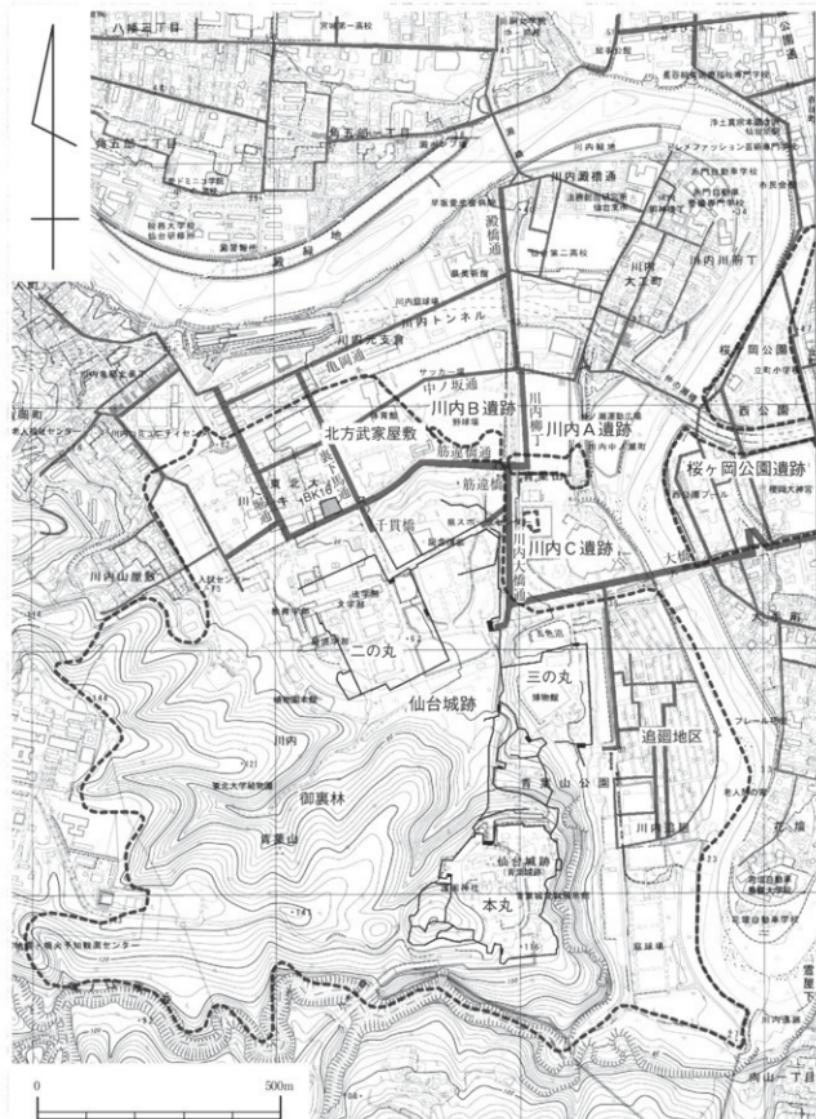


図2 仙台城と二の丸の位置
Fig.2 Distribution of Sendai Castle

この伊達政宗による築城以前には、国分氏の千代城が存在したことが知られていたが、その実態は不明なままであった。1998(平成10)年の仙台市教育委員会による本丸石垣修復工事に伴う調査の際に、虎口・堅堀・平場・通路などの遺構が検出され、初めて国分氏の千代城の遺構の一端が明らかとなった（金森安孝・渡部紀2009）。千代城は、文献記録や発掘調査成果の検討から、築城期は不明であるが、16世紀末の天正年間（1573～92年）頃に廃絶されたと考えられている。

伊達政宗によって造営された仙台城の本丸は、1602（慶長7）年には、土木工事にあたる普請がほぼ完成していたと考えられる。各種の殿舎建築は継続中であったと思われ、本丸の中心建物となる「大広間」は、1610（慶長15）年に完成したとされる。築城時に、本丸北側には石垣が築かれるが、石垣修復に伴う発掘調査によって、3時期に渡る変遷が明らかとなった。築城期のⅠ期石垣は、1616（元和2）年の地震で大きな被害を受け、Ⅱ期石垣が築かれる。Ⅱ期石垣も、1668（寛文8）年の地震で大きく崩壊し、現存するⅢ期石垣が造られたことが明らかとなっている（金森安孝・渡部紀2009）。

仙台城が築城された時点での、本丸以外の施設を含めた仙台城の全体像は、必ずしも明らかではない。

後に三の丸（東丸）とされる区域では、仙台市教育委員会による発掘調査によって、政宗時代の茶室や四阿の可能性のある建物跡などが発見されている。池跡も検出されており、庭園が伴うものと推定されている（佐藤洋ほか1985）。本丸に付随した施設として、整備が進められていたと考えられる。

この段階では、二の丸は造られておらず、後に二の丸が造られる場所には、政宗の四男である伊達宗泰の屋敷があったとの伝承がある。しかし、この伝承を検証できる資料はない。本丸の築造が進められた慶長年間（1596～1615年）には、伊達宗泰は元服前の幼少期であり、この時期に伊達宗泰の屋敷が置かれていたと想定することは難しい。伊達宗泰の屋敷が置かれていたとしても、本丸築城期より遅れる可能性もある。また、他の重臣の屋敷が置かれていた可能性を示す史料もある。文献史料に残されていない、これら以外の屋敷が置かれた可能性も検討していく必要がある。いずれにせよ、二の丸地区第9地点（NM9）などの発掘調査では、江戸時代初頭に遡る遺構が検出されており、本丸築城期から、何らかの施設が置かれていたことは確実である（『年報』8・9）。

1620（元和6）年には、伝伊達宗泰屋敷の北側に、政宗の長女五郎八（いろは）姫の居館である「西屋敷」が造られる。五郎八姫は、伊達政宗の正室愛姫との間に生まれた長女で、1599（慶長4）年に徳川家康の六男忠輝と結婚し、1606（慶長11）年に奥入れる。しかし、1616（元和2）年に忠輝が、大阪夏の陣の際の遅参・怠戦と、家臣による旗本殺害に対する不謝罪を理由に改易され、伊勢国に配流されると、五郎八姫は政宗の江戸屋敷へ帰され、さらに1620（元和6）年には仙台に移ることになった。この五郎八姫の、仙台における居所として造られたのが「西屋敷」である。1645（正保2）年の『奥州仙台城絵図』（正保絵図）に描かれており、東西102間、南北60間であったことが記されている。東側に門が描かれ、東向きの屋敷であったことが判る。二の丸地区第5地点（NM5）の調査では、西屋敷期の礎石建物跡などが発見されており、その西側に複雑な形態の池が連なる庭園が広がっていたことが判明している（『年報』6・7）。

伊達政宗は、1627（寛永4）年、仙台城下の南東側にあたる現在の仙台市若林区古城において、若林城を造営する。「仙台屋敷構」として幕府の許可を得たものであるが、周囲に堀と土塁をめぐらした城郭である。1628（寛永5）年に若林城が完成すると、政宗は国元では若林城を居城とし、仙台城に滞在するのは、儀式など特別な場合に限られるようになる。対照的に、後の二代藩主伊達忠宗は、国元では仙台城に滞在していた。この若林城の建物が、後の二の丸造営の際に、移築されていることが仙台藩の公式記録である『治家記録』に記されている。若林城跡の第5次調査と第8次調査で調査された1号建物跡が、仙台城二の丸を描いた「御二之丸御指図」に見られる「大台所」と一致することなどが明らかとなり、若林城の建物を仙台城二の丸に移築したという文献記録を裏付けることとなった（佐藤淳ほか2008・2010）。

伊達政宗は1636（寛永13）年に死去し、伊達忠宗が二代藩主となる。忠宗は、1638（寛永15）年に、伝伊達宗

泰の屋敷跡に二の丸を造営する。二の丸が造られると、仙台藩の政治・諸儀式のほとんどは二の丸で行われるようになり、藩主の居所も二の丸へ移る。これ以降、二の丸が仙台城の実質的な中枢となり、この状態は幕末まで維持されていくこととなる。二の丸の造営とはほぼ同じ頃に、三の丸（東丸）には、米蔵が置かれるようになつたと考えられる。

1638（寛永15）年に二の丸が造営された時点では、五郎八郷の「西屋敷」が、二の丸の北隣に存続していた。五郎八郷が1661（寛文元）年に死去すると、もとの「西屋敷」は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵や作業所など、二の丸に附属する実務的な施設が置かれるよう変化する。

17世紀末から18世紀初頭の元禄年間には、四代藩主伊達綱村によって、二の丸は大改造が施される。その際、もとの「西屋敷」の敷地は二の丸に取り込まれ、中奥がもとの「西屋敷」の範囲に大きく拡張された。仙台城では、藩主と側室の居住の場を「中奥」と呼んでいた。この改造によって、仙台城は完成した姿を迎えた。二の丸は、1804（文化元）年の火災ではほぼ全焼する被害を受けつつも、従来通り再建され、幕末まで仙台城の中枢として維持されていく。

明治維新による新政府の成立と幕藩体制の崩壊により、仙台城も大きく変化する。仙台藩は奥羽越列藩同盟の中心として新政府に対抗するが、相次ぐ軍事的敗北の中で同盟は瓦解する。仙台藩は1868（慶応4・明治元）年9月に新政府に降伏謝罪し、12月には領地・領民をいったん取り上げられた上で、28万石を新たに拝領し存続が許された。1869（明治2）年の版籍奉還により、藩主伊達宗基が仙台藩知藩事となり、二の丸には藩の統治機関たる勤政庁が置かれた。1871（明治4）年の廃藩置県後は、仙台城が明治政府の管轄下に移り、二の丸には東北鎮台（後に仙台鎮台）が置かれる。本丸の建物は、明治の早い時期に取り壊されるが、二の丸の建物は鎮台本営として引き続き利用された。しかし1882（明治15）年の火災で、二の丸建物のほとんどが焼失してしまう。そして1886（明治19）年には仙台鎮台から陸軍第二師団に改称され、1888（明治21）年には正式に師団常備軍制度が施行され、敗戦まで続くこととなる。二の丸跡には師団司令部が置かれ、三の丸跡には陸軍倉庫が置かれていた。本丸跡には、1904（明治37）年に仙台招魂社（後の護国神社）が建てられ、戦没者を祀る場所へと変わる。1905（明治38）年には地形図が作成されている（図3-2）。今回報告する調査区近辺である川内北キャンパスは、「歩兵第二十九連隊營」と記載されており、方形に閉むように大規模な建物が建てられていたことがわかる。

1945（昭和20）年7月21日の仙台空襲の際には、仙台城の建物として最後まで残っていた大手門・脇櫓と巽門が焼失する。敗戦後は、二の丸跡をはじめとする川内地区のかつての軍用地が、米軍の駐屯地であるキャンプ・センダイとなる。この頃の空撮写真には、キャンプ・センダイの建物配置が明瞭に記録されている（図3-1）。そして、1957（昭和32）年に米軍からの返還を受け、二の丸地区のほとんどは東北大大学が使用し、一部は仙台市の公園となった。大学の当初の建物は、米軍の建物をそのまま利用していたものであり、1969（昭和44）年の地形図にも、米軍期とほぼ同じ状況であることが記録されている（図3-4）。

（2）仙台城周辺の武家屋敷の変遷

仙台城下は、仙台城の造営と併行して、その建設が進められていく。1601（慶長6）年正月11日に、仙台城の普請始めが行われ、同じ日に「御城下地形ノ絵図を以テ諸士等ノ屋敷割仰付ラル」との記録が残されている（『貞山公治家記録卷之二十一』）。この時以降、城下の建設が進められていくものと考えられる。江戸時代の地図である『仙台萩』には、1602（慶長7）年に、仙台に移る以前の本拠であった岩出山の土民に、仙台へ移るよう命令したことが記されている。その戸数などは不明ながら、家臣団や町方をはじめ多数が移住したと見られている。仙台城下の範囲は、その後徐々に拡大し、それに伴い再配置が行われる場合もあったが、基本的な構成は踏襲されていく。川内地区は、一部の寺社と職人屋敷を除くと、侍屋敷として使われていた。

仙台城下の様相を知ることができる基本的な資料は、城下絵図である。これらの城下絵図には、年代が近接す



1. 川内地区周辺地形空撮 (1952(昭和27)年11月2日撮影)



2. 川内地区周辺地形図①
(1905(明治38)年測量「仙臺南部」)



3. 川内地区周辺地形図②
(1928(昭和3)年測量「仙台西北部」)



4. 川内北地区周辺地形図①
(1969(昭和44)年修正「国土基本図X QE40」)



5. 川内北地区周辺地形図②
(2007(平成19)年修正「青葉山」)

図3 川内地区周辺の地形
Fig.3 Topographical map around Kawauchi campus

2・3 : S=1/25,000

4・5 : S=1/10,000

るものもあるため、時期による変遷が判るように選択して、川内北地区周辺の部分を示したのが、図4・5である。道路の変化を見るため、明治時代の地図についても、併せて示しておいた。

仙台城下を描いた城下絵図で最も古い絵図は、1645（正保2）年の正保絵図である（図4-1）。これは幕府提出用絵図のため、細かな屋敷割は記されていないが、仙台城の周辺には「侍屋敷」と記されており、この時点では武家屋敷が広がっていることが判る。これまでの川内北地区での調査でも、各所で江戸時代初頭に遡る遺構や遺物が発見されており、この区域では江戸時代初頭から屋敷地が整備されていったものと考えられる。

この正保絵図以降の藩政用絵図には、屋敷割が記され、人名が書き込まれたものが多くある。川内地区においては、大手門の周囲などに最も上級の家臣の屋敷が置かれ、それ以外の区域にも上級家臣の屋敷が多い。東北大学の川内北地区も、比較的上級の家臣の屋敷が置かれていた。川内地区全体の屋敷の様相については、「調査報告」1において、城下絵図をもとにした検討結果を掲載しているので、詳細はそちらを参照していただきたい。

仙台城下絵図で、川内地区的道路の位置を見ると、正保絵図（図4-1）以降、1882（明治15）年の地図（図5-13）に至るまで、基本的に変化がないことが判る。江戸時代における道路の位置の復元についても、「調査報告」1において詳しく述べてある。

二の丸と北方武家屋敷との境には、千貫沢とそれを広げた堀がある。この千貫沢や堀沿いに「筋違橋通」が東西に走っているが、それより北側には東西方向の道路としては「中ノ坂通」と「亀岡通」の2本がある。ところが現在は、千貫沢沿いの道路の北側には、東西方向の道路は1本だけである。現在のような道路は1893（明治26）年の地図（図5-14）において、初めて見られるようになる。これと同時に、大手門から北側へ延びる道路も改変されている。大手門前から北へ延びる道路は、もともとは、千貫沢を渡る筋違橋の北側で鉤の手状に屈曲していたが、この時にまっすぐ北へ延びる道路へ変わっている。同様に、広瀬川を渡る大橋から大手門へいたる道路も、もとは大手門手前で屈曲していたのが、大橋からまっすぐ延びる形に変わっている。1889（明治22）年の広瀬川の洪水によって木橋であった大橋が流失し、第二師団の要請で鉄橋が架けられることとなり、1892（明治25）年に竣工した際に、大橋から大手門へ至る道路が直線になった。川内北地区の道路がつけ替えられたのが、大橋鉄橋架橋と同時かどうかは確認できていないが、1888（明治21）年の第二師団の設置以降、一連の過程で川内地区の整備が進められていったものと考えて良いであろう。

明治時代の地図も、初期のものは、全てを正確に測量して作成されたものではない。ある程度信頼が置けるものは、1893（明治26）年の地図以降であるが、この段階では川内北地区周辺の道路は、改変された後である。改変以前の道路を正確に測量した地図は、確認できていない。したがって、絵図や明治時代初期の地図をもとに、江戸時代の道路を正確に復元することは難しい。南北方向の道路については、ある程度復元根拠がある。しかし東西方向の道路である「中ノ坂通」と「亀岡通」については、復元根拠を欠いており、正確な位置を復元することは難しい。このような限界を踏まえて、図2では、これまでの調査・検討の成果から、江戸時代の道路の位置を、現在の地図上に推定復元している。

千貫沢の北側を東西に走るのが「筋違橋通」である。その北側を東西に走るのが「中ノ坂通」と「亀岡通」である。二の丸裏門である台所門を出て、千貫橋を渡って北へ延びる道路が「裏下馬通」で、それとほぼ並行して西側にあるのが「大堀通」である。筋違橋から北へ延び「中ノ坂通」に至るのが「川内柳丁」、さらに北へ延び、濱橋へ至るのが「濱橋通」である。

（3）これまでの調査区と屋敷地との対応

仙台藩の家格は、家格の高い順から、一門・一家・準一家・一族・宿老・着座・太刀上・召出・平士・組士・卒というように分けられていた（表1）。平士は、仙台藩家臣団の主力を構成した家臣で、多くは大番組に属する大番士であった。平士（大番士）は、登城した際に控える部屋の名前をとって、上位から虎の間番士・中の間



1. 正保2（1645）年 奥州仙台城絵図



2. 宽文4（1664）年 仙台城下絵図



3. 宽文8・9（1668・69）年 仙台城下絵図



4. 延宝6～8（1678～80）年 仙台城下大絵図



5. 延宝9～天和3（1681～83）年 仙台城下絵図



6. 元禄4・5（1691・92）年 仙台城下五箇封絵図



7. 享保9（1724）年以降 仙台城下絵図

1・2・6（小林清春監修1994）

3・4（阿刀田今造1976：第2版）

5・7（吉岡一男編2005）

図4 川内地区周辺の絵図・地図（1）
Fig4 Picture maps around the Kawauchi area (1)



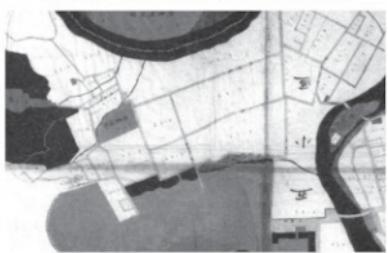
8. 宝曆10～明和3（1760～66）年 仙台城下絵図



9. 天明6～寛政元（1786～89）年 仙台城下絵図



10. 安政3～6（1856～59）年 安静補正改革仙府絵図



11. 明治8（1875）年 宮城郡仙台町地図



12. 明治13（1880）年 宮城県仙台区全図



13. 明治15（1882）年 仙台区及近傍村落之図



14. 明治26（1893）年 仙台市測量全図

9・10・14（小林清春監修1994）

8・11～13（吉岡一男編2005）

図5 川内地区周辺の絵図・地図（2）
Fig5 Picture maps around the Kawauchi area (2)

表1 仙台藩の家格
Tab.1 List of status in Sendai-han

家格	人数	備考
一門	11	角田石川氏・豆原伊達氏・水沢伊達氏・涌谷伊達氏・登米伊達氏・岩谷堂伊達氏・岩出山伊達氏・宮床伊達氏・川崎伊達氏・白河氏・三沢氏
一家	17	駒貝・秋保・柴田・小栗用・塙森・大桑・泉田・村田・黒木・石母田・瀬上・中村・石川・中目・豆原
準一家	10	猪俣代・天童・松前・草名・本宮・高皇・葛西・上遠野・保土原・福原
一族	22	大立目・大町(御沢郡)・大屋・内矢・西大桑・小原・西大立目・中島(江刺郡)・宮内・中島(伊具郡)・茂庭・造藤・佐藤・島中・片平・下都山・沼田・大町(宮城郡)・高城・大松沢・石母田・坂
宿老	3	着座のうち一番座の三冢(造藤・但木・後藤)
着座	28	正月等の儀式で登城し着座して藩主に挨拶する家臣
太刀上	10	正月賀札に太刀を献上し藩主から盃を頂戴する家柄
召出一番座	38	正月宴会に召し出される家柄
召出二番座	51	正月宴会に召し出される家柄
平士(1000石以上)	6	
平士(500石以上)	68	
平士(100石以上)	994	
合計	1258	

表2 武家屋敷地区第13地点間連絆団人名
Tab.2 List of names of samurai lived at this location

年代	団	「筋造橋通」沿い	
		「裏下馬通」交差点から1区画目	「裏下馬通」交差点から2区画目
1664(寛文4)年	団4-2	記載無し	大河内善左衛門 不明 20貫文
1668・69(寛文8・9)年	団4-3	記載無し	大河内善左衛門 不明 20貫文
1678~80(延宝6~8)年	団4-4	三沢頼母 一門 100貫文 北側と同一区画	大河内善左衛門 不明 20貫文
1681~83(延宝9~天和3)年	団4-5	記載無し	大河内善左衛門 不明 20貫文
1691・92(元禄4・5)年	団4-6	三沢左京 一門 100貫文	太田次郎兵衛 召出 130貫文
1724(享保9)年以降	団4-7	黒沢要人 着座 300貫文 北側と同一区画	岩山競穂介 虎間 62貫文
1760~66(宝暦10~明和3)年	団5-8	大立日下野 一族 100貫文 北側と同一区画	記載無し
1786~89(天明6~寛政元)年	団5-9	高泉主計 準一家 270貫文 北側と同一区画	古内進 不明 不明
1856~59(安政3~6)年	団5-10	布施備前 着座 170貫文 北側と同一区画	佐伯勇五郎 不明 不明

表3 武家屋敷地区第16地点間連絆団人名
Tab.3 List of names of samurai lived at this location

年代	団	「筋造橋通」沿い	
		東区画	西区画
1664(寛文4)年	団4-2	御作事小屋	瀧谷益庵 内科医 5貫文
1668・69(寛文8・9)年	団4-3	御小屋	瀧谷益庵 内科医 5貫文
1678~80(延宝6~8)年	団4-4	御作事小屋	瀧谷益庵 内科医 5貫文
1681~83(延宝9~天和3)年	団4-5	市川江左衛門 不明 不明	瀧谷益安 内科医 5貫文
1691・92(元禄4・5)年	団4-6	北園書 召出 100貫文	東側と同一区画
1724(享保9)年以降	団4-7	黒沢正太夫 不明 不明	真山左衛門 虎間 270貫文
1760~66(宝暦10~明和3)年	団5-8	富塚平馬 不明 不明	真山太之助 虎間 270貫文
1786~89(天明6~寛政元)年	団5-9	記載無し	真山九郎兵衛 虎間 200貫文
1856~59(安政3~6)年	団5-10	佐々良前 着座 303貫文	真山大吉 虎間 200貫文

番士・次の間番士・広間番士に分けられた。組士と卒が下級藩士となる。なお仙台藩では、生産高や知行高を、一般的な石高ではなく、戦国時代以来の貫高で表示していた。貫高と石高の換算は、寛永検地を経て、1貫（1000文）を10石に換算するように定められた。寛永検地以前の換算については、いくつかの説がある。ただし、ここで検討材料とする屋敷拌領者が記載されている藩政用絵図が、寛文4年（1664年）以降のものしか存在せず、全て寛永検地より新しい時期のものとなるので、1貫を10石と換算すれば良いこととなる。

武家屋敷地区第13地点（BK13）は、「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、「筋違橋通」のすぐ北側にある場所であると考えられる（図6）。絵図と対比させて考えると、調査地点は、「筋違橋通」に面し、「裏下馬通」との交差点から1軒目と2軒目の屋敷の南端付近で、この2軒の屋敷にまたがると判断された（「調査報告」2）。

2軒の屋敷について、これらを使用していた人名を、城下絵図から拾い出し、人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格について整理したのが表2である。詳細は「調査報告」2を参照いただきたいが、二の丸奥門の「台所門」を出て、「下馬厩」が置かれている脇という重要な場所であり、武家屋敷地区第13地点周辺は江戸時代を通じて、かなり上級の家臣の屋敷が並んでいた区域と言える。

今回報告する武家屋敷地区第16地点（BK16）は、絵図との対応を図ると「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の西側に位置する。この場所は、「裏下馬通」と「大堀通」に東西を画され、北側は「中ノ坂通」、南側は「筋違橋通」と二の丸北側の堀に画された区画の南北付近にあたる。絵図ではこの区画は中央で大きく東西に2分され、さらに2分された区画は南北で2ないし3区画に区分して屋敷地として使用されている。本調査区は、おおむね東側の区画に相当するものと考えられる。同様に絵図の人名をもとに、これらの家臣の禄高や家格について整理したのが表3である。

その東側の区画では、1664（寛文4）年から1678～80（延宝6～8）年の間は、「御作事小屋」「御小屋」と書かれている。1681～83（延宝9～天和3）年の絵図では、禄高等は不明であるが「市川江左衛門」の名前が記載されており、以後、「北団書」、「黒沢正太夫」、「富塙平馬」と変遷する。1856～59（安政3～6）年の絵図では、着座で禄高303貫文の奉行職佐々茂前が東側の区画全域を屋敷地として利用している。なお、西側の区画では、17世紀中葉から後半は内科医の瀧谷益庵に利用され、1724（享保9）年以降の絵図では、真山の姓を持つ一族が代々利用している。虎間番士としては禄高200貫文以上とかなり高い。

茂前を輩出した佐々氏は畠山氏の旧臣で、初代藩主政宗からの家臣であり、真山氏も政宗以前からの譜代である。特に江戸時代の中頃から後半期にかけて上級家臣の屋敷地として利用されている。

武家屋敷地区第16地点（BK16）と武家屋敷地区第13地点（BK13）は「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点を挟んで接し、同じ「筋違橋通」の北側にあたることから、屋敷地の変遷と景観を考える上で重要な情報が蓄積したと言える。

3. 仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区におけるこれまでの調査

仙台城の考古学的調査は、本丸・二の丸・三の丸などの各地区において実施されている。二の丸地区については、東北大学の施設整備事業などに先立ち、東北大学によって調査が実施してきた。三の丸地区では、仙台市博物館の建て替えに伴い、仙台市教育委員会による調査が実施されている。本丸地区では、石垣修復工事に伴う仙台市教育委員会による調査が、1997（平成9）年から実施され、多大な成果をあげるとともに、史跡指定への直接的な契機となった。2001（平成13）年度からは、文化庁の国庫補助を受けた遺構確認調査が仙台市教育委員会によって開始されている。表4・5に、仙台城と周辺武家屋敷地区における調査の一覧を示しておいた。

1978（昭和53）年、川内北地区のブル西側の排水管理設工事の際、石組の井戸などが発見された。この時、東北大学の文学部考古学研究室によって緊急の調査が行われたのが、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区における

2015年度までの発掘調査点
仙台市教育委員会による調査地点

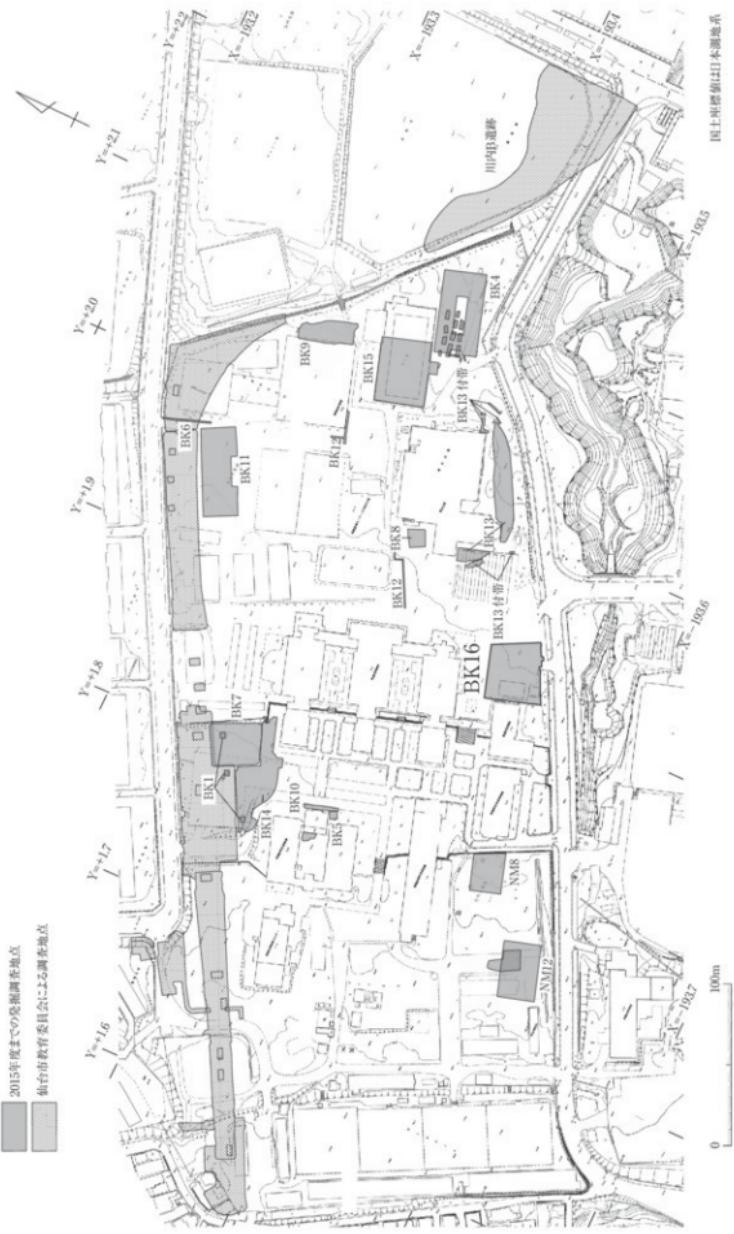


Fig.6 川内北地区調査地
Fig.6 Location of excavations at Kawauchi-kita campus (NM i.e.Secondary Citadel)

最初の考古学的調査であった。しかしこの時は、既に掘削が実施された後に、露出した遺構の記録を作成する緊急の調査であったため、ごく部分的な調査にとどまらざるをえなかつた。この時には、川内北地区は周知の遺跡の範囲ではなく、新たに周知の遺跡として登録する措置もとられていない。

東北大学に埋蔵文化財調査委員会が1983（昭和58）年に設置され、構内遺跡の組織的な調査が開始されると、川内北地区についても遺跡が広がっている可能性に配慮し、必要な措置がとられるようになった。すなわち、施設建設が計画されている場所については試掘調査を行うとともに、営繕工事に際しては、立会調査を実施してきた。その結果、いくつかの調査において、江戸時代の遺構面が残存していることが明らかとなってきた。また、1986（昭和61）年度に調査を実施した二の丸地区第8地点（NM 8）は、二の丸北側に東西に延びていた堀の、北側の岸の部分の調査であった（『年報』4）。二の丸に伴う堀の調査のため、調査地点名称は二の丸地区的名称を採用したが、調査を実施した場所は川内北地区であった。これらの調査は、川内南地区が周知の遺跡である仙台城跡の範囲内に含まれていたことから、周知の遺跡の隣接地という位置づけで、調査を実施していたものである。

これらの調査によって、川内北地区においても、江戸時代の遺構面が良好に残存していることが判明してきた。しかも、二の丸地区の遺構面から、途切れることなく、周辺の遺構面が連続して残っていることも明らかとなってきた。このような成果を受けて、仙台市教育委員会・宮城県教育委員会とも協議した結果、1993（平成5）年度に仙台城跡の範囲を拡大する措置がとられた。川内北地区に江戸時代の遺構面が良好に残存していることと、二の丸のすぐ北側に位置し、二の丸と密接に関連することから、仙台城跡の一部として扱うこととなった。これにより川内北地区のほとんどが、周知の遺跡である仙台城跡の範囲に含まれることとなった。

東北大学埋蔵文化財調査委員会に始まり、東北大学埋蔵文化財調査研究センターを経て、現在の埋蔵文化財調査室に至る、東北大学の構内遺跡調査組織による、施設整備などの工事に伴う二の丸北方武家屋敷地区における調査は、2015（平成27）年度までに第1～16地点の調査が実施されてきた（図6）。この内、1985（昭和60）年度に実施した第2地点（BK 2）と第3地点（BK 3）の調査は、結果的に立会調査で終了したため、欠番としている。したがって、14地点で調査が実施されていることとなる。

第1地点（BK 1）は、2001（平成13）年度に調査を実施した第7地点と一部重なる区域で、1984（昭和59）年度に実施した試掘調査である。当時、課外活動施設の建設候補地であったため、江戸時代の遺構・遺物の有無を確認する目的で、 2×2 mの試掘調査区を3ヶ所設けて調査を行っている。その結果、東よりの調査区で、江戸時代の遺構面が残存していることが確認された。試掘調査実施後は、課外活動施設の建設場所が変更されたため、第7地点の調査が行われるまで、それ以上の調査は実施されなかった。

第4地点（BK 4）は、1985（昭和60）年度に試掘調査を実施し、1994・95（平成6・7）年度に本調査を行った。試掘調査時には保健管理センターの建設予定地であったが、その後の計画見直しによって課外活動施設がこの地点に建設されることとなり、本調査を実施した。調査面積が $1,143\text{m}^2$ となり、二の丸北方武家屋敷地区では、初めての大規模な調査となった。江戸時代の初頭から幕末に至る、多数の遺構が検出された（『年報』13）。

第5地点（BK 5）は、教養部学生実験施設（当時、現学生実験棟）にエレベーターを設置するのに伴い、1989（平成元）年度に実施した。 40m という小規模な調査であったが、溝が検出されている（『年報』7）。

1996（平成8）年度に実施した第6地点（BK 6）は、給水管理設に伴う調査である。調査面積は 15m^2 と狭いが、比較的多くの遺構が検出されている（『年報』14）。

2001（平成13）年度に実施した第7地点（BK 7）は、マルチメディア教育研究棟新館に伴う調査である。調査を行った面積が 810m^2 と、まとまった規模の調査としては、第4地点に続く調査となった。礎石建物・掘立柱建物・掘立柱列や溝・井戸など、江戸時代の各時期の遺構が検出された。特筆されるものは、大規模なゴミ穴が検出され、様々な種類の遺物が大量に出土したことである。このゴミ穴からは、享保年間（1716～35年）の年号

が記されたものを含む、多数の荷札木簡が出土している。木簡の記載内容や、捨てられたゴミの内容から、堀をはさんだ二の丸地区のゴミが運び込まれて捨てられたものと考えられる（『年報』19第1～5分冊）。

第8地点（BK8）は、厚生会館前の上屋取設工事に伴い、2002（平成14）年度に調査を実施した。28.6m²と小規模な調査であった。溝やピットなどが検出されている（『年報』20）。

第9地点（BK9）は、課外活動施設（川内ホール）新営に伴い、2003（平成15）年度に調査を実施した。体育館西側の、グラウンドとの段差に近い区域での調査であった。363.5m²とやや規模の大きな調査であったが、段丘崖にかかる区域での調査であったため、遺構密度はさほど高くなかった。小規模な石垣や溝、掘立柱列などが発見されている（『年報』21）。

第10地点（BK10）は、学生実験棟改修に伴い、2006（平成18）年度に調査を実施した。建物の東側と、中庭の2ヶ所で調査を行った。建物東側の調査区は、第5地点の調査区に隣接し、溝・井戸などが検出されている。中庭の調査区では、道路開溝の可能性のある石垣が発見されている（『年報』24）。

第11地点（BK11）と第12地点（BK12）は、仙台市高速鉄道東西線（以下、地下鉄東西線と略する）機能補償に関係する調査である（『調査報告』1）。第11地点は、サブアリーナ棟新営に伴うもので、調査面積は1,401m²で、大規模な調査となった。掘立柱建物・溝・井戸や大規模に掘り込まれた遺構など、多数の遺構が検出された。第12地点は、屋外給排水管設備の迂回工事に伴うもので、遺構面まで掘削が及ぶ区域のみを調査したため、59.6m²と小規模な調査であった。

第13地点（BK13）は、厚生会館増改築に伴う調査である。2008（平成20）年度に増築建物本体部分（774.8m²）、翌2009（平成21）年度に付帯工事部分（44.85m²）の調査を実施している。前述のように「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の北東側に位置し、千貫沢の支流の沢や掘立柱建物・柱列・ピット・溝などが確認された。

第14地点（BK14）は、地下鉄東西線川内駅の駅前整備に伴う調査である。2011（平成23）年度から調査を開始し、2012（平成24）年度も一部を継続して調査を実施したが、次の第15地点の調査を先行して実施することが必要となったため、調査途中で一時中断した。この段階で全体の調査面積954m²の内、508.5m²の調査が終了した。2015（平成27）年3月から調査を再開し、残りの調査区（445.5m²）を調査した。柱列・ピット・溝・井戸・池など多数の遺構が検出されている。特に池跡は、内部を区画する際の盛土上に敷いた籠状の敷物が遺存していた。盛土が崩れないよう工夫したと推定される。

第15地点（BK15）は、課外活動施設新営に伴う調査で、2012（平成24）年度から調査を実施している。震災復旧工事に伴う調査を最優先としながらその合間をぬって2013・14（平成25・26）年度と継続して調査を実施した。1,455m²と、東北大が実施した北方武家屋敷地区の調査では、最大規模の調査となっている。北東側の段丘崖下へ流れれる沢や、溝・柱列などが検出された。

第16地点（BK16）は学生支援センター新設に伴い、2013（平成25）年度に調査を実施した。本書で報告する調査であり、その調査面積は1,200m²となった。調査地点は、千貫橋の北西側に位置し、堀の北岸と石組井戸を検出した。二の丸北側の堀は千貫沢の地形を利用したもので、江戸時代の絵図とも対応する。なお二の丸地区第8地点（NM8）の調査の際に同様に堀の北岸が確認されている（『年報』4）。

一方、仙台市教育委員会による調査も、地下鉄東西線建設に伴う調査を中心に、多数実施された。地下鉄東西線関係の本調査に先立ち、2004～2006（平成16～18）年度にかけて試掘調査が行われた。本調査と併行して、2007（平成19）年度にも東北大のグラウンド部分で試掘調査が行われている。

なお川内北地区の中でもっとも東側のグラウンドについては、それまで実施した立会調査によって、確実に江戸時代に遡る遺構面が残存している場所は確認できていなかった。またこのグラウンド部分は、二の丸地区が立地する段丘面より、一段低い段丘面であったため（図1）、1993（平成5）年の仙台城跡の範囲拡大にあたって、グラウンドの区域やその周辺域は含まれなかつた。

これらの試掘調査は、仙台城二の丸北方武家屋敷地区だけではなく、その東側の東北大学のグラウンド部分と仙台商業高等学校グラウンド跡地の区域、広瀬川を渡った対岸の西公園の区域でも行われている。

これらの試掘調査の結果、仙台商業高等学校グラウンド跡地の一部が川内A遺跡、東北大学グラウンドの一部が川内B遺跡、広瀬川を渡った対岸の西公園部分が桜ヶ岡公園遺跡として、新たに周知の遺跡として遺跡登録がなされ、記録保存のための調査が行われるようになった。

仙台市教育委員会による地下鉄東西線建設に先立つ調査は、2005（平成17）年度の川内A遺跡から始まり、二の丸北方武家屋敷地区では2006・09（平成18～21）年度にかけて、川内B遺跡では2008・09（平成20・21）年度に調査が行われている。桜ヶ岡公園遺跡では、2007・08（平成19・20）年度に調査が行われている。

これら、地下鉄東西線建設に伴う調査以外にも、仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区では雨水幹線の移設工事、桜ヶ岡公園遺跡では西公園の再整備に伴い、事前調査が行われている。2014（平成26）年度には市の施設建設に伴う試掘調査が川内A遺跡の南側で行われ、新たに川内C遺跡として遺跡登録された。

仙台城三の丸地区的東側の追廻地区は、重臣を含む家臣の屋敷地や、馬場やそれに付随する施設などが置かれていた区域である。この追廻地区は、青葉山公園整備計画の対象区域となっており、公園便益施設や庭園などを設置する計画で検討が進められている。公園整備事業の推進にあたって、埋蔵文化財の確認を目的として、2006～08（平成18～20）年度に、道構確認調査が実施されている。これらの確認調査を踏まえて、2012（平成24）年度から2013（平成25）年度にかけて追廻公園センター建築計画に伴う調査も行われた。

これらの調査が行われてきた結果、川内地区は、仙台城下の武家屋敷の中では、もっとも広い範囲で考古学的調査が実施してきた地区となっている。特に、川内北地区の二の丸北方武家屋敷地区は、もっとも高い密度で考古学的調査が実施されている区域となってきていると言える。

表4 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧（1）
Tab.4 List of excavations of Sendai Castle and Samurai Residences around Sendai Castle (1)

年度	仙台市調査		東北大学構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
	国庫補助確認調査以外	国庫補助重要遺跡道構確認調査	二の丸地区	二の丸北方 武家屋敷地区	二の丸北方 武家屋敷地区	その他の 周辺武家屋敷
1974 昭和49			文系厚生施設緊急調査 (仙台市教委)			
1978 昭和53				ブルブル排水管緊急調査 (考古学研究室)		
1982 昭和57			第1地点試掘			
1983 昭和58 (76集)	三の丸博物館新築		第1地点〔年報〕1) 第2地点〔年報〕1) 第3地点〔年報〕1)			
1984 昭和59			第4地点 (1987年度継続)	第1地点試掘		
1985 昭和60			第5地点試掘 第6地点〔年報〕3)	第4地点試掘		
1986 昭和61			第7地点〔年報〕4) 第8地点〔年報〕4)			
1987 昭和62			第4地点〔年報〕5) 第5地点〔翌年度継続〕			
1988 昭和63			第5地点〔年報〕6)			
1989 平成1			第5地点付帯部 〔年報〕7) 第9地点試掘	第5地点〔年報〕7)		
1990 平成2			第9地点〔年報〕8)			
1991 平成3			第10地点〔年報〕9)			
1992 平成4			第11地点試掘第12地点試 掘第13地点〔年報〕10)			
1993 平成5			第12地点〔年報〕11) 第14地点〔年報〕11)			
1994 平成6			第15地点〔年報〕12)	第4地点〔翌年度継続〕		
1995 平成7			第11地点〔年報〕13)	第4地点〔年報〕13)		

* 仙台市教育委員会が刊行した報告書は、「仙台市文化財調査報告書」のシリーズ番号で示した。

表5 仙台城と仙台城周辺武家屋敷の調査一覧 (2)
Tab.5 List of excavations of Sendai Castle and Samurai Residences around Sendai Castle (2)

年度	仙台市調査		東北大學構内		仙台市調査（周辺武家屋敷）	
	国庫補助確認 調査以外	国庫補助重要遺跡 申請確認調査	二の丸地区	二の丸北方 武家屋敷地区	二の丸北方 武家屋敷地区	その他の 周辺武家屋敷
1996 平成8	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）			第6地点 （年報）14		
1997 平成9	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）		第16地點 （年報）15			
1998 平成10	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）		第17地點試掘			
1999 平成11	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）					
2000 平成12	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）		第17地點 （年報）18			
2001 平成13	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）	第1次大広間1次 第2次清水門（259集）		第7地點 （年報）19		
2002 平成14	本丸1次石垣修復 （翌年度継続）	第3次大手土手他 第4次井戸 第5次本丸大広間 2次（264集）		第8地點 （年報）20		
2003 平成15	本丸1次石垣修復 （275・282・298・ 349集）	第6次全城分布 （271集） 第7次大広間3次 第8次登城路 第9次広瀬川護岸 石垣（270集）		第9地點 （年報）21		
2004 平成16	中門・清水門復旧 整備（299集）	第10次大広間4次 第11次広瀬川護岸・ 井戸曲輪他石垣 （285集）		東西縦試掘（289集）	川内A・桜ヶ岡公園東西縦 試掘（289集）	
2005 平成17	清水門周辺復旧整 備（299集） 登城路1次（300 集）	第12次大広間5次 第13次二の丸1次 第14次広瀬川護岸・ 中門石垣（297集）		東西縦試掘（302集）	川内A周辺・桜ヶ岡公園東 西縦試掘（302集） 川内A周辺東西縦（312集）	
2006 平成18		第15次大広間6次 第16次三の丸2次 （309集）	第10地點 （年報）24 第11地點 （翌年度継続）	東西縦（亀岡トンネル開削 部・342集）	川内B・桜ヶ岡公園東西縦 試掘（316集） 追削遺構確認1次（350集）	
2007 平成19		第17次大広間7次 第18次三の丸3次 第19次本丸北西石 垣（348集）	第11地點 （「調査報告」1） 第12地點 （「調査報告」1）	東西縦（川内駅部・立坑 部・386集）	川内B・東西縦試掘東西縦 桜ヶ岡公園（広瀬川高架橋 部・公園駅部他・384集） 桜ヶ岡公園2次（西公園再 整備・318集） 追削遺構確認2次（350集）	
2008 平成20		第20次大広間8次 第21次造酒戸敷1次 第22次本丸北西石 垣（348集）	第13地點 （本体部分・「調査 報告」2）	東西縦（扇坂トンネル部・ 402集）	東西縦川内A（広瀬川右岸 橋梁部・402集）・川内 B（扇坂トンネル部・385 集）・桜ヶ岡公園（公園駅 部他・384集） 桜ヶ岡公園3次（西公園再 整備・315集） 追削遺構確認3次（350集）	
2009 平成21	登城路2次（354 集）	第23次造酒戸敷2次 第24次大広間追加 第25次広瀬川護岸 石垣（374集）	第13地點 （付帯部分・「調査 報告」2）	東西縦（扇坂トンネル・丸 丸トンネル・開削部・402集） 第2次雨水幹線（356集）	東西縦川内A（広瀬川右岸 橋梁部・402集）	
2010 平成22		第26次造酒戸敷3 次（395集）		東西縦（丸岡トンネル開削 部・401集）	東西縦川内B（扇坂トンネ ル部・401集） 追削コート周辺試掘 桜ヶ岡公園4次（西公園再 整備・378集）	
2011 平成23			第14地點 （翌年度継続）			
2012 平成24	大手門北側石垣上 部・中門北側石垣 本丸北西石垣（震 災復旧）		第14地點 （調査途中で中断） 第15地點 （翌年度継続）			追削青葉山公園センター
2013 平成25	平成24年度継続 （震災復旧）		第15地點 （翌年度継続） 第16地點 （「調査報告」5： 本報告）	歩行者通路試掘（扇坂斜 面・427集）	追削青葉山公園センター 川内C道路第1次（427集）	
2014 平成26	本丸北西石垣北 側・清水門石垣 （震災復旧）		第14地點 （翌年度継続） 第15地點			

* 仙台市教育委員会が刊行した報告書は、「仙台市文化財調査報告書」のシリーズ番号で示した。

第Ⅱ章 調査の方法と経過

1. 調査地点の位置と調査経緯

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点（BK16）の調査は、学生支援センター新館に伴う調査である。新しく建設される学生支援センターは、川内北地区の管理棟の東側に隣接して造られることとなった。建物工事で掘削される区域の全域を調査対象として、記録保存のための事前調査を実施することとした。工期とばかりの調査との関係上、建物の設計が未完了の段階から、調査を開始することとなった。予定地には、ガレージや倉庫など使用中の建物が存在し、それらの区域は撤去工事以降ないと調査できなかった。また、車両通路を確保する必要もあった。このような制約があったため、分割して順次調査を実施することとした。ガレージ等の撤去後の地形面は、ほぼ平坦な場所となる（図7）。

調査区の南側には、川内南地区と川内北地区を区切る道路があり、その南側には千貫沢が流れている。この千貫沢北側の道路は、江戸時代の道路「筋違橋通」をほぼ踏襲したものと考えられる。また、川内南地区へ至る道路が千貫沢を横切るところは土橋となっており、その東側には石垣が残っている。これは、江戸時代から続く千貫沢の土橋（千貫橋）で、石垣は改修されているものの、江戸時代から続くものである。本調査区は、その「千貫橋」の北西側にあたり、「筋違橋通」と「裏下馬通」の交差点の西側に位置している（図2）。

2. 調査の方法と経過

（1）発掘調査の経過

最初に、調査区東側の建物の無い区域から調査を開始した。建物計画が未確定であったため、おおよその範囲で調査を開始することとし、2013（平成25）年4月1～5日に重機での表土掘削を開始し、検出した1号溝の調査を行った。その後に建物計画が確定したため、5月28・29日には2回目の重機掘削を行い、工事範囲に合わせて調査区を東側に拡張した。さらに掲示板の移設工事が終了した後の7月17～19日に3回目の重機掘削を行い、工事範囲に合わせて調査区を北側に拡張した。この3回の掘削した範囲に関して、調査区を横断する共同溝を基準とし、1・2区を設定した（図8）。

1区の調査では、米軍時代に埋設された石油タンクが2基発見された。撤去は建物工事の際に行うこととしたが、内部に油混じりの水が溜まっていたため、専門業者に依頼してこの滞留液を抜き取り、空素ガスを封入して密閉した。また、2区の調査では、大きな堀の存在を確認することができた。6月には、富沢地区第10次調査（『年次報告』2013）を優先させることとして、本地區の調査は一時中断した。その後、堀にトレンチを入れて埋土堆積状況等を確認した結果、堀（新段階）と堀（古段階）に分かれることが判明した。また、堀（新段階）埋土には、遺物がほとんど含まれず、その土量が非常に多いことから、8月21日に重機で撤去した。堀（新段階）までの調査が終了した段階で、8月28日にラジコンヘリにより1・2区の空撮と写真測量を行った（図版1）。

9月5～13日には1区と2区東端の通路部分を埋め戻し、ガレージが置かれていた北西側の重機掘削を行った（ほぼ3区）。2区の堀（古段階）は、西側に広がることが予想されることから、埋め戻していない。この部分の調査は10月5日に空撮と写真測量を実施して終了した（図版2）。10月7～14日に、5号溝より北側を埋め戻し、南西部の重機掘削を行った（4区）。4区の堀（新段階）埋土も、11月7・8日に重機で掘削した。堀（新段階）埋土を撤去した段階で、11月20日に空撮・写真測量を実施した（図版3-1）。その後、堀（古段階）の調査を行い、12月11日に最終状況の空撮・写真測量を行って調査を終了した（図版3-2）。深い部分の埋め戻しを12月16～19日に行い、全ての作業を終了した。

今回の調査区は、堀の部分以外では、近・現代の盛土を除去すると、すぐに地山層となる。川内北地区は、本来は西から東へ緩やかに下る地形であったと考えられる。近代以降に段切り状に整地され、現在では平坦面が階



図7 武家屋敷地区第16地点調査区の位置
Fig.7 Location of BK16 (BK16 i.e. Location 16 of Samurai residence)

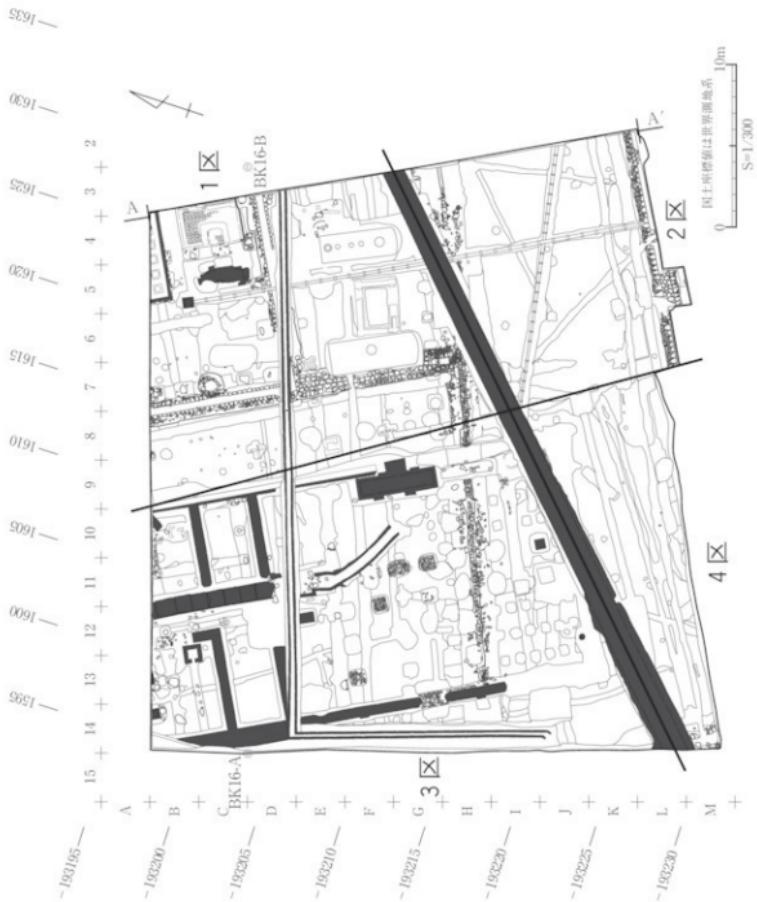


圖 8 武家屋敷地區第 16 地點調查區模式圖
Fig.8 Pattern diagram of location at BK16

段状に連なっている。周辺での調査成果から、江戸時代の地表面は、調査区東端で現在の地表面付近であったと考えられ、1 m近く削平されている可能性がある。もとの標高の高かった西側は、さらに削平の度合いが大きいと考えられる。この削平のため、堀より北の部分では、江戸時代に遡る可能性がある遺構は石組井戸が1基確認されただけである。石組の様相から、江戸時代に遡る井戸と考えられるが、安全確保の観点から上部の調査にとどまったため、詳細な時期は不明である。そのため、堀との対応関係も判明していない。

(2) 記録方法

調査にあたっては、おおよそ既存の管理棟や掲示板の方向に合わせて、3 mグリッドを作成した(図8)。調査区南西方向を原点とし、グリッドラインに沿って局地座標を設定し、実測作業は局地座標を利用して行った。調査に際して設定した基準点の国土座標値は、以下のとおりで、基準点の位置・座標は図8に示した。平面直角座標系は、X系である。グリッドは、北で $17^{\circ}43'13''$ 西偏している。

B K16-A	局地座標	X = 30.000	Y = 0.000
	日本測地系	X = -193.511.937	Y = +1,895.970
	世界測地系	X = -193.203.204	Y = +1,596.075
B K16-B	局地座標	X = 30.000	Y = 36.000
	日本測地系	X = -193.500.980	Y = +1,930.262
	世界測地系	X = -193.192.247	Y = +1,630.366

今回の調査では、国際文化財株式会社に委託して、合計4回の空中写真測量と、空撮写真による写真測量を行った。それら以外の図面に関しては、手作業により作成している。

記録写真は、35mmフィルムによるカラーリバーサルとモノクロを基本として使用し、デジタル写真も同じカットで撮影した。空中写真撮影では、 6×6 のカラーリバーサルとモノクロ写真を撮影し、デジタル写真も同じカットで撮影している。

(3) 遺構の名称について

近世遺跡の調査においては、多種多様な遺構が検出される。その際、遺構の詳しい用途まで判明する場合もある一方で、遺構の形状からしか名称を付けられないものも存在する。そのため、異なる基準での名称が混在する場合が多い。今回調査現場において使用した遺構名称は、表6に示した通りである(表6:現場名称)。表6では、現地で付した遺構名称と、本報告にあたっての遺構名称の対照表を示した。遺物に付された注記は、全て現地での遺構名称となっている。また、遺構の属性は表7にまとめた。

比較的大型の掘り方を有するものを「遺構」とした。今回の調査では、1基の遺構名称を付したが、その後の調査で溝と判明したので、本報告書では使用していない。「土坑」は、不整形であるものも含め、小型から大型のものまで様々な規模がある掘り方を有するものである。そのうち、柱穴と想定できるような小型の土坑を「ピット」と呼称した。

ピットについては、建物や柱列を構成することが現場で判明している場合でも、ピット番号として、全体で一連の通し番号を現地で付けた。川内地区での調査の場合、遺構が複雑に重なり合うと、現場での検討では、組み合う全ての柱穴を確認できない場合が多い。調査後の図面整理の過程で、建物跡や柱列を確認している場合が多数を占める。現地で組み合うことが判明したものについて柱番号を付すと、その後に同じ建物跡などを構成することが判明したピットの番号と、柱番号が前後する場合が生じる。整理後に柱番号を付け直すと、現地での呼称との間で混乱をきたしかねない。そのため、現地で付ける遺構名称は、通し番号のピット番号に統一し、建物跡や柱列を構成するピットについては、図面整理後に柱番号を新たに付ける形で、名称を変更している。

表6 武家屋敷地区第16地点遺構名称対照表
Tab.6 List of the features name which are collated at BK16

現場名称	確定名称	時期	備考
廻路（古段階）	廻（古段階）	I a期	
廻路（新段階）	廻（新段階）	I c期	
Pit1	欠番	—	
Pit2	欠番	—	
Pit3	欠番	—	
Pit4	欠番	—	
Pit5	欠番	—	
Pit6	欠番	—	
Pit7	ピット7	I b期	
Pit8	欠番	—	
Pit9	ピット9	I b期	
Pit10	ピット10	I b期	
Pit11	ピット11	I b期	
1号遺構	13号溝	I a期	13号溝に変更
1号土坑	1号土坑	I a期	
1号溝	1号溝	III b期	
2号溝	2号溝	III a期	
3号溝（南北）	3号溝	III a期	
3号溝（東西）	14号溝	III a期	14号溝に変更
4号溝	4号溝	II b期	
5号溝	5号溝	II 期	
6号溝	6号溝	I b期	
7号溝	7号溝	II a期	
8号溝	欠番	—	7号溝に統合
9号溝	9号溝	III b期	
10号溝	10号溝	I b期	
11号溝	11号溝	I b期	
12号溝	12号溝	I b期	
なし	15号溝	II b期	複数から変更
1号井戸	1号井戸	III a期	
2号井戸	2号井戸	III 期以前	I b～I c期か。
近代トイレ	便所	III b期	
瓦溜まり1	瓦溜まり1	III a期	「治十七年高知縣和田頼次」の縁刻瓦あり
瓦溜まり2	瓦溜まり2	III a期	

(4) 遺物の取り上げについて

当調査室の調査では、江戸時代に遡る可能性がある遺物については、全て採集することを基本方針としている。今回の調査では、師団期以降と考えられる層は、1層・搅乱として一括している。これより下位の層序から出土した遺物については、基本的に全ての遺物を採集している。1層・搅乱出土の瓦については、一定の基準を設けて現地で選別を行った。瓦は、江戸時代のものと、明治以降のものを識別することが、破片の場合ほとんど不可能なものも多い。そこで、長さと幅の判明するもの、軒瓦、刻印や線刻のあるもの、その他特殊なものについては採集するという基準を設けている。刻印や線刻の有無などについては、土塙が付着したままでは判別が難しいので、現地で土塙をおおよそ落とした上で、上記の基準に当てはまる資料のみを収集している。

(5) 整理作業

当調査室での整理作業と報告書刊行については、経費は全学的基盤経費として、毎年度ほぼ一定額が措置されている。調査の事業量は年度により多寡があるため、大きな滞りをきたすことなく調査報告書を作成できるよう、各年度に実施する整理作業を平均化して計画的に実施することとしている。武家屋敷地区第16地点の出土遺物は、整理作業前の段階で19箱と、比較的少ないものであった。他の調査の整理作業が残っていたことから、整理作業は2014年度から開始することとなった。併行して、他の調査の整理作業も進めたため、2014年度から2015年度の2ヶ月を整理作業期間とし、2015年度に報告書を刊行することとした。

2014年度は、遺構図面の整理・トレース、遺構写真の整理、出土遺物の水洗・注記・接合・分類・出土遺物の集計などの作業を実施した。2015年度は、実測図作成、トレース、磁器の文様のデジタル写真からの図化、写真撮影、遺物観察表の作成、図版レイアウト、原稿作成、編集などの作業を行った。遺物実測図の作成では、磁器と陶器の文様部分について、国際文化財株式会社に委託し、オルソイメージャーによって撮影したデジタル写真をもとに作成した。遺物写真の撮影は、有限会社仙台写真工房に委託して行ったほか、一部の遺物については、当調査室で撮影したものも含まれている。

近世遺跡の調査では、様々な材質の遺物が出土する。水浸木製品のように、材質に応じて特有の取り扱いを必要とするものも多いことから、遺物の種類ごとに整理作業を進めている。そのため本報告書でも、遺物の種類ごとに事実記載を行うこととした。遺物の種類ごとの分類基準などについては、出土遺物の報告の各項目の中で、必要に応じて記述する。

図面ないし写真を、本報告書に掲載した遺物については、種類ごとに以下の頭文字を決め、その下に通し番号の登録番号を付けている。実測図・写真図版・観察表の番号は、いずれもこの登録番号に統一している。遺物を管理する台帳も、全てこの登録番号をもとに作成しており、保管にあたっても、この登録番号を基礎に管理するようにしている。

磁器：C J 陶器：C T 土師質土器：C H 瓦質土器：C G 土製品：C O 瓦：T (古代の瓦を含む)

古銭：M C 古銭以外の金属製品：M O

今回の調査では、木製品・漆塗製品・金属製品など、保存処理が必要な遺物も少数ではあるが出土している。当調査室では、木製品と金属製品について保存処理を実施しており、武家屋敷地区第16地点から出土した遺物についても、独自に保存処理を行っている。

表7 武家屋敷地区第16地点遺構属性表
Tab.7 Attributes of all structural remains at BK16

①各種遺構

名称	時期	区名	形状	規模		確認面	重複する遺構の新古関係	
				面積 (m ²)	長軸×短軸 (m)		古い	新しい
塀 (古段階)	I a期	H4~14 J・K2~14、L4~6	—	(172.9)	—	地山上面	6・11~13号溝 1号土坑 塀(新段階)	
塀 (新段階)	I c期	G3、H2~11 I~L2~14、M11~14	—	(342.4)	—	地山上面	塀(古段階) 6・10~12号溝 ピット7・9~11	5・14号溝
ピット7	I b期	H2	楕円形	(0.06)	0.4×(0.22)	11号溝上面	11号溝	10号溝 塀(新段階)
ピット9	I b期	H・II0	楕円形	0.12	0.44×0.36	地山、11号溝上面	11号溝	塀(新段階)
ピット10	I b期	I9	楕円形	0.07	0.34×0.24	地山上面	塀(新段階)	
ピット11	I b期	I9・10	楕円形	0.07	0.28×0.26	地山上面	塀(新段階)	
1号土坑	I a期	I6・7	不整長 楕円形	1.3	1.98×1 (北側) · 0.66 (南側)	地山、塀(古段階) 上面	塀(古段階) 理没中	
便所	III b期	B3~5	—	(5.6)	(1.35) × (5.6)	地山上面		

* 規模の () は残存長を示す。面積は確認できた面積のみ。

②井戸

名称	時期	区	構造	規模		確認面	重複する遺構の新古関係		備考
				直径 (m)	開口部面積 (m ²)		古い	新しい	
1号井戸 ³	III a期	C3、D3~5、 E3・4、F3・4	桶?	2.76	49	地山上面	4・15号溝	2号溝	
2号井戸 ³	II期以前	H7	石組	1.52	19	地山上面		3号溝	規格は本体部のみ

③溝

名称	時期	区	方向	規模			確認面	重複する遺構の新古関係		備考
				最大幅 (m)	長さ (m)	面積 (m ²)		古い	新しい	
1号溝	III b期	K2・3 L2~7	N-59.2°-E	1.7	(14.6)	(11.7)	塀(新段階) 上面	塀(新段階)		9号溝との交角を復元・想定する上94.2°
2号溝	III a期	C3・4 D3~6 E6・7	N-61.3°-E	1.5	(12.1)	(10.2)	地山上面	4号溝、1号井戸		3号溝と接続 3号溝との交角は289.4°
3号溝	III a期	B・C7・8 D~F7 G・H6・7	N-147.6°-E	1.6	(19.5)	(24.6)	地山上面	4・5・7・15号溝 2号井戸		2・14号溝と接続
4号溝	II b期	E5~14 F13~14	N-66.6°-E	1.2	(33.1)	(15.9)	地山上面	7号溝	2・3号溝	
5号溝	II期	D3~6 H2~14 H1~14	N-69.4°-E	2.4	(34.2)	(61.7)	塀(新段階) 上面	11号溝 塀(新段階)	3・14号溝	
6号溝	I b期	J2~5 K4~7	N-56.4°-E	1.2	(14.4)	(10.5)	塀(古段階) 上面	塀(古段階)	4・15号溝	
7号溝 (東西)	II a期	B-D13 E12~13 F3・4・7~12 G10~12	N-69.6°-E	0.6	(28.5)	(7.5)	地山上面			東西と南北の交角は101.5°
7号溝 (南北)		N-142.5°-E	0.4	(15.6)						
9号溝	III b期	M14	N-158.6°-E (未定)	(1.4)	(1.1)	(1.5)	塀(新段階) 上面	塀(新段階)		
10号溝	I b期	H11・12	N-36.1°-E	0.6	(3.8)	(1.7)	地山上面	塀(古段階) 11号溝、12号溝 ピット7	5・10・14号溝 ピット7・9 塀(新段階)	
11号溝	I b期	H9・10 I9~14	N-64.1°-E	0.7	(14.8)	(5.7)	地山、 塀(古段階) 上面	塀(古段階)		
12号溝	I b期	H11~14 J12~14	N-60.6°-E	(12)	(7.5)	(4.5)	地山、 塀(古段階) 上面	塀(古段階)	10号溝 塀(新段階)	
13号溝	I a期	J・K12~14	N-82.6°-W	29	(33)	(6.0)	塀(古段階) 埋土中	塀(古段階) 埋土下層	塀(古段階) 埋土上層	
14号溝	III a期	H2~7 H12~14	N-69.4°-E	24	(34.2)	(51.6)	塀(新段階) 上面	5・11号溝、 塀(新段階)		3号溝と接続
15号溝	II b期	E3~6 F3~14	N-69.2°-E	0.8	(33.4)	(11.2)	地山上面	7号溝		

* 長さの () は残存長を示す。

第Ⅲ章 基本層序と時期区分

1. 基本層序

今回の調査では、現代の表土層および師団期以降の近代の整地層を1層とした。調査区東壁では、1層を1a層から1g層に細分した（図9・10）。1a層は、現代に近い時期の整地層である。1b・1d・1f層は炭がとくに目立つ層である。1c・1e層は、炭は混じるもの粘土が主体となる層である。これらの層は、地形面が平坦になるように整地した層であり、その土質等から近い時期の整地によるものと考えられる。そして、この層は、第二師団期のレンガ基礎の建物跡を覆うように分布していることから、戦後に形成された層であると言える。これらの層を切るような擾乱は、鉄管の掘り方等の米軍期から現在までになされたものと言える。また、この炭が目立つ層より下の1g層は、第二師団期に形成された層と考えられる。この1g層の上下の面で第二師団期における遺構が確認でき、その前後関係が判断できる。

近世以前の遺構に関しては、1層を除去した段階で確認を行なった。調査区を東西に横断する5号溝より北側については、1層を除去した段階で地山層が露出し、近世以前の層は削平されていた。この地山面で検出した遺構に関しては、個別に確認を行い、近世に属するものか確認しながら調査を進めた。5号溝より南側は、堀の埋土が確認された。従って、近代以降の層を除去した段階で、北側では地山、南側では堀（新段階）が検出されることとなる。

2. 時期区分

本調査区で確認できた様々な遺構は、大きく区分すると、江戸期を含むそれ以前と、明治初期から第二師団設置を経た戦後までの時期、米軍・大学の時期の3期に分けられる。そのうち、明治初期から第二師団を経た戦後までの時期の遺構を掘り込面のほか、遺構同士の重複関係、遺構の軸方向等の特徴から、前期・後期の2期に区分した。従って、それぞれをⅠ期・Ⅱ期（図11）・Ⅲ期（図12）・Ⅳ期（図13）の4期に大別した。基本的に、Ⅱ期からⅣ期の近・現代の遺構は、調査時には擾乱として取り扱った。しかし、Ⅱ・Ⅲ期における石組溝などは、江戸期の同様の遺構との比較検討の上で良好な資料となるものと考えられることから、図面などの記録を作成した。本報告書では、それらの特徴的な遺構のみ第Ⅳ章で説明する。なお、このような措置は、武家屋敷地区第11地点（BK11）の調査・報告でも同様に行なった（『調査報告』1）。さらに、この各大別時期に関して、それぞれ細別を行なった。

Ⅰ期は、堀（古段階）が埋没する以前の時期をⅠa期、堀（古段階）埋没後の時期をⅠb期、堀（新段階）埋没後の時期をⅠc期とした。これらの遺構については、第Ⅳ章で詳述する。

Ⅱ期には、1g層によって覆われた4・7・15号溝のほか、それらと並行する5号溝がある。7号溝は、4・15号溝と重複関係がある。そのため、5・7号溝をⅡa期、4・15号溝をⅡb期とした。なお、2号井戸は、その石組の様相から江戸期のものとも考えられるが、遺物は出土していないので正確な時期は不明である。そのため、Ⅱ期以前の遺構として取り扱った。

Ⅲ期には、1g層が形成された後の遺構が属する。Ⅲa期には、大きめの石を用いた礎石建物、方形の掘り方に石を詰めた基礎を有する建物、2・3・14号の石組み溝、1号井戸が存在する。Ⅲb期には、1・9号溝、レンガ基礎による大規模な建物のほか、レンガ樹と土管などがある。

Ⅳ期は米軍期以降であり、Ⅳa期はヒューム管や石油タンク、共同溝等のライフラインを設置した時期である。Ⅳb期には、調査区の南西部に建物が1棟確認できる。この建物は、図3-1の建物aとした建物にあたるものと推定できる。Ⅳc期は、大学の建物等の跡である。

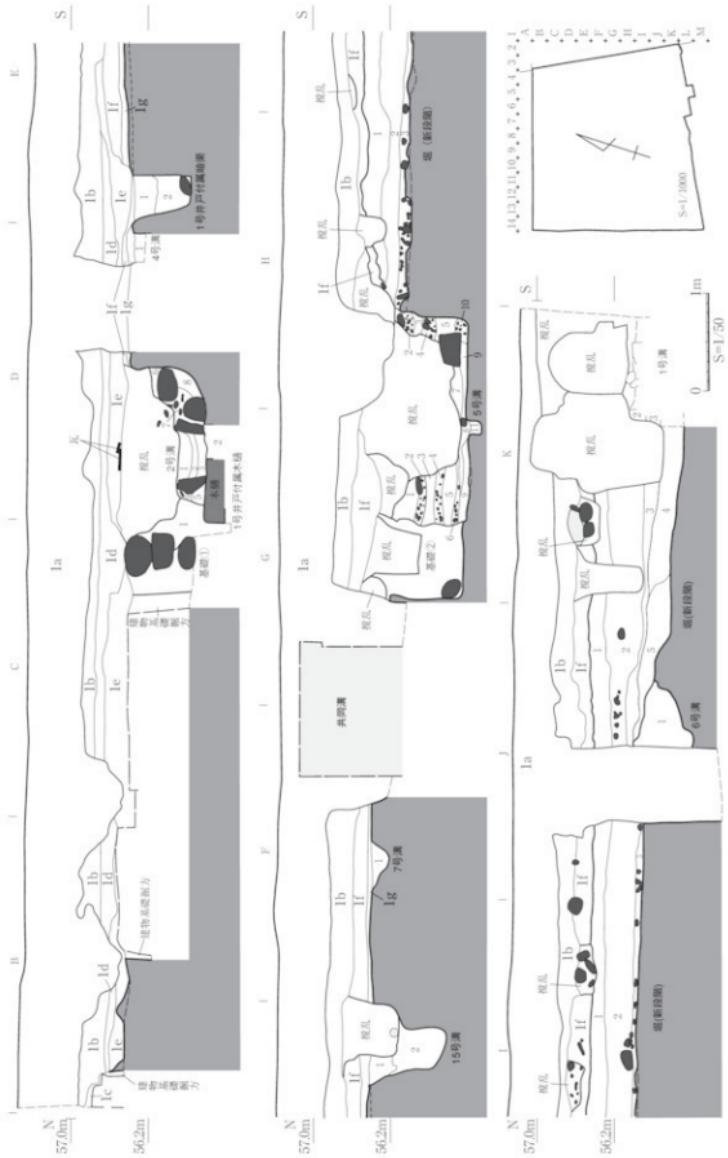


图9 武家屋敷地区第16高地东壁断面图
Fig.9 Layer sections of the east wall at BK16

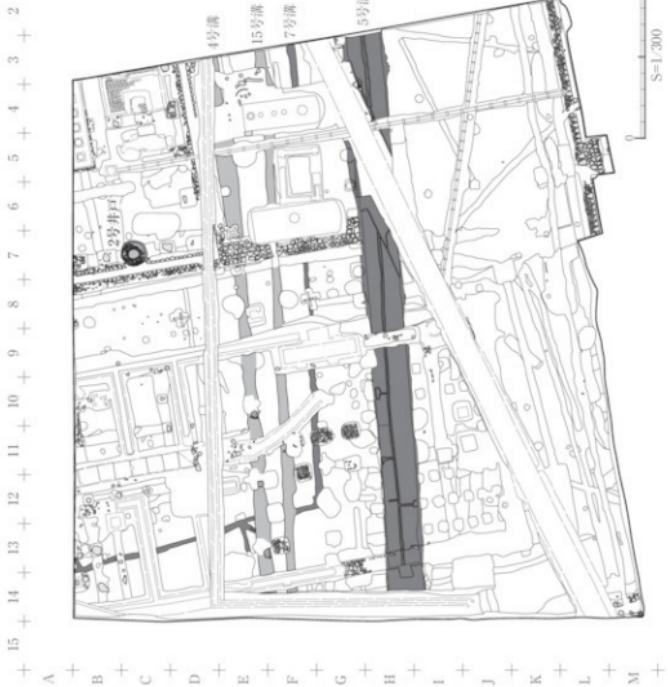


図11 許斐屋敷地区第16地点における近代から現代の遺構 (1)
Fig.11 Features in the modern era at BK16 (1)

A + 15 + 14 + 13 + 12 + 11 + 10 + 9 + 8 + 7 + 6 + 5 + 4 + 3 + 2

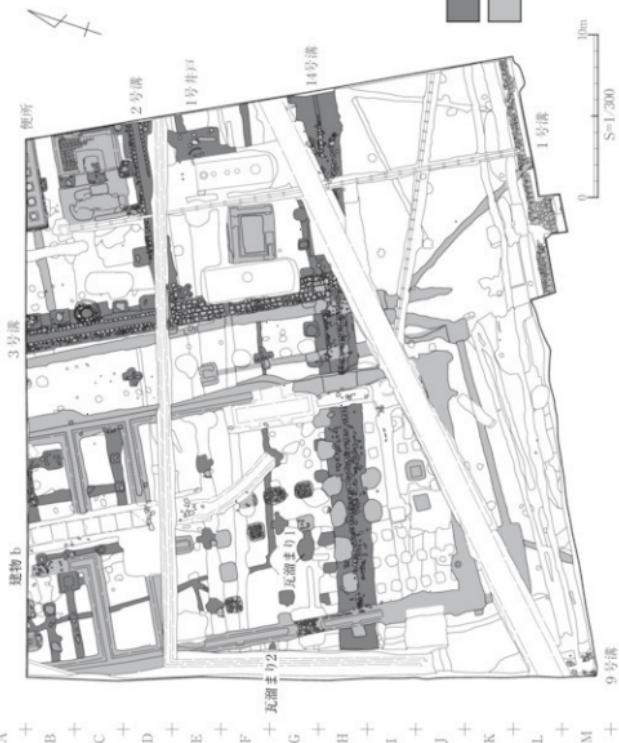


図12 許暮園敷地区第6地点における近代から現代の遺構 (2)
Fig.12 Features in the modern era at BK16 (2)

+ 15 + 14 + 13 + 12 + 11 + 10 + 9 + 8 + 7 + 6 + 5 + 4 + 3 + 2

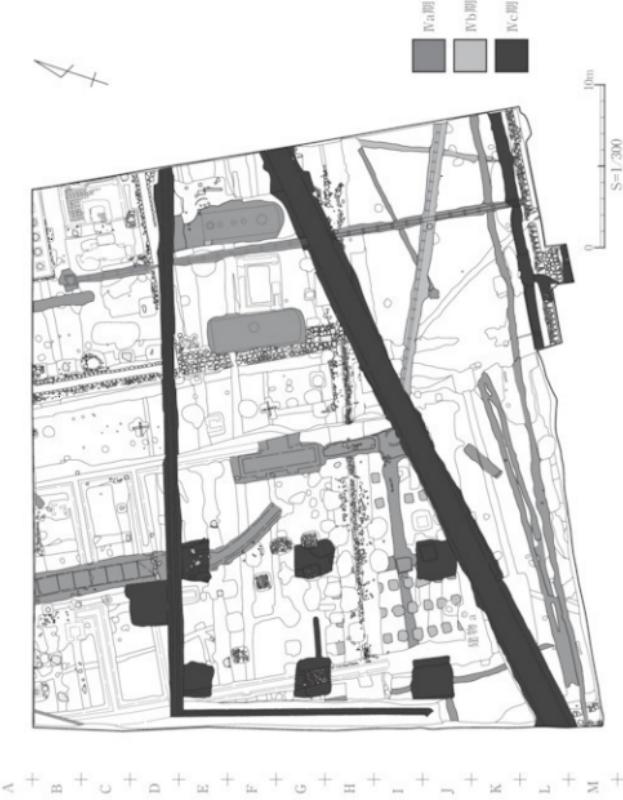


図13 船橋屋敷地区第16地塊における近代から現代の遺構 (3)
Fig.13 Features in the modern era at BK16 (3)

第Ⅳ章 検出遺構

1. Ia期の遺構

【堀（古段階）】（図14～17、図版5－3～5、図版6～8）

今回の調査区南側全域に広がる。当初確認した堀を掘り下げている段階で、非常に固く繩まり、小石を多く含む面を確認した。さらに、その面では乾裂が多数認められた。これらのことから、ある程度の期間、その面は地表面として機能していたと考えられた。そのため、堀を堀（古段階）と堀（新段階）に区分した。

堀（古段階）の外形は整っておらず、曲線状の不整形のものとなる（図14）。3区南側では、東部と西部に分かれる。そのうち西側を堀（古段階B）、東側を堀（古段階A）とした。2・4区の堀（古段階）は、堀（古段階A）と同一のものと考えられる。しかし、説明の都合上、本報告書では2・4区の堀を「堀（古段階C）」、3区南側の堀を「堀（古段階A）」「堀（古段階B）」と呼称して説明する。また、後にも述べるが、4区の西側調査区で地山面の高まりを検出している。堀（古段階A）と堀（古段階B）は、この西側調査区近辺で接続していたものと考えられるが、直接的な重複関係は不明である。

今回の調査では、現地表面からの深さが深くなるため、安全が確保できる範囲内で調査を行った。堀（古段階A）は、土層観察用のベルトを設定した上で掘り下げた。堀（古段階B）は、Ⅲ期の擾乱を利用して調査区を設定し、ある程度の高さまで掘り下げた。堀（古段階C）では、岸が落ち込んでいく部分は一定の深さまで調査し、岸に掘り込まれた遺構の有無を確認した。また、K3区では全面的に掘り下げたほか、東・西・中央の3ヶ所に深掘り調査区を設定し、埋土の状況などを把握することを目的とした。

・堀（古段階A）（図16-⑤、図版7-3・4）

調査できる面積が狭いことから、10列に南北方向のベルトを設定し、全面的に掘り下げた。埋土は4枚確認した。埋土は粘土が主体を占めているが、2層では有機物が腐食したとみられる黒色土が堆積していた。底面はI・J列境付近から南側に急激に落ち込む。ほかの遺構などは確認できなかった。

・堀（古段階B）（図16-④、図版6-2）

13列で確認されたⅢ期の擾乱を利用し、掘り下げを行った。当初、礫を多量に含む埋土が特徴的な1号遺構と重複しているものと考えられた。しかし、断面や平面形状等を観察した結果、1号遺構は堀（古段階B）が埋没中に形成された溝であることが判明した。その溝は、13号溝として登録した。

埋土は、11枚確認した。Ⅲ期の擾乱により5・6層程度までは、すでに破壊されていた。そのため、新たに掘り下げたのは、それ以下の層となる。これらの埋土には、砂や礫の夾雜物は少なく、地山由来の粘土が主体の土塊が堆積している。そして、下層に近い10層では、堀（古段階A）の2層と同様に黒色土が堆積していた。

これらの埋土を掘り下げた結果、北半分までは底面を検出することができた。その底面は、11号溝近辺から急激に落ち始め、凹凸が著しい。落ち込みが始まる位置は、堀（古段階A）とおおむね同じでI・J列の境近辺に位置する。

・堀（古段階C）（図15、図版5-3・4、7-1・2・5-7、図版8-1）

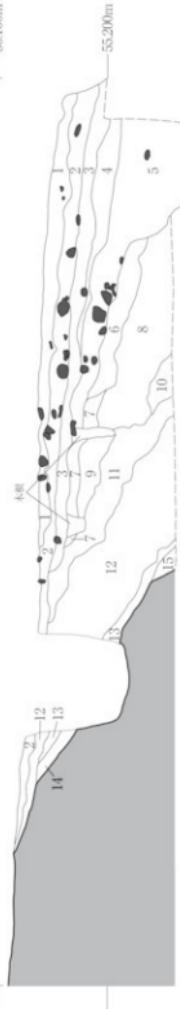
北・東部において岸部を確認するために掘り下げを行った。14～6区の北側の岸部は、擾乱部の断面である程度は確認できていたため、全面的に掘り下げた。その結果、1号土坑を検出した。東側岸部のK3区では、全面的に掘り下げ、底面を確認している（図21-②、図版8-6、9-2）。この区では、堀（古段階C）は西方に向かって緩やかに傾斜していたが、6号溝近辺からは急激に落ち始める。その埋土は、2枚のみであった。最下面是地山ブロックが混じる粘土層で、その上の層は有機質が腐食した黒色土を含む粘土層である。さらにその上には、堀（新段階）の埋土が堆積する。

東側調査区では、6列に幅1m程のトレンチを設定し、約1m掘り下げた（図15-①）。北側の岸部に1号土坑



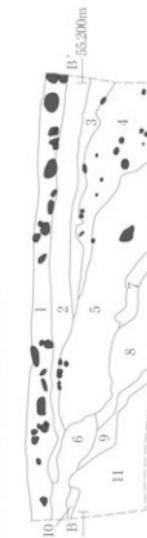
図14 武家屋敷地区第16地点における堀（古段階）とその他の遺構
Fig.14 The Distribution of an old stage moat and other features at BK16

(1) 圖 (古段階 C) 東側調査区東壁断面図
A-A'



1 10Y6S 4に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり強・酸化鉄をミナガに多く含む
2 10Y6S 2灰褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
3 10Y6S 2灰褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
4 10Y6S 3に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまりやや強・酸化鉄をミナガに多く含む
5 10Y6S 2灰褐色、砂質シルト、粘性弱・しまりやや強・酸化鉄をミナガに多く含む
6 10Y6S 3に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまりやや強・酸化鉄をミナガに多く含む
7 10Y6S 2灰褐色、砂質シルト、粘性弱・しまりやや強・酸化鉄をミナガに多く含む
8 10Y6S 2灰褐色、砂質シルト、粘性弱・しまりやや強・酸化鉄をミナガに多く含む
9 10Y6S 2灰褐色、砂質シルト、粘性弱・しまりやや強・酸化鉄をミナガに多く含む
10 10Y6S 4に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
11 10Y6S 4に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
12 10Y6S 4に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
13 10Y6S 4に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
14 10Y6S 4に25%黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・酸化鉄をミナガに多く含む
15 10Y6S 1みどり色、砂質シルト、粘性弱・しまり弱・酸化鉄をミナガに多く含む

(2) 圖 (古段階 C) 中央調査区東壁断面図
B-B'



1 75Y6S 1褐色地、砂質弱・しまり強・明黄色色點をミナガに多く含む
2 75Y6S 1褐色地、粘性弱・しまり中・黃褐色の砂質シルトをミナガに多く含む
3 75Y6S 1褐色地、砂質シルト、粘性弱・しまり中・黃褐色色點をミナガに多く含む
4 X3 黄褐色、砂質シルト、粘性弱・しまり中・オリーブ色地、砂質シルトをミナガに多く含む
5 10Y6S 1褐色地、砂質シルト、粘性弱・しまり中・明黄色色點をミナガに多く含む
6 10Y6S 1褐色地、砂質シルト、粘性弱・しまり中・明黄色色點をミナガに多く含む
7 10Y6S 1褐色地、砂質シルト、粘性弱・しまり中・明黄色色點をミナガに多く含む
8 10Y6S 1褐色地、砂質シルト、粘性弱・しまり中・明黄色色點をミナガに多く含む
9 10Y6S 2より79%、砂質シルト、粘性弱・しまり弱・酸化鉄をミナガに多く含む
10 10Y6S 2より79%、砂質シルト、粘性弱・しまり弱・酸化鉄をミナガに多く含む
11 X3 黄褐色、砂質弱・しまり弱・オリーブ色地、砂質シルトをミナガに多く含む

(3) 圖 (古段階 C) 西側調査区西壁断面図
C-C'

③場 (古段階 C) 西側調査区西壁断面図



場 (古段階 C)



場 (古段階 C)

Fig.15 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (1)
Fig.15 Features of the Edo period BK16 (1)

が位置する。その1号土坑近辺から、南側に向かって急激に傾斜し、I・J区の境近辺から更に落ち込む。その落ち込み部から南側に関しては、底面を確認することはできなかった。

埋土は15枚確認した。当初に堆積した層は、底面の急傾斜に従い堆積しているが、徐々にその傾斜は緩やかとなる。最後に堆積した1～4層の辺りでは、ほぼ水平に堆積している。また、5層堆積時には、調査区南側が大きく落ち込んでいる。この5層は、礫を多く含む特徴的な層である。また、底部近くの13層において、有機物が腐食した黒土層を確認した。

中央調査区では、8列に幅1m程のトレンチを設定し、約1m掘り下げた（図15-②）。この区の状況は、東側調査区とほぼ変わりない。ただし、堆積が厚いためか、底面はどの場所でも確認できなかった。埋土4層は東側調査区5層と対応するものと考えられる。その他の状況も、東側調査区と変わりない。

西側調査区では、K・L11区に2m四方のグリッドを設定し、約1m掘り下げた（図15-③）。その結果、北側端において地山を確認することができた。南側に向かって突端状に残っていた。そのため、埋土は東側と南側に向かって傾斜して堆積する状況となっている。

埋土は、5枚確認した。1層は、小礫を多く含む砂質の土層である。その特徴から、この層は東側調査区5層に対応するものと考えられる。また、4層は黒色の腐植土を含む層であり、この層も層準とその特徴から、東側調査区13層に対応する。埋土の層厚は、それほど厚くはない。西側に向かって傾斜するK3区のあり方や西側調査区の状況からすると、中央調査区の近辺が最も深い場所であることがわかる。

・堀（古段階）の堆積状況と遺物（図17）

各調査区の埋土の堆積状況を整理して、堀（古段階）の埋土を大別して示したのが、図17である。

各調査区では、共通する埋土の堆積状況が見て取れた。最下層には、地山由来の汚れた粘土層（埋土⑥層と呼称する。以下同様）が堆積し、その直上には、黒色土層（埋土⑤層）が堆積する。その後に、地山ブロックや黒色土を含む粘土層（埋土④層）が厚く堆積するが、水性堆積のような痕跡は認められない。そして、拳大程度の円礫を含む砂礫層（埋土③層）が堆積する。この砂礫層は、層状に堆積するのではなく南側に窪むように堆積する。その後に再び地山ブロックを含む粘土層（埋土②層）が堆積するが、この時点では平坦となる。最終的には、小礫を含む層（埋土①層）が堆積し、地表面となる。

このような状況から、本調査区における堀（古段階）は、常に漏水するような状況ではなかったことがわかる。そして、埋土⑤層の存在から、堀（古段階）の周辺には植物が繁るような景観が想定できる。また、調査区南側では窪むように埋土③層が堆積していた。堀（古段階C）の各調査区では明瞭に確認することができなかったが、堀（古段階B）で検出した13号溝のように、堀がある程度埋没した段階で溝が構築され、埋土③層により埋没した可能性もある。この層が堆積した段階で、堀（古段階）は、比較的平坦となり、次段階（I b期）の各遺構が形成されたものと考えられる。

堀（古段階）出土の遺物は、陶器8点、瓦7点、古銭1点、土器4点である。調査した面積も狭いため点数も少ないが、元々含まれる遺物が多くはない。そのうち、時期がわかる資料としては、CT1がある（図版23）。この遺物は堀（古段階）埋土⑤層から出土しており、堀（古段階）が埋没していない時期の遺物とみられる。17世紀初頭から前葉の年代が比定できる。

【1号土坑】（図18-③～⑤、図版8-2・3）

堀（古段階C）の北側肩部を掘削中に検出した。形状は瓢形を呈しており、その規模は長軸1.98m×短軸北側1.00m、短軸南側0.66mとなる。検出面は、地山と堀（古段階C）の東側調査区埋土13層上面となる。堀（古段階C）が埋没する過程で形成されたものと考えられる。

埋土は7枚確認された。下部の6・7層は粘土質であり堀（古段階C）埋土13層と類似する。中層の4・5層は地山を多量に含む土層であり、周囲からの流入土と推定できる。1～3層は、しまりが比較的弱く、黒～暗褐

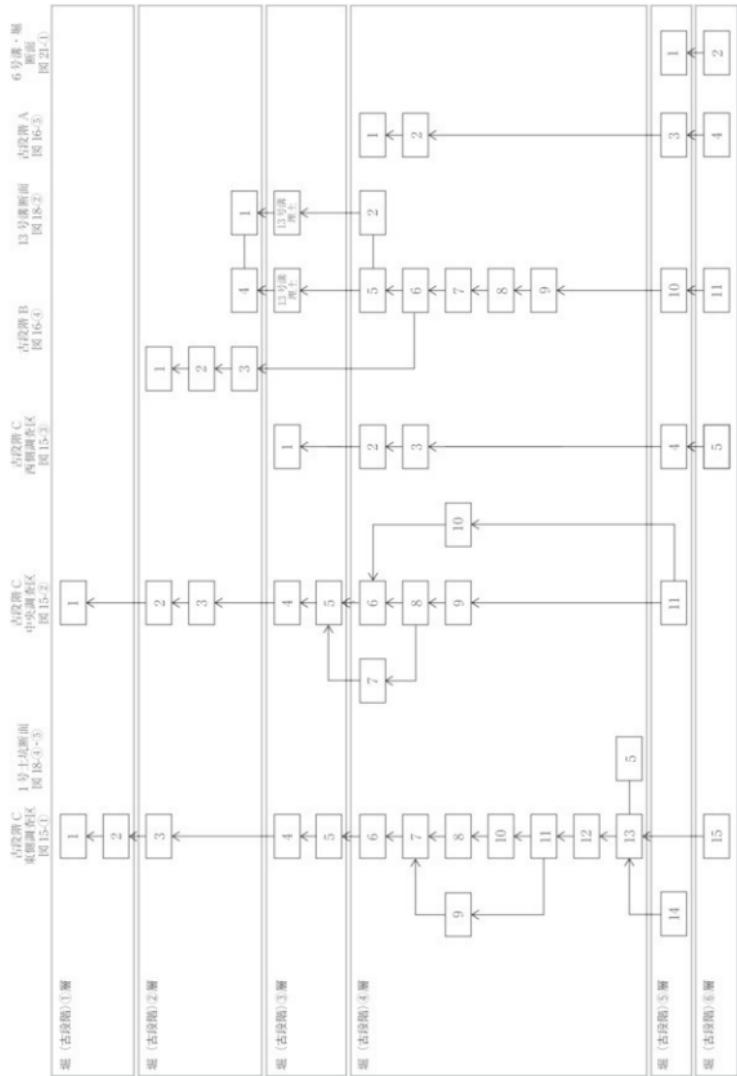
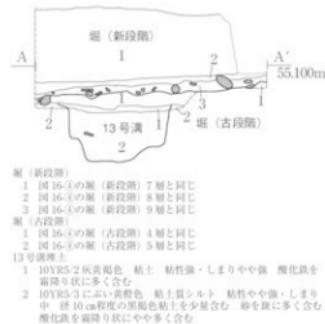


図17 堀（古段築）埋 地図 (古段築) 1 範
Fig.17 The relationship of fill at the old stage moat.

①13号溝平面図



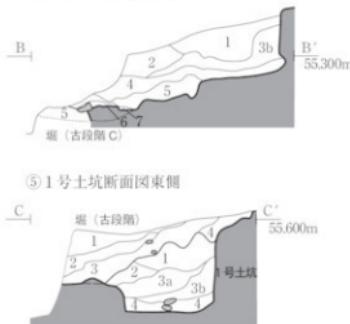
②13号溝断面図



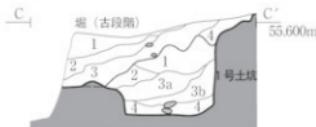
③1号土坑平面図



④1号土坑断面図西側



⑤1号土坑断面図東側



1号土坑

- 1 10YR2-2 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや弱・しまりやや弱 水化鉄粘土をやや多く含む にふい 黑褐色粘土をやや多く含む 水化物を微かに含む
 - 2 10YR3-3 黑褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中・にふい 黑褐色粘土を多く含む 下層に黒褐色粘土を多く含む 水化鉄を斑状に含む
 - 3a 10YR2-1 黑褐色 粘土 軟塑性・しまりやや弱・にふい 黑褐色粘土を多く含む 下層に黒褐色粘土を多く含む 水化鉄を斑状に含む
 - 3b 10YR5-2 黒褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中・にふい 黑褐色粘土を多く含む 下層に黒褐色粘土を多く含む 水化鉄を斑状に含む
 - 4 10YR5-3 にふい 黑褐色 粘土 軟塑性・しまりやや弱・にふい 黑褐色粘土を多く含む 水化鉄を斑状に含む
 - 5 10YR2-1 黄褐色 粘土 軟塑性・しまり強・しまり弱 黄褐色粘土を多く含む 水化鉄を斑状に含む
 - 6 10YR4-2 灰褐色 砂質シルト 粘性やや弱・しまり弱 灰5cm程度の水化鉄粘土を多く含む
 - 7 10YR4-2 灰褐色 粘土 粘性やや強・しまりやや弱 灰1cm程度の水化鉄粘土を多く含む
- 層(古段階)
 - 1 10YR4-3 にふい 黑褐色 粘土質シルト 粘性中・しまり強 水化鉄を斑状に含む
 - 2 10YR5-2 黑褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり強 水化鉄を斑状に含む
 - 3 10YR3-3 黑褐色 粘土質シルト 粘性やや強・しまり中・にふい 黑褐色粘土を多く含む (南側は特に多い) 水化鉄を斑状に含む
 - 4 10YR5-3 にふい 黑褐色 粘土 軟塑性・しまりやや弱・にふい 黑褐色粘土を多く含む
 - 5 10YR2-1 黄褐色 粘土 軟塑性・しまり強・しまり弱 黄褐色粘土を多く含む
 - 6 10YR4-2 灰褐色 砂質シルト 粘性やや弱・しまり弱 灰5cm程度の水化鉄粘土を多く含む
 - 7 10YR4-2 灰褐色 粘土 粘性やや強・しまりやや弱 灰1cm程度の水化鉄粘土を多く含む

0 1m
 (1) : S=1/60
 0 1m
 (2)~(5) : S=1/40

図18 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (3)

Fig.18 Features of the modern period at BK16 (3)

色を呈するシルトあるいは粘土の土層である。堀（新段階）が埋没するような、砂質土によって覆われていないことから、堀（古段階）が機能している時期に形成され、埋没した土坑であると言える。出土遺物はない。

【13号溝】（図18-①・②、図版8-4・5）

当初は3区のⅡ期の搅乱部底面にて確認され、1号遺構として登録した。その後、断面の検討から堀（古段階B）の埋土中に構築された溝であることが判明した。堀（古段階B）の埋土4層（図16-④）に覆われる。その層準からすると、堀（古段階）がほぼ埋まりきった段階で、13号溝が構築され、その後に最後の堀（古段階）の埋土によって覆われた状況が窺える。この溝は、南から西に向かって緩やかに湾曲しており、そのほとんどが調査区外に伸びるため詳細は不明である。規模は、南側が最大幅となり2.9m程となる。

埋土は、東側と西側で大きく様相が異なる。東側埋土は拳大の円礫を多量に含む層である（図16-④）。その土層の分布は、図18-①に示した。西側はシルト・粘土のやや均質な土層である（図18-②）。この溝の底面の高さは、西側から南側に向かって大きく傾斜しており、東側の砂礫層は最後に埋没した埋土であることが推定できる。

出土遺物としては磁器小中皿1点、陶器中碗丸1点（図版24: CT22）が出土しているが、その時期は不明である。

2. Ib期の遺構

堀（古段階）が埋没した後に形成された遺構群である（図19）。

【ピット7】（図20-①・②、図版11-1・2）

3区に位置する。重複関係から11号溝より新しく、10号溝より古い。10号溝に半分を切られているため形状は不明であるが、楕円形を呈していたものと推定できる。規模は長軸40cm×残存短軸22cmである。埋土は灰褐色の粘土質シルト層の1枚のみである。柱痕跡も認められた。底面には円礫が位置しているが、掘り方等が認められないことから本ピットに伴っていないと判断した。しかし、柱の重み等でめり込んだ可能性もある。出土物はない。

【ピット9】（図20-①・③、図版11-3・4）

3区に位置する。重複関係から11号溝より新しい。形状は楕円形で、規模は長軸44cm×短軸36cmである。埋土は1枚のみである。柱痕跡等は確認されておらず、用途は不明である。出土遺物はない。

【ピット10】（図20-①・④、図版11-5・6）

3区に位置する。形状は不整な楕円形で、規模は長軸34cm×短軸24cmとなる。埋土は1枚のみである。ピット9と同様に、用途は不明である。出土遺物はない。

【ピット11】（図20-①・⑤、図版11-7・8）

3区に位置する。形状は楕円形で、規模は長軸28cm×短軸26cmとなる。埋土は1枚のみである。ピット9と同様に、用途は不明である。出土遺物はない。

【6号溝】（図21、図版8-6・7、図版9-1～3）

2区に位置し、東西方向に横走する。調査区内での長さは10.5m、最大幅は1.2mとなる。埋土は1枚のみである。この溝の範囲中において、立木が腐食したような痕跡が列状に残されていた（図21-①、図版8-7）。また、埋土の中には多数の木根による搅乱が認められた。これらの痕跡から、溝を開拓した後に、植樹した痕跡と推定した。この樹木の痕跡の直径は、おおむね30cm程度であり、それほど大きくなはない。地点によっては木根が遺存していたため、その樹種同定を行った。その結果、スギであることが判明している（第VI章）。この樹木は、堀（新段階）新段階の断面において、ピット状の痕跡として確認しており（図25-①）、堀（新段階）の埋没が進行する途中にも樹立していたことがわかる。また、6号溝は堀（古段階）が落ち始める箇所に位置していることから、

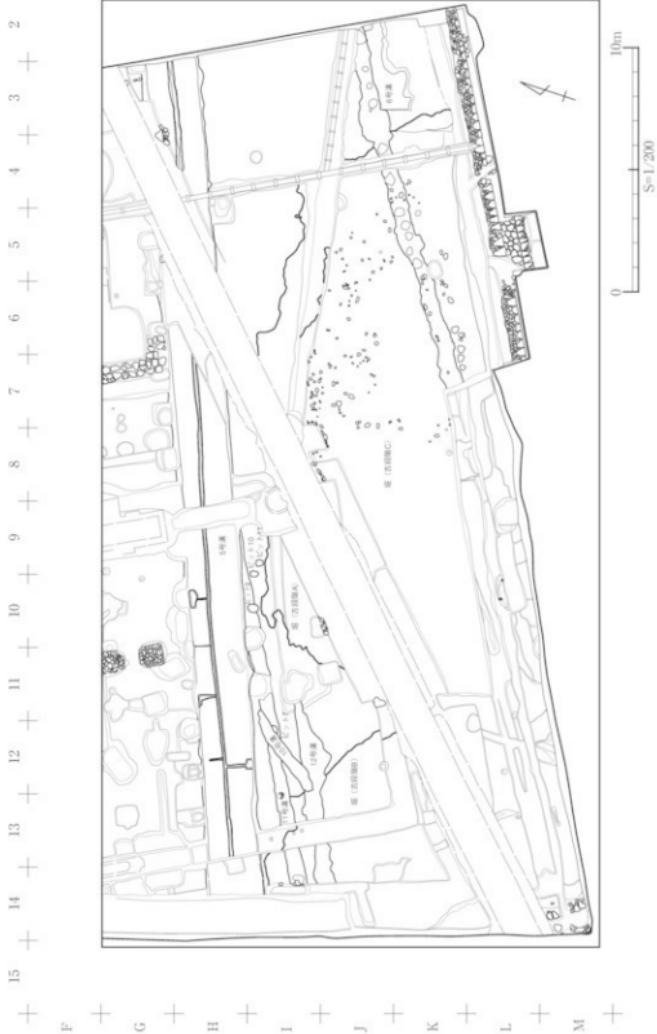
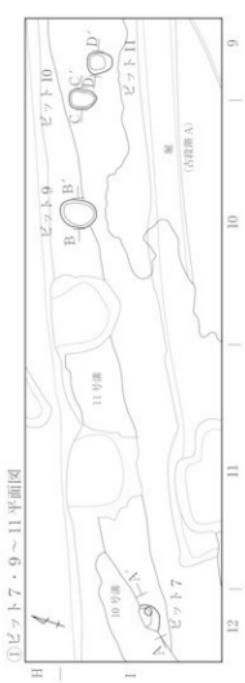


図19 武家屋敷地区第16地点における堀（古段築）上面の遺構
Fig.19 The distribution of features on the surface of the old moat at BK16



⑤ ピット 11 断面

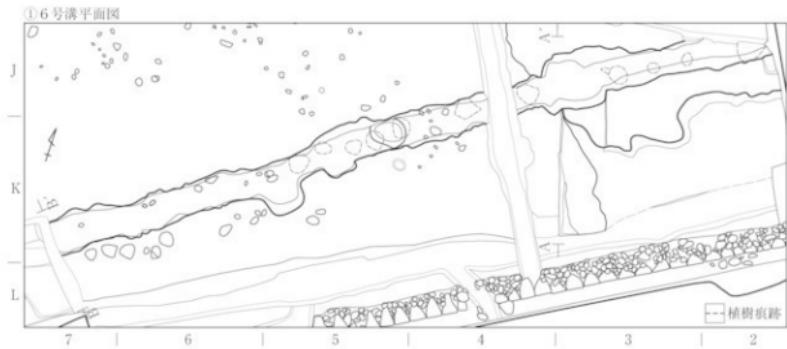
④ ピット 10 断面

③ ピット 9 断面

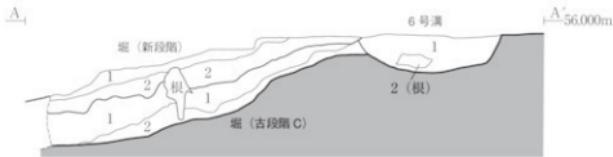
② ピット 7 断面

- | | | |
|--|--|--|
| 1. 10Y7/4 に近い黄褐色、粘土、堅性強、しまり強
微疊層を少含む マンシング粘土層がに含む
併し、この底層は、ルート土の有効強度
Rc=1.8 (σv=70kPa) の有効強度
2. 0.1m 1.2m 厚の、粘土質粘土層
この層は、Rc=1.6 (σv=60kPa) の有効強度
を有する。併し、この層は、ルート土の
有効強度 Rc=1.8 (σv=70kPa) の有効強度。 | 1. 25G7/1 斜カリーグル色、粘土質シルト、堅性
やや強、しまりやや弱、3.5 (σv=60kPa) の有効
強度を有する。併し、この層は、ルート土を少含む | 1. 10Y7/4 に近い黄褐色、粘土質シルト、堅性
やや強、しまりやや弱、3.5 (σv=60kPa) の有効
強度を有する。併し、この層は、ルート土を少含む |
| | 2. 0.1m 厚の、粘土質粘土層
この層は、Rc=1.6 (σv=60kPa) の有効強度
を有する。併し、この層は、ルート土の
有効強度 Rc=1.8 (σv=70kPa) の有効強度。 | 2. 0.1m 厚の、粘土質粘土層
この層は、Rc=1.6 (σv=60kPa) の有効強度
を有する。併し、この層は、ルート土の
有効強度 Rc=1.8 (σv=70kPa) の有効強度。 |
| | | 3. 0.1m 厚の、粘土質粘土層
この層は、Rc=1.6 (σv=60kPa) の有効強度
を有する。併し、この層は、ルート土の
有効強度 Rc=1.8 (σv=70kPa) の有効強度。 |
| | | 3. 0.1m 厚の、粘土質粘土層
この層は、Rc=1.6 (σv=60kPa) の有効強度
を有する。併し、この層は、ルート土の
有効強度 Rc=1.8 (σv=70kPa) の有効強度。 |

図20 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (4)
Fig.20 Features of the Edo period at BK16 (4)



② 6号溝・堀断面図



6号溝

1 10YR7/3に似る黄褐色 粘土 粘性強、しまり中 跡分を多く含む にぶい黄褐色粘土小ブロックを斑状に僅かに含む 白色土粒を含む 径5mm程度の黄褐色を僅かに含む

2 10YR5/3の暗褐色 粘土 粘性強、しまり弱 径5mm程度の礫を僅かに含む 植栽された木の根によるもの

堀(古段階C)

1 10YR5/4に似る黄褐色 粘土 粘性強、しまり中 跡分を含む 黄褐色土粒、白色土粒を僅かに含む 黒褐色粘土小ブロックを極僅かに含む

2 10YR5/6黄褐色 粘土 粘性強、しまり中 白色土粒、黄色土粒を含む にぶい黄褐色粘土小ブロックを斑状に含む

堀(新段階)

1 10YR4/3に似る黄褐色 粘土 粘性極めて強、しまり中 黄褐色土粒を僅かに含む マグザン、白色土粒を僅かに含む 南側ではグライ化する

2 10YR7/4に似る黄褐色 粘土 粘性強、しまり中 跡分を含む 黄褐色土粒を含む 南側ではグライ化する

堀(新段階)

1 10YR5/3の2層と同じ

2 10YR5/3の3層と同じ

3 10YR4/3に似る黄褐色 砂質シルト 粘性弱、しまり弱 径1cm程度の風化した礫を含む

やや多く含む 黄褐色砂をラミナ状に含む

4 10YR5/3の5層に対するが、南側は斑状に風化した礫を多く含む

5 10YR4/1の暗灰褐色 粘土 粘性強、しまり中、褐色砂を含む 風化した礫を斑状に多く含む

6 10YR5/3の黄褐色 砂質シルト 粘性やや弱、しまりやや弱 風化した礫を斑状に少量化する

7 10YR4/3に似る黄褐色 粘土 粘性強、しまり中、褐色砂を斑状に少量化する

8 10YR5/2の7層と同じ

9 10YR5/2の8層と同じ

10 10YR5/2の9層と同じ

6号溝
10YR4/3に似る黄褐色 粘土質シルト 粘性やや強、しまり中 褐色砂を斑状に多く含む

風化した礫を含む

③ 6号溝・堀(新段階) 断面図 (K・L'・K')

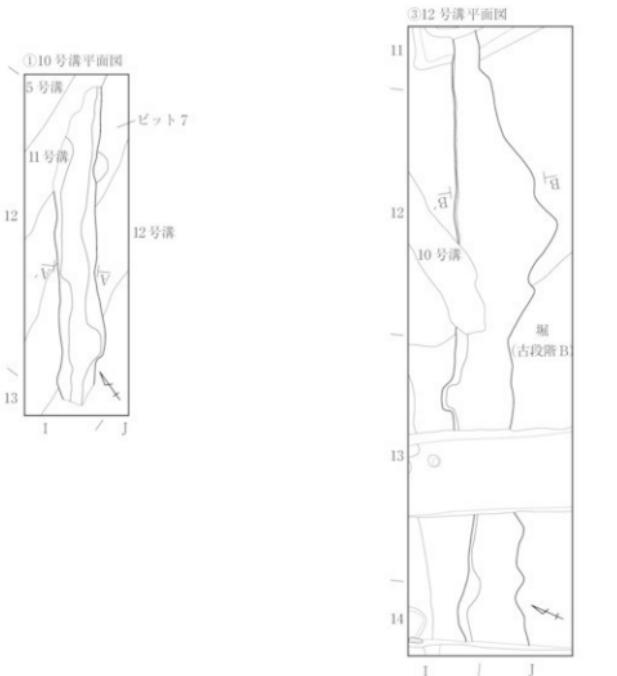


0 1m
平面図: S=1/100

0 1m
断面図: S=1/40

図21 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (5)

Fig.21 Features of the Edo period at BK16 (5)



1 25GY3/1 鞍オリーブ灰褐色。砂質シルト
粘性や砂混・しまり中・白色土粒を少
量含む 砂と酸化鉄を斑に含む 径1
cm程度のオリーブ灰褐色土上を少量含む
小塊を僅かに含む

1 10YR5/3 に近い黄褐色。粘土質シルト。粘性や
強・しまりやや強。酸化鉄を斑に多く含む 径3
-5cm程度の塊をやや多く含む 上層に近い黃
褐色粘土を多く含む 黄砂を僅かに含む

0 1m
平面図: S=1/60
0 1m
断面図: S=1/40

図22 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (6)
Fig.22 Features of the Edo period at BK16 (6)

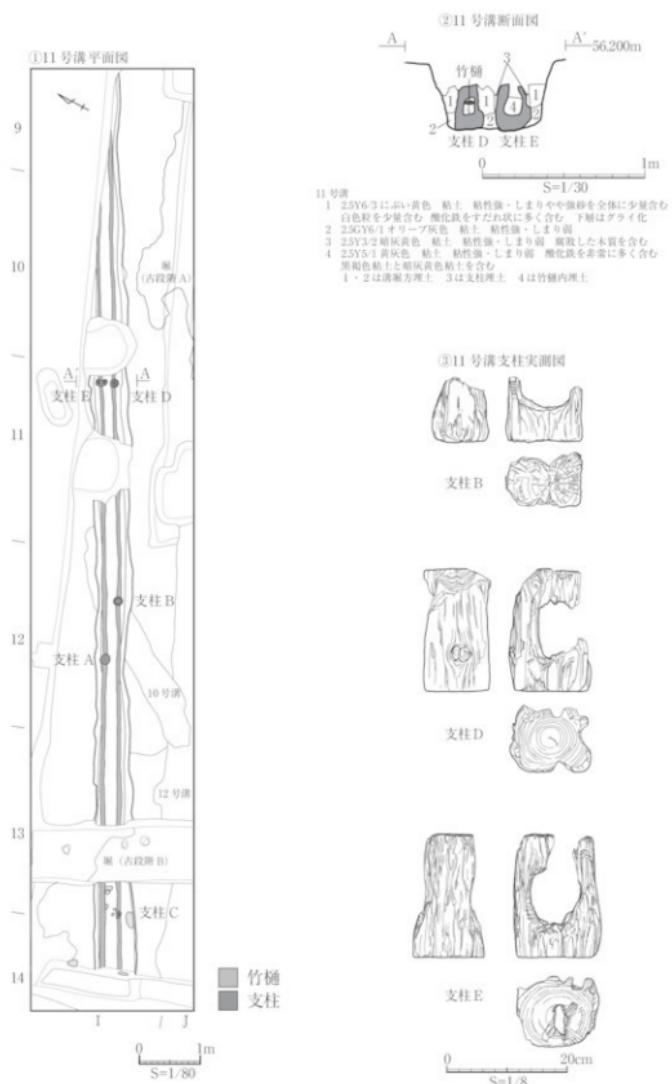


図23 武家屋敷地区第16地点における近世の遺構 (7)
Fig.23 Features of the Edo period at BK16 (7)

千貫沢へと落ち込む傾斜変換点の場所に設定し、杉並木を形成しようとしたものと推定できる（図21-②）。なお、調査区外ではあるが、調査区南壁にもその痕跡が確認できている（図版16-2～4）。出土遺物はない。

【10号溝】（図22-①・②、図版9-4・5）

3区に位置する溝で、部分的にしか残っていない。11・12号溝、ピット7より新しい。残存していた長さは3.8m、最大幅は0.6mである。埋土は、暗い灰色の砂質シルト土であり、小砾をわずかに含んでいた。出土遺物はない。

【11号溝】（図23、図版9-6、10-1～3）

3区に位置する溝で、残存していた長さは14.8m、最大幅0.7mの規模となる。埋土を掘り下げた結果、木製の雑手で支えた竹樋を確認することができた。

この竹樋は、調査現場では節が確認できたことから竹と判断したが、ほぼ土壤化しており取り上げることはできなかった。雑手に関しては、5箇所の雑手のうち3箇所のものを取り上げることができた（図23-③）。この雑手は、中央部を削り抜き、その穴に竹樋を通したものである。この支柱は、樹種同定の結果スギなどであることが判明している（第VI章）。

埋土は、周囲の地山粘土とはほぼ同じであり、竹樋設置後にすぐに埋められたことが想定できる。竹材は、径3～8cm程度のもので、長さは雑手間の距離から3.6m～5.1m程となる。雑手における竹同士の結合の状況は不明である。雑手と竹樋を設置後、地山粘土と同じ土で埋め戻している（図23-②）。竹樋内部には、水が流れた後に溜まった泥が確認できた。なお、出土遺物はない。

近隣の調査における類似する近世の竹樋としては、仙台市教育委員会が調査した川内キャンバス北西側地点における事例がある（原河英二ほか2009）。II区IV層上面で検出された1・2号竹樋は、18世紀代とされている。この竹樋は木製升に接続するもので、複数の雑手も確認されている。

【12号溝】（図22-③・④、図版10-4・5）

3区に位置する溝で、南側は削られているため、正確な形状は不明である。北側の肩部のあり方からすると、浅い幅広の溝であったと推定できる。堀（古段階B）より新しいが、10号溝より古い。残存している長さは7.5m、同様に残存幅は1.2mとなり、近くのほかの溝と比べてやや幅広である。埋土は、周囲の土と類似するが、黒褐色土やにぶい黄橙色土、大きめの砾を含んでいる。出土遺物はない。

3. Ic期の遺構

【堀（新段階）】（図24～26、図版4-6～8、5-1・2、12～15、16-1～5）

2区調査時にその南半で検出した遺構である。その北端は、大体が5・14号溝で破壊されており、G3区にて部分的に確認しているのみである（図26-④、図版16-5）。残存している埋土の深さは30cm程度と浅く、底面となる地表面も南側に比べて高い。もとより、北側はII期に地表面が削平されではいるが、G3区における状況から、堀（新段階）がより北側に伸びる可能性は低いと推定する。

今回の調査では、東側にトレチ、中央部にベルトを設定して掘り下げ、その断面から堆積状況を確認した。西側については堀（古段階B）と同様に、III期の搅乱を利用して堆積状況を確認した。それぞれ、東側調査区、中央調査区、西側調査区と呼称して説明する。

・東側調査区

堀（新段階）を検出した後に、その堆積状況を確認するために2区に設定した調査区である。5列に幅1m程のトレチを設定し、掘り下げた（図版13-2、14-1～6）。

埋土は7枚確認した（図25-①）。そのうち1・2層は、小円砾を少々含み、シルトと砂が斑状に混じる層である。1層はシルト、2層は砂が主体となる。3層は最も厚い層である。粘土が主体であるが、砂やシルトを斑

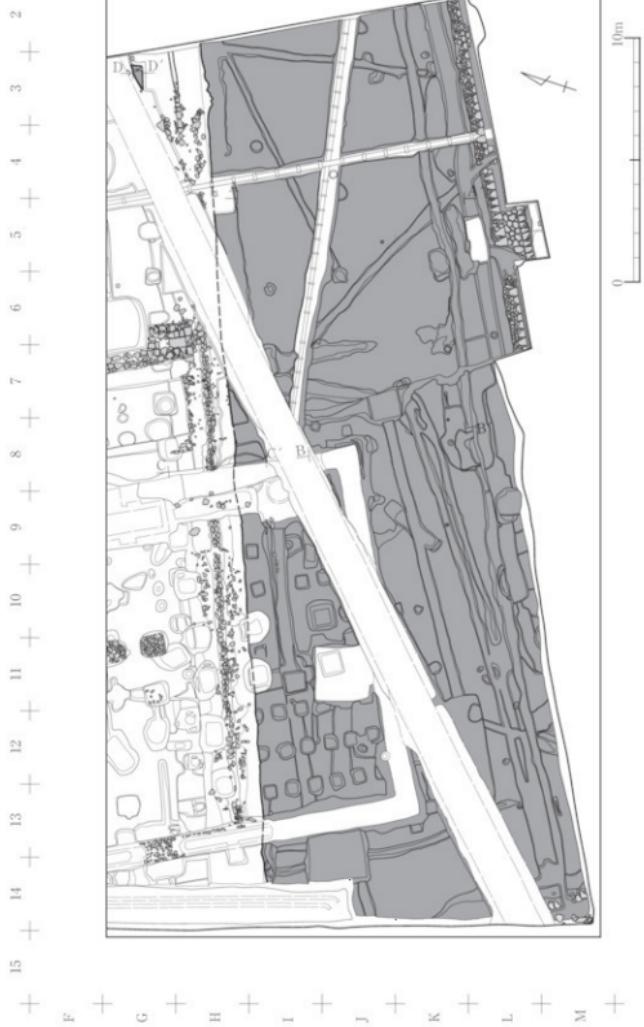


図24 鹿児島地区第16地点における堤（新段堤）の分布範囲
Fig.24 Distribution of the new stage moat at BK16

①場(新段階)東側調査区断面図 H-K5(K)



②場(新段階)中央調査区断面図 I-K7(K)

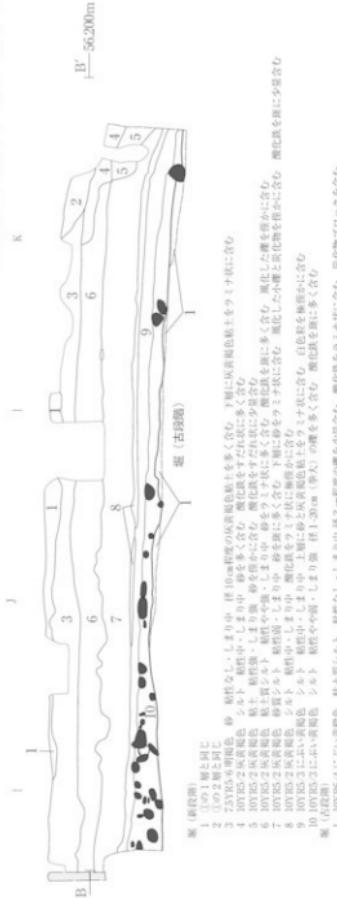
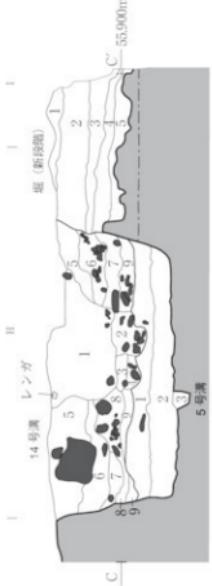


図25 舞鶴駅地区第16地点における近世の遺構
Fig.25 Features of the modern period at BK16 (8)

Im
S=1/40

35 · 14号溝、堀（新段階）断面図 (H-18 IX)



セイヨウヒルギの花序は、葉腋に短い枝を出し、枝先に花をつける。花は、白や淡黄、紅色など、花色は多様である。花序の構造は、花序軸と花序枝の2つで構成される。花序軸は、花序の中心部に位置する軸で、花序枝は、花序軸から出る枝である。花序枝には、花が一つずつ開く形で、花序軸には、花が複数個まとめて開く形で、花序の構造は、花序軸と花序枝の2つで構成される。

車天の筆を多く持つ。小プロフクを含む、主に中性色佔小半ドリフタード。

45N42Eオリニフ色 梶子 良子 様性強しまり中華大の魔を多く含む

6 10YR5/4 に赤い黃色、紙十、紙性強、しまり中筋2cm、黄色十粒を含む、白色十粒、マングン、

淡黄色純小ブロックを含む
8.5V-3.2オリーブ黒色 紗質シルト
粘性中・しまり中 18.3cm - 事大の面を多く含む

1-2 满源方源土 3 源机面下源机土

1990-91 1991-92 1992-93 1993-94 1994-95 1995-96 1996-97 1997-98 1998-99 1999-2000

751624モリニア 帆士 梶性強：しまり強 マンカンを多く含む

① 極（解説版）版面圖 (G3EX)



1 10Y4/1 黄色 砂質少少下 黏性弱・比重中 下落

2 10Y5/2オリーブ灰色 シルク 韓性中・しまり中

$$0 \xrightarrow[S=1/40]{} \text{Im}$$

図26 武家屋敷地区第16地點における近世の遺構 (9)
 Fig.26 Features of the modern period at BK16 (9)

に含み、下部に粗い砂が増える。また20cm程度の大きな円礫も含んでいる。4層は砂質シルト、5層はシルト質土であり、夾雜物は少ない。6層は礫を多く含む層である。この5・6層は底面が傾斜し始まってからの堆積層である。南側7層は粘土層で小さな円礫を多く含み、非常に固い。これらの層の特徴は、堀（古段階）とは全く異なり、土質や堆積状況から水性堆積によるものと考えられる。また、その断面には、先述のように1b期の6号溝に伴う樹木の痕跡が認められた。3層堆積前までは樹立していたが、その後に倒壊あるいは撤去されたものと推定される。

H区からJ区北半までは底面である地山面が確認できた。J区南半からは堀（古段階）の最上面を検出した。南側に向かい緩やかに傾斜する。

調査区東壁部でも堀（新段階）の埋土を確認した（図9）。その各層は、おおむね東側調査区の各層と対応する（図27）。東側調査区の最下層である7層も存在し、その直下は地山の底面となる。また、2区南東端では堀（新段階）の痕跡は軽く窺む程度であった。そこに堆積した埋土は、東側調査区では対応する層は存在していない。

・中央調査区

4区の掘削の際に、東端にベルトを残した（図版15-1）。また、この部分の断面（図25-②）と3区南東隅（H・I・8区）における断面（図26-③）は、ほぼ南北方向に繋がることから、堀（新段階）における南北方向の断面観察を行うことができた。さらに、少し地点は離れるが、K・L7区における断面（図21-③）は、本調査区の埋土とはほぼ対応することができ、参考となる。

この断面では、10枚の埋土を確認した（図25-②）。それらの層は、ほぼ東側調査区と対応する（図27）。東側調査区3層に相当する部分が、3～7層に細分できた。また、東側調査区4層とした均質的な砂質シルト層は、8・9層に対応し、より混ざりの少ない均質的なシルト層として細分できた。これらの状況からすると、本調査区の堆積層の特徴は、東側調査区の層とはほぼ同じではあるが、それぞれの層がより厚く堆積しているものと考えられる。H・I・8区における断面でも、基本的にはそれぞれの層は対応する（図27）。ただし、東側調査区7層に相当する層は存在していない。

K・L7区断面では、本調査区南端部における堀（新段階）の堆積状況が観察できた（図21-③）。その埋土は、急激に南に向かって傾斜している。堀（古段階）と同様に、千貫沢に向かい落ち込むものと推定できる。

・西側調査区

3区においてⅢ期の擾乱を利用して断面の観察を行った（図16-④）。東側調査区の1・2層と同じ層は存在していないが、3層以下の層の特徴などは類似し、対応させることは可能である（図27）。このような状況から、西側調査区においても、東側調査区と同様の過程を経て、埋没したものと考えられる。

・堀（新段階）の堆積状況と遺物（図27）

各調査区の埋土の堆積状況を整理して、堀（新段階）の埋土を大別して示したのが、図27である。

堀（古段階）と同様に、各地区の堆積状況には共通する特徴が認められた。最上面には、東側調査区1・2層のように、小円礫を少々含み、シルトと砂が斑状に混じる層（堀（新段階）埋土①層と呼称する。以下同様）がある。3区では削平されているためか、認められない。次の層は、堀（新段階）埋土の主体となる東側調査区3層（堀（新段階）埋土②層）である。中央調査区や西側調査区では、更に分かれる。その下は、東側調査区4層で認められた夾雜物の少ないシルト層（堀（新段階）埋土③層）である。この層も場所によっては細分できる。その下部には、小さな円礫を多く含み、非常に固い東側調査区7層（堀（新段階）埋土④層）が分布する。東側調査区において、7層より上部にあり、斜面に堆積した土層である5・6層は、層の特徴から一応堀（新段階）埋土④層に含めた。また、堀（新段階）埋土④層が存在しない地点、あるいはそれより下位に位置すると考えられる層については、まとめて堀（新段階）埋土⑤層とした。底面までの深さが浅い調査区東端の断面では、これらの各層が全て揃っている。

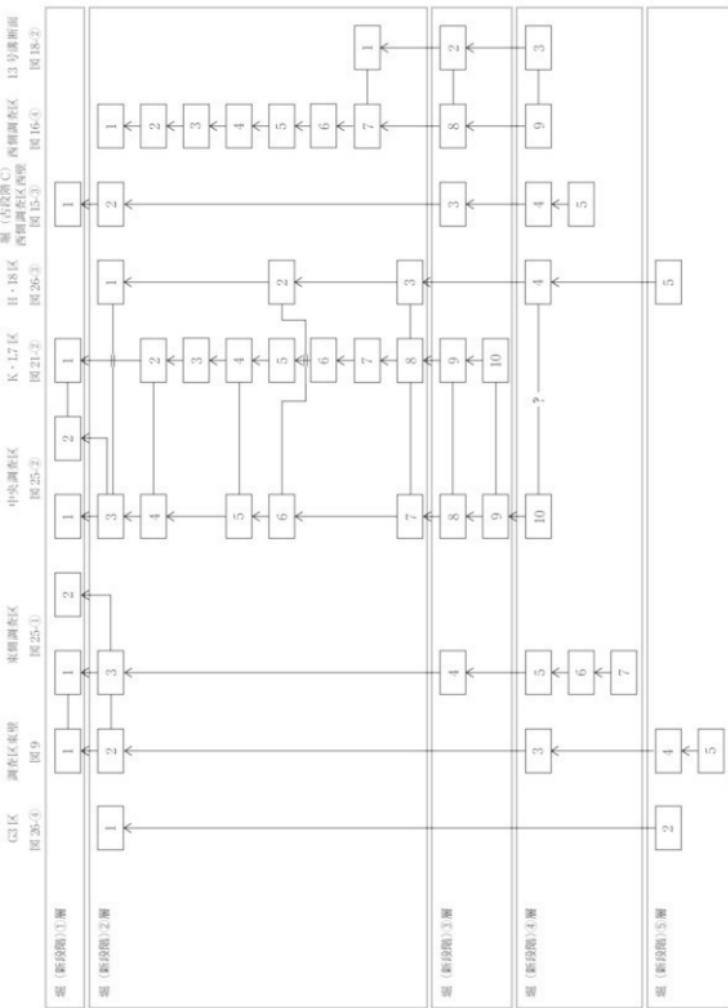


図27 堤(新設地)埋土の対応関係
Fig.27 The relationship of fill at the new stage moat.

前述したように、これらの層は水性堆積層であると考えられる。堀（古段階）直上の堀（新段階）埋土④層は、斜面部に堆積した層（東調査区5・6層）を除き、非常に固く小石を含む層であることから、地表面として利用されている時期に堆積した層とも考えられる。その後に、水害などの水が関係した大きなイベントにより堀（新段階）埋土①～③層が堆積したものと考えられる。なお、堀（新段階）埋土⑤層に関しては、部分的に堆積した土層であるため、堆積過程の詳細は不明である。

出土遺物は、磁器48点、陶器31点、瓦54点、土師質土器19点、瓦質土器1点がある。そのうち時期がある程度判明した埋土下部の資料としては、2区の埋土④層から出土した18世紀前半と推定される陶器がある（図版23：CT14）。それより上層の埋土②層には17世紀から18世紀の頃の様々な遺物が混ざる。3区の堀（新段階）埋土②層から出土した磁器2点（図30、図版22：CJ14、CJ15）は、それぞれ18世紀、17世紀後半から18世紀前半とされる。さらに、2区の堀（新段階）埋土②層からは、18世紀前葉から中葉の陶器中型丸碗がある（図31、図版23：CT8）。これらの状況からすると、堀（古段階）埋没後に地表面として利用されていた時期は18世紀前半頃と推定でき、今回検出した面までは18世紀中葉頃には埋没したものと考えられる。

4. I期以降の遺構

I期以降の遺構は、2号井戸以外は、明確に近代以降の時期と比定される。前述のように、これらの遺構のうち、II・III期の特徴的なもののみ説明する。これらの遺構からは、近代の陶磁器や金属製品などが多数出土している。

（1）II期以前の遺構

【2号井戸】（図28-①・④、図版16-6・7）

本遺構は、1区の3号溝の石組下部より検出された石組の井戸である。遺構分布図ではIIa期に含めているが、I期に遡る可能性がある。後の第Ⅷ章でまとめた時期的変遷を踏まえるならば、Ib期かIc期に相当する可能性が高い。径は1.5m程であり、安全が確保できる約1mの深さまでは半蔵した。井戸の埋土は3枚ある。その中で1層は、有機物をとくに多量に含む層である。井戸の掘り方埋土に関しては1枚だけ確認している。この井戸の石組の構造からすると、近世の可能性が高い。しかし、出土遺物も無く、南側調査区における堀等の諸遺構との関係も全く不明である。

（2）II期の遺構

【4・7・15号溝】（図11、図版17-1）

1・3区に位置する溝である。遺構の重複関係と調査区東側断面（図9）の層準などからすると、7号溝が最も古く（IIa期）、4・15号溝はそれより新しい（IIb期）。7号溝の埋土には、明治期に盛んに使用される粘板岩が多く含まれており、近代の遺構であることがわかる。7号溝は、3区途中で北側に曲がる。その後に様々な方向に分岐している。7号溝の最大幅は東西方向0.6m、南北方向0.4mとなり、深さ22cm程で規模は小さい。4・15号溝は、東西に横走する。それぞれの最大幅は1.2m、0.8mとなる。その規模は7号溝の倍ほどもある。

【5号溝】（図9・11・16・19・26、図版16-8、17-2～4、18-2）

1～3区を東西に横切る規模の大きな溝である。最大幅は2.4mで、深さは西側断面で0.8m程ある。その溝の方向が7号溝とほぼ並行することから、IIa期とした。堀（新段階）北端部を画するように構築されたものと考えられる。

底部中央には幅・深さ共に15cm程の四角形に近い溝が設置される（図19）。部分的に残っていないものもあるが、その溝の上に蓋状に川原石を1列並べ、暗渠状としている（図版17-2）。また、西半部では、壁際に不整方形の掘込みを作り、その掘込部と中央の溝を接続するようにしている（図19）。それらの掘込部と接続する溝

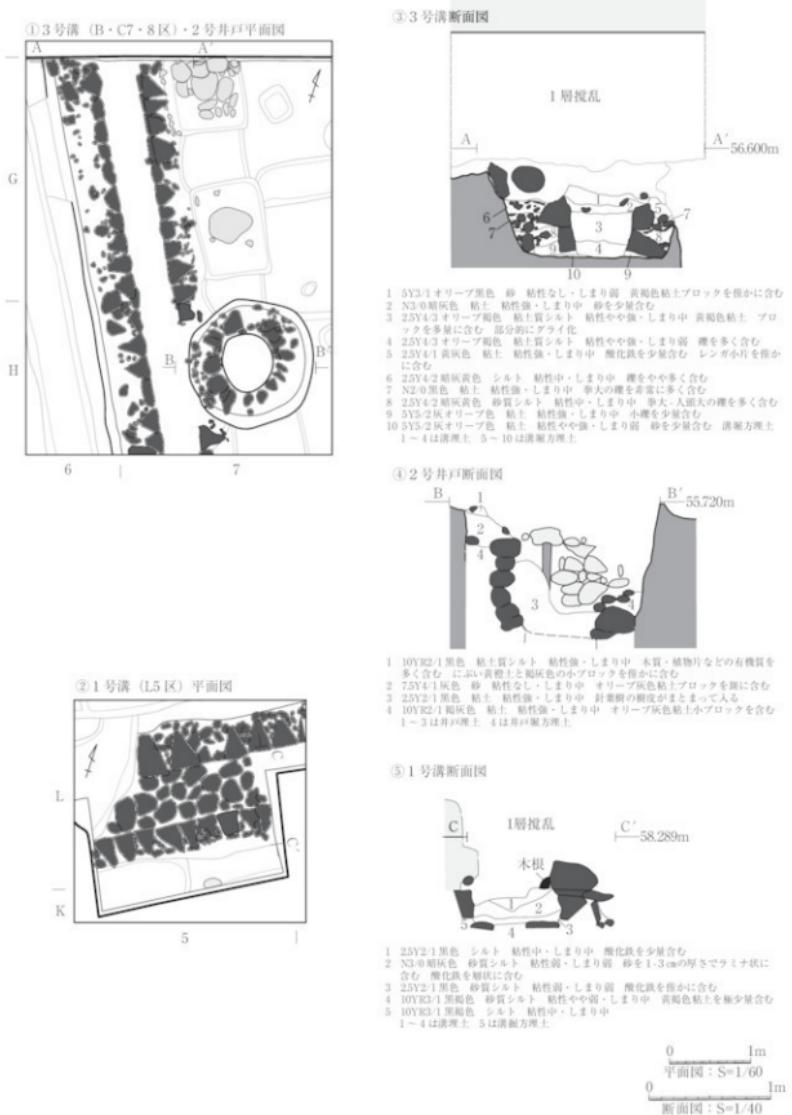


図28 武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期以前の遺構

Fig.28 Features before phase III at BK16



図29 武家屋敷地区第16地点におけるⅢ期の遺構
Fig.29 Features of phase III at BK16

は、中央の溝より浅いことから、周囲から水を集め中央部に排水する構造であったものと考えられる。この溝に石組等の施設が伴ったかどうかは不明である。また、西側断面(図16)と東側断面(図9)の底面溝の底面の標高から、西から東への傾斜度を求ると0.6度(勾配1%)となる。かなり緩やかな溝であると言える。

埋土は、暗渠部分を除いて西側では3枚確認(図16-④)できたが、東側では14号溝に破壊され、ほとんど残っていない(図9)。埋土の各層は、水平に堆積した地山由来の粘土である。この層の堆積状況からすると、5号溝を廃絶する際に、地山粘土で埋め戻し、その後に14号溝を構築したことが想定される。

(3) III期の遺構

【14号溝】(図9・12・16・19・26、図版20-4・5、21)

1～3区の5号溝と同じ場所に構築された東西方向の溝で、3号溝と接続している。その規模は、5号溝とはほぼ同様である。14号溝の時期は、2・3号溝との関係からIIIa期とした。

底部中央部に溝を作り川原石を並べている(図版20-4、21-1)。しかし、5号溝とは異なり2列に敷き並べたもので、床面として構築されたものと考えられる。その理土からは、側壁の石組で使用される石材が多数認められていることなどから、床石の左右には、石組が並んでいた可能性が高い。しかし、石組の石は全て抜き取られていて、確認はできなかった(図版20-4)。

埋土は、中央部に24cm(西側断面:図16-④)の幅で残存していた。埋土下部は粘土質土層、埋土上部は砂質の黒褐色土層である。ただし、埋土下部については溝の理土としたが、底面の石を並べた際の構築土である可能性もある。

石組を設置する際の掘り方の土は、粘土が主体の層と、円礫を混ぜた砂質シルト層が交互に堆積する。調査区東壁部の断面によく残っている(図9、図版4-6)。調査区東端部では、5号溝と14号溝の底面はほぼ同一レベルであった。ただし、底面の溝が暗渠状となっていることから、5号溝底部をそのまま活かして利用した可能性が考えられる。14号溝は、構築時に傾斜を付けて構築東側に向けて排水されていたものと考えられる。西側断面(図16-④)と東側断面(図9)における底面溝の標高から、西から東への傾斜角を求ると2.1度(勾配3.7%)となる。先行する5号溝に比べ、強い傾斜となっている。

また、同じ時期である1～3号溝とは軸線の方向がやや異なる。これは、14号溝が、5号溝を活かして構築されたことによるものと考えられる。

【2・3号溝】(図9・12・28-①・③、29-②～④、図版19-1～4・6、20-1・2)

2・3号溝は、1区に位置するIIIa期の石組の溝である。2号溝は東西方向、3号溝は南北方向に伸びる。3号溝はその南端で14号溝と接続する(図29、図版20-5、21-2)。2号溝と3号溝の最大幅は、それぞれ1.5m、1.6mとなり、ほぼ同規模となる。この2条の溝は、D7区ではほぼ直角(89.4度)に合流する。その合流地点より南は、側壁の石組1段分高くなり、平石を床に敷き詰めた溝となる(図版20-2)。この構造から、それぞれの溝から水が溢れると、14号溝に向かって流れようになっていたことがわかる。この敷石部分では、側石は残っていないなかつたが、14号溝との接続部と同様に、側壁の石組の石が上下2段あった可能性がある。

14号溝との接続部では、コーナー部には側壁の石組が2段残っていた(図29-②、図版21-2)。検出時には大きめの長方形の平石が床面に敷かれていた。上部石組と大きな床石を外し、埋土を掘り下げるに、下部の石組と床面が確認できた(図29-③、図版20-5)。その床面には平石を並べており、部分的にその合間にモルタルが詰められていた。これらのことからすると、下部平石による床面がある程度埋没した後に、上部に大きめの平石を設置したことがわかる。3号溝と14号溝との接続部のコーナーの側壁石組には、その他の石組溝で使用されている様な背部が四角錐状になる石材ではなく、立方体状の石が使用されていた。その立方体状の側石の西側には、1点のみであるが、東西方向へと繋がる側石が残っている。また、14号溝の床面に敷かれた石(図29-④)

が埋まつた後に、3号溝接続部の底面が構築されている。このことから、3号溝は14号溝がある程度埋まつてから構築された遺構であることがわかる。

【1号井戸】(図12・29-①、図版18-3~5、19-1)

1区に位置し、西半部をIV期米軍期の石油タンクにより破壊されているⅢa期の井戸である。この井戸は、今回掘削した範囲内では、ほとんどが壊されているため詳細は不明であるが、残存している部位から桶巻の井戸と捉えられる。掘り方は、非常に大きく一辺2.76m程の方形となる。

この井戸には、東側から暗渠が接続する。暗渠は、底部に10~30cm程の大きめの円礫を並べ、その上に平瓦を並べて埋められていた(図版18-3)。1号井戸との接続部分は掘り下げていないので不明ではあるが、ほかに2本の木樋が接続するものと想定できる(図版18-5、19-1)。この2本の木樋は、2号溝の下を通り、石を用いた建物基礎まで伸び、木製の縦手と接続している。これらの重複関係からすると、1号井戸・木樋・石を用いた建物基礎は2号溝より古いが、Ⅲb期の遺構との重複関係等を考えると、同時期に使用されていたものと考えられる。

【1・9号溝】(図12・28-②・⑤、図版18-6、19-5)

1号溝は、2区南端部で検出された石組溝である。底面に石を敷いており、2・3号溝とはその基本構造が異なる。ほかのレンガ造りの建物などとの関係から、Ⅲb期の遺構として捉えた。埋土は、床石面上に砂が堆積している。

9号溝は、4区西端で検出された石組溝である。この溝は、調査区外に伸びることと、検出した範囲もほとんどが搅乱を受けていることから、その詳細は不明である。その方向等から、1号溝と接続する可能性もある。

(4) I期以降における遺構の変遷

Ⅲa期とⅢb期の遺構配置では、この場所が溝で区画されていたことがわかるのみである。建物などの痕跡は認められず、どのような用途で溝が構築されたのか不明である。ただし、5号溝の存在から、堀(新段階)北側を区画しようとした意図は看取できる。

Ⅲa期になると、石組溝と井戸のほか、礎石などの石を用いた建物が認められる。調査区北西側では礎石を用いた建物があり、その南側では方形の掘り方に石を敷き詰めた基礎による建物があったことがわかる。また、調査区北東側には、木樋や溝・井戸等の施設を備えた同様の基礎による建物が確認できる。14号溝より南には遺構等は確認できず、その北側に建物を複数並べた配置だったことがわかる。

Ⅲb期には、コンクリートとレンガを用いた堅固な基礎を有する建物が確認できる。この段階になると、14号溝のほか、石積みの溝は埋められており、土管とレンガ製の樹による排水設備を整えていたようである。この建物は、14号溝を越えて調査区南半部まで伸びる。1・9号溝はこの時期の遺構である可能性が高い。

IV期になると、この場所を米軍が利用するようになる。石油タンクやコンクリート製の共同溝の軸方向は、Ⅲb期とはほぼ同様であり、前時期と類似する土地の使い方をしていたようである。また、第Ⅲ章で確認したように、図3-1の建物aは、調査区南西側4区におけるIVb期の遺構であると考えられる。当時の空撮写真を確認すると、その周辺には建物がない(図3-1)。東北大学の移転当初も、その景観は基本的には変わらず、その建物aは「詰所」として利用されていた(東北大学百年史編集委員会編2003)。その後には、周辺地域は駐輪所として活用されており、米軍期以降は大きな土地改変は行われていない。一方で、堀(新段階)の北側では1層直下が地山であったことから、Ⅲa期までに近世の面を削平するような大きな造成が行われたと言える。

今回の調査成果から、近代以降の建造物などの変遷を細かく検討することができた。第二師団期の建物にも複数段階があることがわかり、明治初期以後の土地の使われ方が、ある程度判明したものと考えている。

第V章 出土遺物

今回の調査地点は、大部分が明治時代以降に作られた建物や溝によって破壊されていた。そのため、近世の遺物はあまり多くなく、大部分が明治以降の遺物であった。

近代以降の遺物でも、近世以前の遺物と同じく、基本的には採取した。ただし、板ガラス、レンガについては、特徴に乏しく、接合して一個体として認識し、法量や製作技法などのデータをとらえ難いため、採集していない。

遺物の集計では、種類によって集計の仕方を考え、より実態がとらえられるように工夫した。遺物から近代以降と近世との区別が容易な磁器については、近代と近世を分けて集計を行っている。近代磁器では、製作技法ごとに、手描き、摺絵、銅版転写、型打ち、クロム青磁、色釉、白磁に分け、集計した。白磁は、胎土や釉調から近代磁器とわかるものを分類し、近世の白磁と考えられるものは近世磁器として集計している。しかし、破片資料では、どちらと見分けるのに限界がある場合もある。出土遺物全体としては、近代のものが大多数であるため、確實でない白磁は近代磁器として集計した。手描きの磁器については、呉須、釉調、文様、胎土などから近世以前と近代磁器とを分類している。

古銭は、刻まれた文字から年代が判明するため、その種類を示して集計している。

磁器、古銭以外は、近世のものと近代に作られたものを特徴から区別し難いことから、分けずに集計している。特に、金銀製品や歯ブラシなどは、過去の調査の経緯から陸軍第二師団によって使われたものが大多数であろうと考えられるが、遺物からは判断できないため、近代・近世と一緒に集計している。

1. 陶磁器（図30～32、表8～14・19・21、図版22～24・30）

接合・同一個体認定作業後の破片数は、近世磁器148点、近代手描き磁器502点、近代摺絵磁器532点、近代銅版転写磁器96点、近代型打ち磁器9点、クロム青磁18点、近代白磁281点、近代色釉磁器4点、陶器（近世・近代併せて）351点である（表8～19・21）。近世の陶磁器は少なく、近代陶磁器が中心である。

図化して提示したのは、近世のものを中心としている。近代以降の陶磁器は、工業化された規格品であり、「年報」IIにおいて、より完形に近いものを多数報告しているため、一部を写真で掲載したほかは、集計のみを行い、基本的には図化していない。

近世の陶磁器は、堀（古段階）、堀（新段階）、1号溝、2号溝、3号溝、4号溝、5号溝、9号溝、13号溝、14号溝から出土している。堀埋土からの出土が中心であるが、出土量は多くなく、破片も小さいものがほとんどである。13号溝は、堀（新段階）の埋土の下から検出されており、近世に属する構造で、近世磁器、陶器が1点ずつ出土している。1号溝、2号溝、3号溝、4号溝、5号溝、9号溝、14号溝は、近代に属する溝で、主体となる遺物は、近代の磁器やガラス片・金属製品などであるが、近世の陶磁器が若干共伴して出土している。

堀（古段階）からは、磁器ではなく、陶器のみである。図化したのはCT3のみで、CT1～4は写真を掲載した（図31、図版23）。CT1は、鼠志野の中小皿である。文様はみられない。CT2は、焼き締めの擂鉢の破片である、小破片のため、産地、年代はわからない。CT3は碗の底部破片で、高台内を除き、内外面に黒色の鉄釉が掛けられている。文様はみられない。胎土、高台の作りから大堀相馬の製品と推測する。大堀相馬で黒色の鉄釉製品が多くみられるのは、19世紀に入ってからであり、そのころの製品かと推測する。堀からは、古段階・新段階とともに、これ以外に19世紀に遡る陶磁器は出土していない。出土場所は、近代の建物基礎を除去した直下の堀（古段階）の検出面からであり、搅乱からのめり込みの可能性も捨てきれないため、堀（古段階）の年代を示すものではないと考えられる。CT4は岸の擂鉢で、口縁部に灰釉が掛けられ、内面の無釉部分にわずかに拂り目が観察される。年代は、岸で擂鉢が生産され、仙台城跡二の丸地区および武家屋敷地区で多く出土する17世紀代と考えられるが、破片が小さいので詳細な年代はわからない。CT3と同じく、堀（古段階）検出面からの出土である。

堀（新段階）埋土から出土した磁器は、CJ1～CJ16である。小破片のため図化できたのは7点（図30）で、他は写真のみを提示した（図版22）。CJ1は、内面に染付の文様があり、外面は無文である。破片が小さいため、器種不明としたが、端反の中小皿の可能性も考えられる。CJ2は、一重網目文の碗である。CJ3の中小皿は、高台径が比較的小さく、高台の外側より内側の削り込みが深い。見込みに草花文が描かれる。外面には圈線文がみられる。高台の作りから17世紀中葉から後葉頃と考えられる。CJ4は、小型端反碗で、梅花散らし文がみられる。口縁部内外面に圈線がある。CJ5は青磁の中小皿である。高台は輪高台で、豊付き部分のみ釉剥ぎされている。見込み文様はみられない。青磁釉は、光沢のある淡水色である。見込み蛇の目釉剥ぎや蛇の目凹形高台の要素がみられることから17世紀中葉頃かと推測される。CJ7は、青磁の中小皿で、鴉縁状に段を有する。釉は光沢のある淡緑色で、見込みには線彫りによって草文とみられる文様が描かれている。CJ8は、小中皿で、高台が広く低いことから、17世紀後葉から18世紀代と推測される。CJ9は中型の丸碗で草文が、CJ10は中型の端反碗で蝶文が描かれている。薄手の製品で、17世紀後葉から18世紀前葉頃の年代と考えられる。CJ11は、白磁の輪花皿で、陽刻で花唐草文が描かれている。CJ14の瓶類は、網目文と、雪輪風の丸文の中に草文を描いている。丸文が18世紀代に多く用いられる文様のため、18世紀代と推定する。CJ15は、色絵の中小皿で、赤・緑・茶で梅枝文が描かれている。CJ16は、二重格子文の皿である。

堀（新段階）から出土した陶器は、CT5～21である（図31、図版23・24）。CT5は唐津の刷毛目文の大鉢である。刷毛目によって同心円状や波状の文様が描かれており、目跡がみられる。鉄釉や綠釉は観察されない。CT6の中碗は、割れ口にわずかに呉須絵とみられる文様があり、18世紀代の京・信楽と推測した。CT7は、三島手の大鉢で、線彫りと印花によって雷文、花唐草文が施文されている。白土は充填されていない。CT8は、瀬戸・美濃の灰釉腰錆碗である。CT9・10・17・20は、肥前の呉器手碗の破片である。破片資料のため、年代はしづれず、広く17世紀後葉から18世紀後葉ととらえている。CT20は、内面にわずかに呉須絵の文様が観察される。CT11は、糠白色を呈した失透釉の小碗である。仙台城跡二の丸第17地點（『年報』18）の2号溝、14号土坑、3層一括資料には、18世紀末から19世紀初頭のまとまった資料がみられ、糠白色を呈した大堀相馬の灰釉小碗が多数出土している。CT11は、これらと同様の灰釉であり、大堀相馬の小碗と考えられる。CT12は、瀬戸・美濃の瓶類で、灰釉に綠釉が掛けられている。CT13の碗は、器面全体に被熱痕がみられ、釉薬の剥落や発泡が観察される。産地、年代とも不明である。CT15は、軟質施釉陶器である。器種はわからないが、内外面にきちんと透明釉が施釉されており、碗や鉢などが予想される。倍格や鍋など、19世紀の軟質施釉陶器とは異なるものと考えられる。CT16は、小野相馬の中碗で、特徴的な淡青灰白色の失透釉が施釉されている。CT18は灰釉の中型丸碗で、暗青灰色の半失透釉のものである。武家屋敷地区第7地點の調査（『年報』19第2分冊）で、ごみ穴と考えられる2号遺構から、享保2（1717）年から享保18（1733）年の年号が記載された木簡とともに、18世紀前葉の陶磁器が一括して出土している。この資料の中に、胎土や灰釉が類似しており、大堀相馬、小野相馬を区別することが難しい灰釉丸碗の一群がみられた。CT18もその灰釉丸碗と類似するものであり、産地は、小野相馬？とした。CT19は、胎土から瀬戸・美濃の擂鉢の可能性が推測されるが、口縁部、底部などの特徴が不明なため、可能性を指摘するにとどめる。CT21は、志野織部の中小皿で、17世紀前葉と考えられる。鉄絵の圈線、草文が描かれている。

堀（新段階）の陶磁器は、広く年代幅をとらえているものも含まれるが、17世紀後半から18世紀中葉を示しているものが多く、堀（新段階）の埋土は、このころに埋没しているものと推測される。

堀（古段階）の遺物はごく少ないため、堀（古段階）の年代を決定することは難しいかもしれないが、堀（新段階）が17世紀後半から18世紀前半ごろを示す遺物が多く、それより下位の古段階埋土には、17世紀代の陶器と古窓永が1点出土していることから、大きくとらえて17世紀初頭から前葉に埋没したであろうと推測される。

13号溝は、堀（新段階）より古い段階の遺構である。遺物は磁器と陶器が1点ずつ出土しており、そのうち

CT22を写真で提示した（図版24）。掲載しなかった磁器は、小中皿の文様のない口縁部破片で、素地を見ると白磁ではなく、染付の文様が描かれるのではないかと考えられる。ごく小さい破片のため、年代は不明である。CT22は、胎土から肥前と考えられる。部分的に濁りのある透明釉である。小破片のため、年代はわからない。

4号溝b、5号溝は、近代に属する造構であるが、4号溝bからはCT23が、5号溝からはCT24～27の近世陶器が出土している（図31・32、図版24）。CT24は、美濃の大鉢で、鉄絵草文が描かれる。残存部分には観察されないが、類似の製品では、織部釉が掛かるものもみられる。17世紀前葉と考えられる。CT25は、胎土から瀬戸・美濃の小碗と推測され、18世紀末から19世紀前葉と考えられる。口縁部に2カ所、呉須による文様がみられる。CT26は、織部の小中皿で、17世紀前葉である。CT27は、大堀相馬の土鍋で、底面には煤が付着した使用痕が観察される。

他に、1層・搅乱から小野相馬の小中皿（CT28）が出土している（図32、図版24）。見込みは蛇の目釉剥ぎされ、印文花が施されている。

CJ17は3号溝埋土、CJ18は3号溝底面石下埋土から出土した近代の磁器である（図版22）。CJ17は手書きの端反碗で、CJ18は摺絵の爛徳利である。近代の造構からは、他にも銅板転写、摺絵（図版30）の技法を用いた磁器が多数出土している。

近代の磁器は、工業化された製品であり、出土量も非常に多くなる。摺絵や銅版転写では、多様な文様があり、近世の磁器とは異なる特徴をもつ。近代の磁器については、仙台城跡二の丸地区第12地点の調査（『年報』11）で大量に出土しており、器形や文様の技法の特徴をまとめ、詳細に報告している。今回の近代磁器は、これと基本的に同様の近代磁器であり、その様相に変化はないことから個々の近代磁器については検討していない。各文様技法の一部を図版30に掲載した。

2. 土師質土器・瓦質土器（図33、表17・20、図版25）

土師質土器、瓦質土器ともに、出土量はあまり多くなく、土師質土器37点、瓦質土器10点が出土している。近世の造構である堀（新段階）からは、土師質土器の皿、蓋、焼塩壺などが出土している。近代の造構からは、土師質土器の皿、鉢類、炻器と、瓦質土器の焜炉、火鉢、蚊遣の蓋などが出土している。明治に入り、近代化される中でも、土師質土器、瓦質土器は、材質の特性から、耐火性が必要な器種に用いられていたようである。しかし、近代の造構からは、土師質土器の皿はほぼ出土しなくなり、焼塩壺もなくなるなど、出土する器種の上では、近世と明治以降で違いがみられる。

土師質土器、瓦質土器とも、破片資料が多く、国化できたのは、CH1～3、CG1・2の5点であった。

CH1は、土師質土器の皿である。底部が半分程度残存する破片である。全体に黒色化しており、灯明皿に転用されたものである可能性も考えられる。残存状態はあまりよくないが、他の皿はこれよりもさらに小破片である。CH2は、外面に格子状の叩き目がある在地産の焼塩壺である。ごく小破片しか残存していない。これまでの調査で、この形態の焼塩壺は、17世紀末から18世紀前葉にみられることがわかっている（『年報』19第5分冊）。CH3は、畿内系の焼塩壺の破片である。内面には布目压痕が観察されるが、刻印は残存していない。CH3の畿内系焼塩壺の胎土に比べると、CH2の在地産の焼塩壺の胎土はやや赤みが強い特徴がある。

CG1は平面角形の火鉢で、脚付きである。CG2は蚊遣りの蓋で、内面は被熱により器面が白色化している。

3. 瓦（図34・35、表15・16、23～28、図版26・27）

瓦の分類・集計・計測の基準は、年報6・7・8・9で示しており、「年報」8では、新たな種類を設定し、改めて分類基準をまとめている。さらに、「調査報告」1では、一部、分類が不明確だった種類を再整理した。今回報告する資料は、基本的にこれらの分類基準を踏襲して分類している。

出土した瓦は、軒丸瓦・軒平瓦類・軒棟瓦・平瓦・平瓦1類・平瓦2類・丸瓦・丸瓦類・棟瓦・棟瓦類・板堀瓦・棟瓦・袖瓦・不明瓦の14種類に分類された（表15・16）。瓦の出土総数は467点である。今回の調査では、近代に属する遺構・層位が中心であった。瓦の特徴のみから近世と近代を区別することは難しいが、瓦も近代のものがほとんどであると考えられる。そのため、近世が中心の調査の場合、軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦・丸瓦類などが多くなるが、今回の調査では、棟瓦・棟瓦類と、反りのある破片資料が含まれる平瓦1類の点数、重量が多くなるという違いがみられる。また、近代に属する1号井戸付属暗渠、瓦溜まり1、1層・搅乱では、比較的大きい破片が多く含まれていたのも特徴の一つである。

これまでの抽出基準（『年報』6）に従って、法量を計測するための基準は、次のようにした。軒丸瓦・軒平瓦・軒棟瓦については、瓦当の一部が残っている資料、平瓦・平瓦1類・平瓦2類・棟瓦・棟瓦類・丸瓦・丸瓦類・板堀瓦・棟瓦・袖瓦については、幅、長さのどちらかが計測可能な資料を抽出し、計測した。

近世に属する遺構では、堀（古段階・掘（新段階）から瓦が出土しているが、陶磁器と同様に、小破片ばかりであり、図化の抽出基準に適う資料はなかった。そのため、近世の遺構から、図化して提示できるものはない。近代の1号溝、瓦溜まり1から瓦当面のある軒棟瓦・軒丸瓦が出土しており、その3点を図化して提示している（図34、図版26）。また、刻印のある瓦については、出土場所に関わらず、刻印部分を図化している（図35、図版27）。近代の瓦のため、図化しなかった資料については、計測した法量を表にまとめている（表23～28）。

【軒丸瓦】（図34、表23、図版26）

軒丸瓦は1層・搅乱から2点出土しており、図34に提示している（T1、T2）。いずれも連珠三巴文で、T1は右巻き、T2は左巻きの違いがある。

【軒棟瓦】（図34、表24、図版26）

軒棟瓦は25点出土している。すべて近代の遺構・層位からの出土である。計測のために抽出したのは22点で、そのうち1点（T16）を図化した。T16は、小巴部瓦当文様は連珠三巴文（右巻き）で、垂れ部分は残存していない。T16以外の軒棟瓦は、小巴部、垂れ部の文様が無文のもののみである。T19は、小巴部が膨らみのある万十であるが、これ以外で小巴部が残存するものは、すべて膨らみのない石持である。また、垂れ部が残存するものでは、無文の中刺のみである。小巴径は7.8cm～8.5cm、垂れの長さは4.6～5.0cmと規格が揃っていることがうかがえる。

【軒平瓦類】（表25）

軒平瓦類は5点出土している。1層・搅乱と瓦溜まり1からの出土である。計測のため抽出したのは4点（T25～28）で、図化したものはない。軒平瓦類には、軒平瓦・軒棟瓦の可能性があるが、欠損のため断定できないものが含まれている。いずれも瓦当文様は無文の中刺で、垂れの長さも4.4～4.8cmと規格が揃っている。前述の軒棟瓦の瓦当文様や法量とも共通する。

【平瓦】（表26）

平瓦は、5点出土しており、いずれも1号井戸付属暗渠からである。そのうち4点を計測した（T29～32）。図化したものはない。頭幅24.4～24.8cm、尻幅24.7～25.0cm、長さ25.3～26.3cm、頭谷深さ2.7～2.9cm、尻谷深さ2.1～3.2cm、厚さ2.8～2.0cmと法量にまとまりがあり、用途が同じ瓦であろうと考えられる。

【棟瓦】(表27)

棟瓦は、32点出土している。すべて近代の遺構からの出土である。そのうち計測のために抽出したのは4点で、図化したものはない。

【刻印のある瓦】(図35、表28、図版27)

刻印のある瓦は、8点出土しており、すべてを図化した。いずれも近代の遺構から出土した瓦である。瓦の種類では、軒棟瓦、棟瓦、棟瓦類と、それらに含まれる可能性のある平瓦1類(反りのある平瓦)にみられる。「ナ」、「エ」のような仮名(図35-T39、T40)、漢数字の「十六」、記号のような刻印(図35-T42、T43)がみられる。「四宮」は、これまでの調査からも、「宮」の字と漢数字2文字を組み合わせた刻印がたびたび出土しており、そのバリエーションの1つと考えられる。武家屋敷地区第11地点の調査(『調査報告』1)からは、同じ「四宮」の刻印が確認されている。文字の傾きなどが若干異なることから、同じ判とまでは判断できないが、文字の大きさや特徴が非常によく似ている。これまで、「宮四九」(二の丸地区第3地点:『年報』1)、「宮五六」(二の丸地区第6地点:『年報』3)、「宮一五」、「宮二九」、「宮三?」、「宮四六」、「宮四七」、「宮五六」、「宮五七」(二の丸地区第5地点:『年報』6)、「宮五六」(二の丸地区第9地点:『年報』8)、「宮五」、「宮四四」(二の丸地区第17地点:『年報』18)が確認されており、漢数字の種類は多様である。T38よりも刻印が大きく、文字部分が凸形に浅い浮き彫りになっているものの方が多数である。T8の「和田」は、類似した刻印が二の丸地区第18地点から1点出土している。またT41には、「治十七年高知縣和田類次」の刻印があるが、こちらは判ではなく、文字を彫ったものである。

4. 金属製品(図36・37、表18・29~31、図版28・29)

金属製品は、近世の遺構では、堀(古段階)で古寛永が1点出土しているのみである。他は、すべて近代の遺構・層位からの出土である。1層・搅乱と3号溝からの出土が多く、銃弾、薬莢、徽章、認識票など軍隊に関連した製品が多い。ボタン、フック、バックル、鷲目なども軍服に用いられたものである可能性が考えられる。近代の金属製品は、図版31に一部を掲載した。

古銭は、寛永通宝以外に、明治、大正、昭和の硬貨が出土しており、鋳造年を含めて集計した。そのうち、寛永通宝と、明治、大正の硬貨を図化した。煙管は3点出土しており、残存状況がよいため、すべてを図化した。煙管の形状は、『年報』18で示した分類に基づいている。

古寛永は、堀(古段階)から1点出土している(図36-MC1)。堀(古段階)出土の陶磁器では、年代を推測できるものが4点出土しており、そのうち3点が17世紀代を示すものが中心であった。古寛永は、明暦2(1656)年までの铸造と考えられている(江戸跡遺研究会編2001)。それ以降も長く流通していた期間を考慮する必要があるが、陶磁器の年代と矛盾はしないと考えられる。

新寛永は、3号溝、1層・搅乱からの出土である(図36-MC2、MC3)。いずれも近代に帰属する遺構・層位からの出土である。鋳化が著しく、銭名は不明確である。

MC4~6は、近代以降の銭貨である(図36)。MC4は明治十五年铸造の半銭、MC5は明治四十二年铸造の十銭、MC6は大正九年铸造の五銭である。いずれも完形である。

煙管(図37)は、3号溝と1層・搅乱からの出土しており、近代の遺構・層位である。MO1は3号溝出土の延べ煙管である。首部分の上面と吸口部分の右側面に、灰吹に打ち付けたような叩打痕が観察される。MO2、MO3は、1層・搅乱出土の煙管の雁首である。油返し部分がなく、一本の管から火皿と首部が作られた形をしており、形態から19世紀以降の年代と考えられる(古泉弘1987)。MO3は、首部上面に灰吹に打ち付けたような叩打痕が観察される。

MO4は、認識票で、一面には「歩□四 機一 五□二」の刻印が観察される（図版29）。他面には布が付着している。刻印の内容から陸軍第二師団で用いられたものと考えられる。

5. その他の遺物（表17・18・21、図版24・31）

その他では、近代の遺物を写真で掲載している。

1層・搅乱を中心に硬質陶器が85点出土しており、そのうち、CT29の写真を提示した（図版24）。高台内に「硬陶」の銘があり、明治41（1908）年に金沢で設立された日本硬質陶器株式会社製であることがわかる。星文があり、軍隊用に製作された規格品である。

木製品は合計23点、石製品は合計6点と、ほとんど出土しておらず、同化したものはない。木製品は、板材、角材の破片がほとんどで、下駄、曲物などの製品は含まれていない。歯ブラシは13点出土している（表17）。素材は、骨製と、緻密な広葉樹製の木製品とが含まれているが、明確でないことから区別せずに集計している。植毛部分はすぐではなく、孔が開いた状態での出土である。一部を図版31に示している。

ボタンの素材は、ガラス製、骨製、銅製があり、素材別に集計した（表17・18）。ガラス製82点、骨製3点、銅製21点と、ガラス製が多い。銅製のボタンは、脚付きのもので、磁器製と骨製は2つ穴と4つ穴がみられる（図版31）。

土器は、堀（古段階）と1層・搅乱から出土している（表17）。堀（古段階）の土器は、土器片とだけ識別できる程度の残存状況で、器面は摩滅が著しい。1層・搅乱の土器は、器厚が比較的厚く、繊維を含むものであるが、器面の摩滅によって文様などの特徴は観察されない。

CT30～32は、近代便所の埋め戻である（図版31）。レンガ造りの床に方形の枠が列をなして作られており、枠内に廐が埋設された状態で検出された。便所の遺構と考えられる。上半部はすでに欠損しているが、堤産の大甕である。

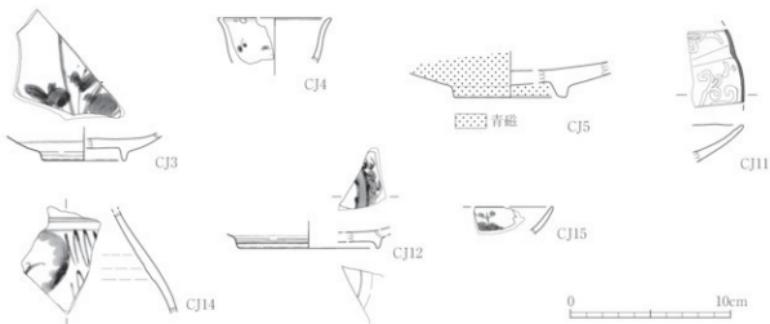


圖30 武家屋敷地区第16地点出土磁器
Fig.30 Porcelains from BK16

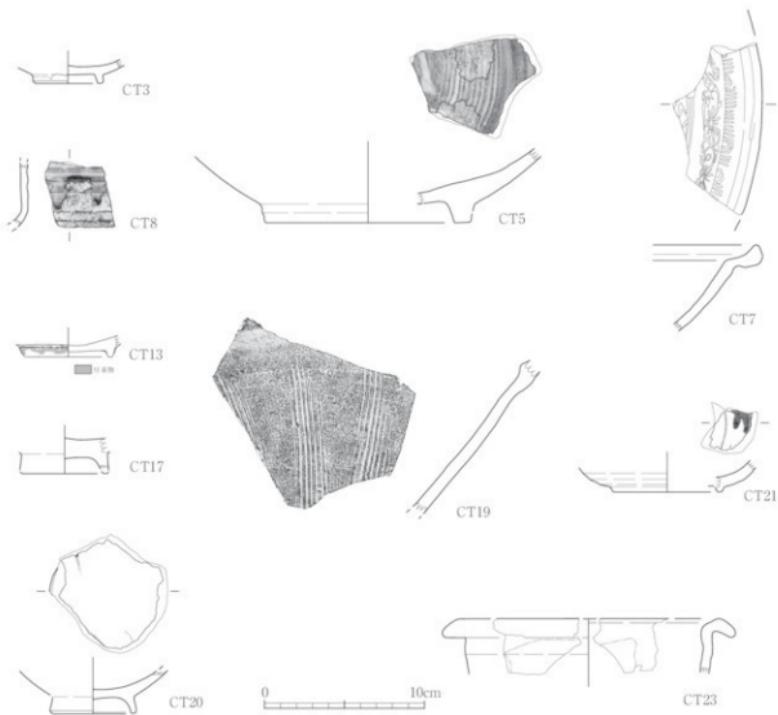


圖31 武家屋敷地区第16地点出土陶器 (1)
Fig.31 Glazed ceramics from BK16 (1)

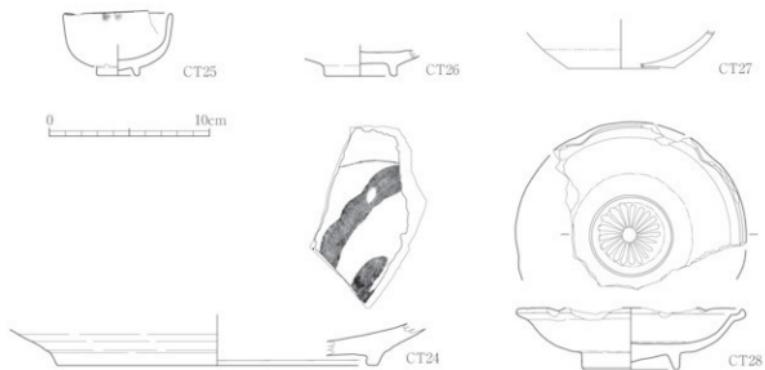


圖32 武家屋敷地区第16地点出土陶器 (2)
Fig.32 Glazed ceramics from BK16 (2)

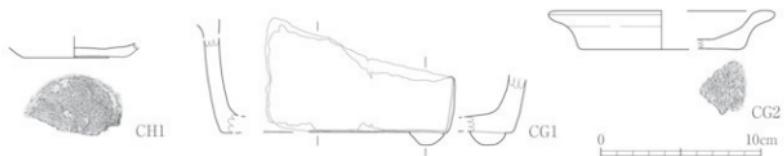


圖33 武家屋敷地区第16地点出土土质质土器・瓦质土器
Fig.33 Unglazed ceramics from BK16

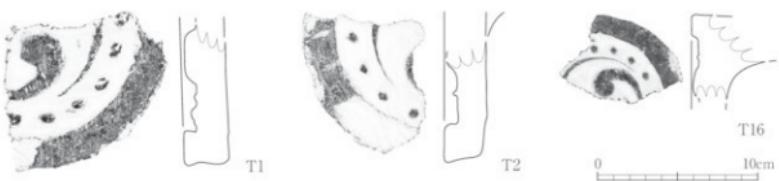


圖34 武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒桟瓦
Fig.34 Various roof tiles from BK16

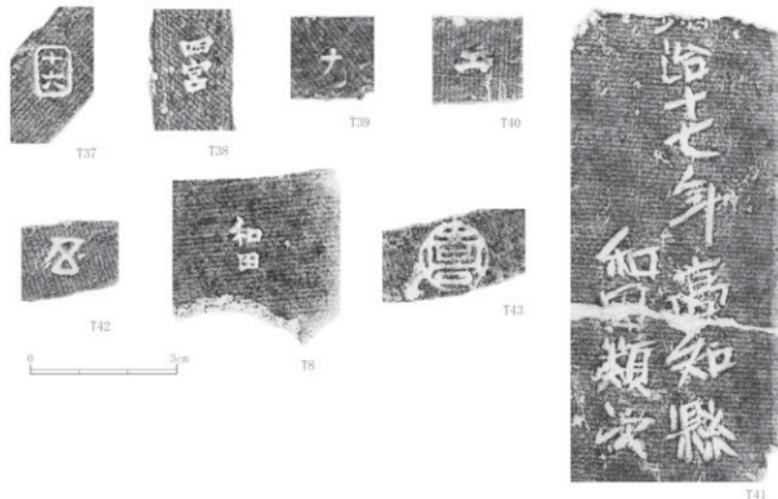


圖35 武家屋敷地区第16地点出土印瓦
Fig.35 Roof tiles with seal impression from BK16

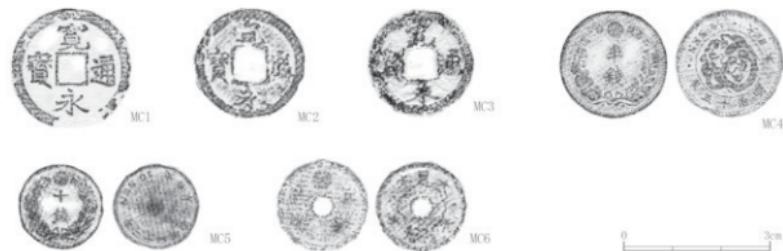


圖36 武家屋敷地区第16地点出土古钱
Fig.36 Coins from BK16

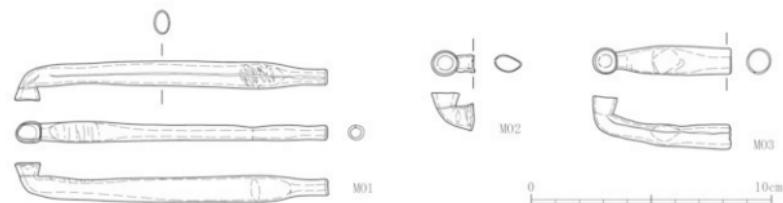


圖37 武家屋敷地区第16地点出土烟管
Fig.37 Pipes from BK16

表8 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近世）
Tab.8 Distribution of porcelains belonging to Edo period from BK16

時期	出土場所	掘大別 埋土	近世磁器																合計			
			中碗				小碗				皿				鉢				袋物不明	その他	不明	
			丸	端反	筒	蓋	不明	大碗	丸	端反	不明	碗	小中	極小	皿	不明	小中	その他の	開化期	瓶		
I a	13号溝	埋土	—									1									1	
I c	堀（新段階） 1区	埋土	新段階埋土									1									1	
		埋土	新段階埋土									1									1	
	堀（新段階） 2区	埋土2	新段階1層				1					1									1	
		埋土3	新段階2層				1					2				4	6	2	1	蓋物1	18	
	堀（新段階） 3区	埋土4	新段階3層				1					1									1	
		埋土8	新段階5層				1					1									1	
	堀（新段階） 4区	埋土	新段階埋土				2					4									7	
		埋土1	新段階2層				1					2									3	
II	5号溝	埋土4	新段階2層				1					1									2	
		掘方埋土	—									2									2	
II b	4号溝	埋土	—				1					—									1	
	3号溝	埋土	—				1					—									1	
III a	14号溝	平石下埋土	—				1					1									1	
		掘方埋土	—				1					1									5	
III a	1層・搅乱	—	21	2	1	1	7	2				1	21	1	2	7			5	小箱? 1 蓋物2 水滴1 仏壇器1 箱口1	14	
		合計	27	2	1	1	11	1	2	3		11	46	1	3	17	2	7	7	6	148	

表9 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・手描き）
Tab.9 Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所	掘大別 埋土	近代磁器（手描き）																合計			
			中碗				小碗				皿				鉢				袋物不明	その他	不明	
			丸	端反	筒	蓋	不明	大碗	丸	端反	不明	碗	小中	極小	皿	不明	小中	その他の	開化期	瓶		
II	5号溝	埋土	—								1										1	
		北岸埋土	—								1										1	
II b	4号溝a	暗渠埋土	—								1										1	
		掘方埋土	—	1	2	1	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		12		
III a	3号溝	手描	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1		3		
		平石下埋土	1	1	1	2	2	5	5	7	7	1	1	1	1	1	1	1	小箱2	19		
III a	14号溝	埋土	2					1	2			1		1		1		1		1	8	
		1号井戸	掘方埋土	—	1															1	1	
III a	瓦罈り1（1層・搅乱）	木桶（東側）	1																	1	1	
		瓦罈り2（1層・搅乱）	—								1		1	1	1	1	1	1		5	3	
III a	1層・搅乱	—	19	58	1	85	15	13	43	90	2	53	20	2	6	小箱7、錠口11 急須6、仏壇器1 蓋物（蓋）1 水滴1、蓋1 蓋物（身）1	19	445	1	1	1	
		不明	—													1					1	
合計			20	66	2	92	19	13	46	101	2	63	24	5	7	23		19	502			

表10 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・摺絵）
Tab.10 Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所	近代磁器（摺絵）														合計					
		中碗				小碗				皿		鉢		瓶		瓶鉢		その他	不明	合計	
		丸	端反	筒	蓋	不明	大碗	丸	端反	不明	碗不明	小中	極小	皿不明	鉢不明	瓶	瓶鉢不明				
II	5号溝	埋土															1		1		
IIIa	埋土	1																2	6		
	掘方埋土																	2			
	平石下埋土	7	1															21			
IIIa	埋土	3																6			
	掘方埋土	1																2			
	1号井戸	1																1			
IIIb	9号溝	掘方埋土	1															1			
IIIa	瓦溜り2（1層・搅乱）	1																2			
	1層・搅乱	284		5						20	63		2		26	74	2	2	火入1、 蓋1、 合子1	9	490
	合計	299	1	5						20	64	1	2		27	95	2	2	3	11	532

表11 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・銅板転写）
Tab.11 Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所	近代磁器（銅板転写）														合計						
		中碗				小碗				皿		鉢		瓶		瓶鉢		その他	不明	合計		
		丸	端反	筒	蓋	不明	大碗	丸	端反	不明	碗不明	小中	極小	皿不明	鉢不明	瓶	瓶鉢不明					
II	5号溝	北岸埋土																1				
IIb	4号溝	埋土				1												1				
IIIa	3号溝	平石下埋土				1												2				
IIIa	埋土					1												2				
	掘方埋土																1					
	1層・搅乱	16	1	1	9					3	12		2	5	鉢類1	4	13	3	6	蓋物（身）1、 蓋物（蓋）1、 急須？1、蓋1 水滴2	7	89
	合計	16	1	1	12					6	12		2	5	1	4	13	3	7	6	7	96

表12 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・白磁）
Tab.12 Distribution of modern porcelains period from BK16

時期	出土場所	近代磁器（白磁）														合計				
		中碗				小碗				皿		鉢		瓶		瓶鉢		その他	不明	合計
		丸	端反	筒	蓋	不明	大碗	丸	端反	不明	碗不明	小中	極小	皿不明	鉢不明	瓶	瓶鉢不明			
II	5号溝	暗渠埋土															1		1	
IIb	4号溝	埋土															1		1	
	埋土	1															1		2	
IIIa	3号溝	掘方埋土																小环？1		1
	平石下埋土	2															1	小环？3	3	10
	埋土				1												1		1	
IIIa	14号溝	掘方埋土															1	小环？1	2	
	瓦溜り2（1層・搅乱）																	小环1	1	
	1層・搅乱	3	2	6	7	1	2	12	13		1	35	39	6	12			小环48、 急須？5、 合子（身）1	1	261
	合計	3	5	6	8	1	2	13	13		1	40	39	6	13			61	80	(281)

表13 武家屋敷地区第16地点出土磁器集計表（近代・型打ち・クロム青磁・色釉）
 Tab.13 Distribution of modern porcelains period from BK16

出土地所		近代磁器													その他	不明	合計			
		中碗				小碗				皿			鉢		碗		瓶類			
		丸	端反	筒	蓋	不明	大碗	丸	端反	不明	碗不明	小中	極小	盤不明	その他の	鉢不明	瓶	瓶底不明		
型打ち	1層・複乱									2	2							本滴3	2	9
	合計									2	2							3	2	9
クロム青磁	1層・複乱	1	1	2	4		2	3									2	3	18	
	合計	1	1	2	4		2	3									2	3	18	
色釉	1層・複乱			1	1												人形?1		4	
	合計			1	1												1		4	

表14 武家屋敷地区第16地点出土陶器集計表
 Tab.14 Distribution of glazed ceramics from BK16

	出土地所	層別 理土	碗				皿				鉢	擂鉢	碗 鉢 皿 不明	土瓶 身	壺 ・ 甕	袋物 明	その他	不明	合計						
			中碗		小碗		皿		鉢																
			丸	その他の	不明	小碗	碗不明	小中	その他の	鉢	擂鉢														
I a	堀2区 (古段階C)	埋土3層	古段階2層									1						4	5						
	堀4区 (古段階C)	西トレチ	古段階5層									1							1						
	堀3区 (古段階B)	古段階検出面	—					1				1							2						
I a 13号溝	埋土	—	1																1						
	埋土	新段階埋土	1															1	2						
	堀2区 (新段階)	埋土1層	新段階1層									1							1						
	埋土2層	新段階2層	1									大鉢1							3						
	埋土3層	新段階2層	1	6								大鉢1	1	1					11						
	埋土5層	新段階3層	2				1												3						
I c	埋土	新段階埋土	—				1												2						
	堀2区 (新段階)	埋土1層	新段階2層				1												1						
	埋土2層	新段階2層	—																2						
	埋土4層	新段階2層																	1						
	埋土6層	新段階2層																	1						
	埋土8層	新段階3層	—				1												1						
	堀4区 (新段階)	埋土	新段階埋土	1				1											3						
	堀(新段階)	埋土	新段階埋土	—			1												1						
II	北岸埋土	—	2																2						
	裏込め	—						1											2						
	埋土	—		2	1							大鉢1	2	壺1			土鍋1	1	9						
	掘方埋土	—				1						1						1	3						
	暗渠埋土	—															土鍋1		1						
II b	4号溝b	埋土	—																1						
	2号溝	埋土	—	1								1						1	3						
III a	3号溝	埋土	—	1								1						1	3						
	平石下埋土	—															行平鍋1	1	3						
	14号溝	埋土	—				1					小中2	1						5						
	掘方埋土	—	2			3						小中1	2	2			瓶類1	1	13						
III b	1号溝	埋土	—																1						
	9号溝	掘方埋土	—									1							1						
	1層・複乱	—	19	平移1 筒3 端反1	26	2	4	22	大鉢1 向付1 不明2	小中1	16	41	24	壺8 豆甕1 瓶類2	14	24	伝統器2 土鍋2 火入・香炉5 蓋1、壺口1 行平鍋2	31	263						
	不明	—																	1						
	合計		25	6	39	4	6	33	6	8	22	55	25	17	20	28	16	41	351						

表15 武家屋敷地区第16地点出土瓦集計表
Tab.15 Distribution of roof tiles from BK16 (1)

期間		出土地所		地主調査士		平成2年		平成3年		新規		新規		新規		既存		既存		既存		既存		その他		不明		合計	
2.8.	福(古没地C)	埋土		古没調理士	1			1		1		215												10	394	1	1		
1.3	福(古没地C)	西側調査区7 西シヨンノゾウ	側数	古没調理士	169																				14	14	1	1	
3.8.	福(古没地B)	西側調査区4 クシヨンノゾウ	側数	古没調理士	1																				15	15	1	1	
2.8.	福(古没地B)	古没地山面	—	側数	1																				2	2	1	1	
1.1	福(新没地)	埋土		新没調理士	1																				34	34	122	122	
2.8.	埋土			新没調理士	87																				87	87	1	1	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																				18	18	18	18	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				4	4	5	5	
1.1	埋土3号			新没調理士	2																				620	620	1	1	
2.8.	埋土4号			新没調理士	3																				49	49	61	61	
1.1	埋土5号			新没調理士	4																				4	4	12	12	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				11	11	1	1	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				334	334	504	504	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				394	394	319	319	
1.1	埋土			新没調理士	1																				111	111	227	227	
3.8.	埋土1号			新没調理士	1																				116	116	1	1	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				11	11	15	15	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				31	31	76	76	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				45	45	3	3	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				141	141	141	141	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				31	31	76	76	
1.1	埋土			新没調理士	1																				1	1	1	1	
3.8.	埋土1号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				31	31	76	76	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土			新没調理士	1																				31	31	76	76	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土2号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土3号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土4号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土5号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土6号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土7号			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土8号			新没調理士	1																				53	53	53	53	
1.1	埋土			新没調理士	1																				1	1	1	1	
1.1	埋土1号			新没調理士	1																								

表16 沃家屋敷地区第16地点出土瓦集計表
Table 16 Distribution of roof tiles from BK16 (2)

均面	出土場所	施大別用土	平瓦1面	平瓦2面	瓦瓦	瓦瓦	瓦瓦類	瓦瓦類	瓦瓦	瓦瓦類	瓦瓦	瓦瓦類	瓦瓦	その他	不明	合計
Ⅳ号溝	壤土	—	個数 8	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
	重質土	2538	47	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	47	4323
Ⅳ号溝a	壤土	—	個数 20	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	39
	重質土	2020	88	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	76	2427
Ⅳ号溝b	壤土	—	個数 24	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	38
	重質土	2416	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	40	4184
Ⅴ号溝	壤土	—	個数 23	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	37
	重質土	3328	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	48	5631
Ⅵ号溝	壤方理土	—	個数 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	2
	重質土	230	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	822	1052
Ⅶ号溝	壤土	—	個数 5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	9
	重質土	999	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	78	107
Ⅷ号溝	壤方理土	—	個数 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	7
	重質土	633	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	61	694
Ⅸ号溝	平石下理土	—	個数 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	重質土	160	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	160	160
Ⅹ号溝	壤土	—	個数 2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	9
	重質土	254	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	445	445
Ⅺ号溝	壤方理土	—	個数 4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	8
	重質土	623	410	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	61	1094
Ⅻ号溝	壤土	—	個数 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1
	重質土	119	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	119	119
Ⅼ号溝	壤方理土	—	個数 15	3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	4
	重質土	385	211	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9783	9783
Ⅽ号溝	竹林腐根	—	個数 10	5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	17	17
	重質土	3644	8745	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11338	11338
Ⅾ号溝	壤土	—	個数 29	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	59
	重質土	6557	440	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	90	10669
Ⅿ号溝	壤方理土	—	個数 1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	2
	重質土	73	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	32	105
ⅰa	瓦器 η 1 (1層・板瓦)	—	個数 16	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	36	36
	重質土	2113	177	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	601	7710
ⅰb	壤土	—	個数 18	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	69
	重質土	2914	657	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	340	18716
ⅰc	壤土	—	個数 43	5	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	467
	重質土	36150	5302	8745	268	3159	—	—	—	—	—	—	—	—	4255	568
ⅰd	合計	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	92591	92591

表17 武家屋敷地区第16地点出土土器・石製品・木製品・その他集計表

Tab.17 Distribution of unglazed ceramics, various implements made of stone, wood and the other implements from BK16

	出土場所	層別 理土	土師質土器 皿	瓦質土器 体類	石製品	木製品	縪質陶器	ガラス	その他	合計
I a	堀(古段階C)	理土3層 古段階3層							土器4	4
I c	堀(新段階) 2区	理土3層 新段階2層	2 盆1	1						3
		理土4層 新段階3層		1						1
		理土5層 新段階4層	1							1
		理土8層 新段階5層		1						1
		理土 新段階理土2層	2							2
		理土1層 新段階2層		1						1
III a	堀(新段階) 3区	理土4層 新段階2層	4	2						6
		理土6層 新段階2層	2							2
		理土 新段階理土1層	1							1
II b	堀(新段階) 4区	理土1層 新段階1層		燒塗壺1						1
		理土3層 新段階3層	1							1
				火鉢1 鉢遺茎1		板材1			軟質施釉 焰焰1	5
II	5号溝	理土	—	1						
		掘方理土	—	鉢類1						1
II b	4号溝a	理土	—				角材1, 板材1 木筋2			3
		4号溝b	理土	—			木筋1			1
III a	2号溝	理土	—	2		紙石1	小片7		軟質施釉焰焰1 衝ブラシ1	12
		掘方理土	—	1						1
III a	3号溝	平石下 理土	—		櫛か1				ボタン10 板2	15
		理土	—				角材1, 板材1 小片3, 竹1		衝ブラシ1	9
III a	14号溝	理土	—	鉢類1					衝ブラシ2 容器急須2	5
		掘方理土	—	1 焰焰1 2					瓶4	9
III b	1号溝	理土	—						羽子14	14
	9号溝	掘方理土	—						羽子1	1
III a	瓦罈2 (1層・複数 品)	—							羽子1	1
									羽子26 衝ブラシ7 焰焰1 ボタン骨製3 繩文土器1 不明土製品1 且種別不明1	219
	1層・搅乱	—	燒塗壺1 鉢類1	6 3	櫛か2 1	鏡2 不明石製品1 火打石1 碁石1	鑑?1	湯飲み1 鏡類22, 鏡15, 鏡4 鏡底2 鏡背2 不明42	ボタン72 瓶3	219
	合計		16 7 14 3 5 2		6		23 85 92	71	324	

表18 武家屋敷地区第16地点出土金属製品集計表
Tab.18 Distribution of various implements made of metal from BK16

時期	出土場所	層別 理土	冠水通宝	その他古銭	銅製品			銀製品			合計
					筒管	ボタン	その他	釘	銀	その他	
I a	堀(内段階C) 4区	理土1層 古段階3層	古寛永1								1
II b	4号溝a 4号溝b 4号溝	理土	—						1	極状1	1
III a	2号溝	理土 理土2層	—	明治十五年半銭1				業美1, 銀貫1 バックル2			3
III a	3号溝 平石下 理土	—	新寛永1	延べ 銀管 1	5	尚状1, 級神6, 鉢1 帯金2枚, リング状2 フック3, 錐目1 業美1, 不明1 銀弔1, 銀金1 業美1		ボタン2		27	
14号溝	理土 掘方理土	—									2
1号戸戸付 木桶裏	理土	—									1
1層・搅乱	—	新寛永1	明治四十二年十銭1 大正九年五銭1 昭和十四年五銭1 昭和十五年十銭1	雁首2	12	跳弔5, 業美3, 徵章1 扇13, 銀貫類2 リング1, 新1 洋銭1, 謎識票1 フック1, 円板状1	洋1 和1	2 把手1 極状1 リング状1	柄1 跳弔2	49	
	合計		3 5 3 21		46		2 4	4	5 93		

表19 武家屋敷地区第16地点出土磁器観察表
Tab.19 Notes on porcelains at BK16

登録番号	出土場所	軸大別 理土	器種	口径 cm	底径 cm	器高 cm	文様	胎土	産地	製作年代	備考	図	図版
CJ001	甌（新段階）2区埋土2	新段階工刷	不明	—	—	—	内面矢羽根文?	普通	肥前	18c?	端反	—	22
CJ002	甌（新段階）2区埋土2	新段階工刷	碗不明	—	—	—	網目文	普通	肥前	17c後半		—	22
CJ003	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小中皿	—	5.1	—	見込み草花文	普通	肥前	17c中葉～後葉		30	22
CJ004	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小型 端反碗	7.0	—	—	梅花散らし文	密	肥前	17c後半		30	22
CJ005	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小中皿	—	6.8	—	青磁	粗	肥前	17c中葉?	買入	30	22
CJ006	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小中皿	—	—	—	文様あり	普通	肥前	17c?		—	22
CJ007	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小中皿	—	—	—	青磁	普通	肥前	17c後半?	買入	—	22
CJ008	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小中皿	—	—	—	文様あり	密	肥前	17c後半～18c	ハリ支え1	—	22
CJ009	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	中型丸甌	—	—	—	草文	密	肥前	17c後葉～18c前葉		—	22
CJ010	甌（新段階）2区埋土3	新段階工刷	小型 端反碗	8.3	—	—	蝶文	密	肥前	17c後葉～18c前葉		—	22
CJ011	甌（新段階）2区埋土	新段階埋土	小中皿	—	—	—	口紅 補花皿 陽刻花唐草文	密	肥前	17c後葉～18c初		30	22
CJ012	甌（新段階）3区埋土1	新段階工刷	小中皿	—	8.5	—	見込み文様あり	密	肥前	17c後葉～18c		30	22
CJ013	甌（新段階）3区埋土1	新段階工刷	小中皿	—	—	—	文様あり	密	肥前	17c後葉～18c		—	22
CJ014	甌（新段階）3区埋土4	新段階工刷	瓢甌	—	—	—	網目文 丸に草文	普通	肥前	18c		30	22
CJ015	甌（新段階）3区埋土6	新段階工刷	小中皿	—	—	—	内面:梅枝文 (赤・緑・茶)	密	肥前	17c後葉～18c前半		30	22
CJ016	甌（新段階）3区埋土	新段階埋土	小中皿	12.7	—	—	二重斜格子文	普通	肥前	18c		—	22
CJ017	3号溝埋土1	—	中型 端反碗	10.7	3.8	5.4	外面:松竹梅文? 内面:口緑四方押文 見込み宝文	密	繩目?	明治	近代磁器	—	22
CJ018	3号溝平石下埋土	—	製造利	—	6.2	—	招き雲に飛鶴文	密	不明	明治	近代磁器	—	22

表20 武家屋敷地区第16地点出土土質質土器・瓦質土器観察表
Tab.20 Notes on various unclazed ceramics and fumed ceramics at BK16

登録番号	種類	出土場所	軸大別 理土	口径 cm	底径 cm	器高 cm	調整		備考	図	図版
CH001	土師質・甌	甌（新段階）2区埋土5層	新段階工刷	—	6.3	—	内面:ナデ 底部:回転系切り痕a	全体に黒色化		33	25
CH002	土師質・燒塙壺	甌（新段階）3区埋土1層	新段階工刷	—	—	—	外面:格子目 内面:不明	器面が摩滅		—	25
CH003	土師質・燒塙壺	1刷・搅乱	—	—	—	—	外側:ナデ 内面:布目狂痕	器内系燒塙壺 刷印は不明		—	25
CG001	瓦質・火鉢	5号溝埋土1層	—	—	—	—	内面:ナデ 外側:ナデ	角形 脚付き		33	25
CG002	瓦質・蚊遣（蓋）	5号溝埋土1層	—	14.0	10.0	2.4	内面:ナデ 外側:ナデ	底部回転系切り痕あり 内面受熱により白色化		33	25

表21 武家屋敷地区第16地点出土陶器観察表
Tab.21 Notes on glazed ceramics at BK16

登録番号	出土場所	断面調理士	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図版
CT001	掘 (古段階 C) 4区 西朝向窓区 セクシヨウ 4 窓	古段階 (5層)	小中皿	—	—	—		長石釉	粗	美濃	17c初～ 前葉	鼠志野 貢入	— 23
CT002	掘 (古段階 C) 2区 理上2層	古段階 (2層)	磁鉢	—	—	—		無釉	粗	不明	不明	焼締め	— 23
CT003	掘 (古段階 B) 3区 古段階検出面	—	碗不明	—	4.3	—		鐵釉 (黒色)	密	大屋相馬	19c		31 23
CT004	掘 (古段階 B) 3区 古段階検出面	—	磁鉢	—	—	—		灰釉 (緑褐色)	粗	尾	17c		— 23
CT005	掘 (新段階) 2区 理上2層	新段階 (1層)	大鉢	—	125	—	白泥刷毛目文	透明釉	やや粗	唐津	17c後葉～ 18c前葉	目跡あり	31 23
CT006	掘 (新段階) 2区 理上2層	新段階 (1層)	中碗不明	—	—	—	呉須繪?	灰釉 (淡灰白色)	密	京・信楽	18c	貢入	— 23
CT007	掘 (新段階) 2区 理上3層	新段階 (2層)	大鉢	382	—	—	印花 雷文 花唐草文	長石釉	普通	唐津	17c後葉～ 18c前葉	三鳥手	31 23
CT008	掘 (新段階) 2区 理上3層	新段階 (2層)	中型丸碗	—	—	—	上部灰釉 (淡灰褐色)	腰部鉄釉	やや粗	瀬戸・美濃	18c前葉～ 中葉	貢入 腰鉄碗	31 23
CT009	掘 (新段階) 2区 理上3層	新段階 (2層)	中碗不明	—	—	—	灰釉 (淡茶褐色)	密	肥前	17c後半～ 18c前半	貢入 呉器手	— 23	
CT010	掘 (新段階) 2区 理上3層	新段階 (2層)	中碗不明	—	—	—	灰釉 (淡灰白色)	密	肥前	17c後半～ 18c前半	貢入 呉器手	— 23	
CT011	掘 (新段階) 2区 理上3層	新段階 (2層)	小碗	—	—	—	灰釉 (淡青灰白色)	密	大屋相馬	18c末以降	失透釉	— 23	
CT012	掘 (新段階) 2区 理上3層	新段階 (2層)	瓢箪	—	—	—	縁釉流し掛け	灰釉 (淡灰白色)	やや粗	瀬戸・美濃	17c前葉～ 中葉		— 23
CT013	掘 (新段階) 2区 理上5層	新段階 (4層)	碗不明	—	5.4	—		不明	普通	不明	受熱痕	31 23	
CT014	掘 (新段階) 2区 理上5層	新段階 (4層)	中碗不明	—	—	—	白化粧	透明釉	密	肥前	18c前半？		— 23
CT015	掘 (新段階) 2区 理上5層	新段階 (4層)	不明	—	—	—	鐵鉢(黒褐色)	透明釉	密	不明	軟質施釉 陶器	— 23	
CT016	掘 (新段階) 3区 理上4層	新段階 (2層)	中碗不明	—	—	—	灰釉 (淡青灰白色)	やや粗	小野相馬	18c	失透釉	— 23	
CT017	掘 (新段階) 3区 理上4層	新段階 (2層)	碗不明	—	5.5	—	灰釉 (淡灰白色)	密	肥前	17c後半～ 18c前半	貢入 呉器手	31 23	
CT018	掘 (新段階) 4区 理上4層	新段階 (3層)	中型丸碗	—	—	—	灰釉 (暗青灰色)	やや粗	小野相馬	18c前葉？	貢入	— 23	
CT019	掘 (新段階) 4区 理上4層	新段階 (3層)	磁鉢	—	—	—		鐵釉	粗	不明	17c？	瀬戸・美濃の 可能性あり	31 24
CT020	掘 (新段階) 4区 理上4層	新段階 (3層)	中型丸碗	—	5.2	—	見込み呉須繪	灰釉 (淡灰白色)	普通	肥前	17c後半～ 18c前半	貢入 呉器手	31 24
CT021	掘 (新段階) 4区 理上4層	新段階 (3層)	小中皿	—	6.7	—	鉄絵草文	長石釉	やや粗	美濃	17c前葉	志野部 貢入	31 24
CT022	13号溝埋土	—	中型丸碗	—	—	—		灰釉(淡灰白色)	密	肥前？	不明		— 24
CT023	4号溝埋土	—	壺・堀鉢	18.0	—	—		鐵釉 (暗茶褐色)	粗	不明		31 24	
CT024	5号溝埋土	—	大鉢	—	19.7	—	鉄絵草文	長石釉	やや粗	美濃	17c前葉	目跡1	32 24
CT025	5号溝埋土	—	小碗	6.7	2.6	4.0	呉須繪	灰釉 (淡綠灰白色)	やや粗	瀬戸・美濃	18c末～ 19c前葉	貢入	32 24
CT026	5号溝裏込め	—	小中皿	—	4.5	—	外面灰釉 (淡綠灰白色)	銅綠釉	やや粗	美濃	17c前葉	秘藏部 灰釉貢入	32 24
CT027	5号溝裏込め埋土	—	土鍋	—	6.5	—		鐵釉 (茶褐色)	普通	大屋相馬	19c	底託外面 灰化物付着	— 24
CT028	1層・複数	—	小中皿	142	6.0	3.8	見込み印花文 見込み鉢の目剥	灰釉 (淡青灰白色)	粗	小野相馬	18c	半失透釉	32 24
CT029	1層・複数	—	湯飲み	64	3.9	7.0	星文 高台内蔵「硬陶」	透明釉	密	—	明治後期 以降	日本硬質 陶器株式 会社製	— 24

表22 武家屋敷地区第16地点出土便所埋め甕(近代)観察表
Tab.22 Notes on modern glazed ceramics used for toilet from BK16

登録番号	出土場所	器種	口径 cm	底径 cm	高さ cm	文様	釉薬	胎土	生産地	製作年代	備考	図版
CT030	便所(近代)	甕	—	19.1	—	白釉流し掛け	鉄釉(黒色)	粗	尾	明治以降	便所内の埋め甕	— 31
CT031	便所(近代)	甕	—	19.3	—	白釉流し掛け	鉄釉(黒色)	粗	尾	明治以降	便所内の埋め甕	— 31
CT032	便所(近代)	甕	—	18.5	—	白釉流し掛け	鉄釉(黒色)	粗	尾	明治以降	便所内の埋め甕	— 31

表23 武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦観察表
Tab.23 Notes on round eaves tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当直径 cm	瓦当内径 cm	周縁幅 cm	釘穴	刻印	図	図版
T001	1層・複乱	連珠三巴(右巻)	—	—	21	—	—	34	26
T002	1層・複乱	連珠三巴(左巻)	—	—	23	—	—	34	26

表24 武家屋敷地区第16地点出土軒棟瓦観察表
Tab.24 Notes on eaves-pan tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦当小巴部分文様	小巴径 cm	瓦当重ね部分文様	瓦当重ね形状	瓦当重長 cm	釘穴	備考	図	図版
T003	1号溝理土	—	—	無文	中刺	5.0	—	—	—	—
T004	14号溝理土	無文(石持)	8.3	—	—	—	—	—	—	—
T005	4号溝b理土	無文(石持)	8.4	—	—	—	—	—	—	—
T006	4号溝b理土	無文(石持)	8.4	—	—	—	—	—	—	—
T007	1号井戸掘方	—	—	無文	中刺	4.6	—	—	—	—
T008	瓦溜まり1(1層・複乱)	—	—	無文	中刺	4.7	—	刻印あり (相田)	35	27
T009	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文(石持)	8.2	無文	中刺	4.9	—	—	—	—
T010	瓦溜まり1(1層・複乱)	—	—	無文	中刺	4.9	—	—	—	—
T011	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文(石持)	7.8	—	—	—	—	—	—	—
T012	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文(石持)	8.5	—	—	—	—	—	—	—
T013	瓦溜まり1(1層・複乱)	—	—	無文	中刺	—	—	—	—	—
T014	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文(石持)	8.2	—	—	—	—	—	—	—
T015	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文(石持)	8.0	—	—	—	—	—	—	—
T016	1層・複乱	連珠三巴(右巻き)	—	—	—	—	—	—	34	26
T017	1層・複乱	無文(石持)	8.1	無文	中刺	4.7	—	—	—	—
T018	1層・複乱	無文(石持)	8.0	無文	中刺	4.6	—	—	—	—
T019	1層・複乱	無文(万字)	8.4	—	—	—	—	—	—	—
T020	1層・複乱	無文(石持)	7.8	—	—	—	—	—	—	—
T021	1層・複乱	無文(石持)	8.2	無文	—	—	—	—	—	—
T022	1層・複乱	無文(石持)	8.2	—	—	—	—	—	—	—
T023	1層・複乱	無文(石持)	8.3	—	—	—	—	—	—	—
T024	1層・複乱	—	—	無文	中刺	4.8	—	—	—	—

表25 武家屋敷地区第16地点出土軒平瓦類観察表
Tab.25 Notes on a kind of flat ezes tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦当文様	瓦当形状	瓦当重長 cm	頭幅 cm	尻幅 cm	長さ cm	図	図版
T025	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文	中刺	4.8	—	—	—	—	—
T026	瓦溜まり1(1層・複乱)	無文	中刺	4.4	—	—	—	—	—
T027	1層・複乱	無文	中刺	4.8	—	—	—	—	—
T028	1層・複乱	無文	中刺	4.8	—	—	—	—	—

表26 武家屋敷地区第16地点出土平瓦観察表
Tab.26 Notes on flat roof tiles at BK16

登録番号	出土場所	頭幅 cm	尻幅 cm	長さ cm	頭谷深 cm	尻谷深 cm	厚さ cm	溝	釘穴	刻印	図	図版
T029	1号井戸付属暗渠	(24.8)	(25.0)	26.3	2.8	3.2	1.9	—	—	—	—	—
T030	1号井戸付属暗渠	24.5	24.8	25.8	2.9	2.1	1.8	—	—	—	—	—
T031	1号井戸付属暗渠	—	25.0	25.8	—	2.9	2.0	—	—	—	—	—
T032	1号井戸付属暗渠	24.4	24.7	25.3	2.7	2.7	1.9	—	—	—	—	—

表27 武家屋敷地区第16地点出土棟瓦観察表
Tab.27 Notes on a kind of pan tiles at BK16

登録番号	出土場所	全長 cm	全幅 cm	きさ幅 cm	きさ足 cm	尻切込長 cm	頭切込幅 cm	釘穴	図	図版
T033	1号井戸付属暗渠	27.0	28.0	—	—	10.2	—	—	—	—
T034	1号井戸付属暗渠	27.0	—	—	—	—	4.5	—	—	—
T035	1層・複乱	27.0	28.1	24.0	14.0	10.7	4.5	—	—	—
T036	1層・複乱	26.8	27.4	24.1	17.8	5.8	3.3	1カ所	—	—

表28 武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦観察表
Tab.28 Notes on carved seal tiles at BK16

登録番号	出土場所	瓦の種類	刻印	図	図版
T037	1号溝理土2層	平瓦1類	刻印(十六)	35	27
T038	4号溝棱出面	棟瓦	刻印(内宮)	35	27
T039	1号井戸付属暗渠	棟瓦	刻印(ナ)	35	27
T040	瓦留り1(1層・複乱)	平瓦1類	刻印(エ)	35	27
T041	瓦留り1(1層・複乱)	棟瓦類	刻印(治十七年高知縣和田類)	35	27
T042	瓦留り1(1層・複乱)	棟瓦類	刻印あり	35	27
T008	瓦留り1(1層・複乱)	軒瓦	刻印あり(和田)	35	27
T043	1層・複乱	平瓦1類	刻印あり	35	27

表29 武家屋敷地区第16地点出土古錢観察表
Tab.29 Notes on coins from BK16

登録番号	出土場所	断大別埋土	銭名	外径 mm	穿径 mm	重量 g	備考	図	図版
MC001	脇(古段階C)4区 球土1層	古段階3層	寛永通宝(古)	25.0	5	2.4	一部欠損 菊化顧者	36	29
MC002	3号溝平石下埋土	—	寛永通宝(新)	22.0	6	2.1	—	36	29
MC003	1層・複乱	—	寛永通宝(新)	22.0	6	1.9	定形 菊化顧者	36	29
MC004	2号溝理土	—	半錢	22.0	—	3.4	定形 二百枚換一圓 大日本・明治十五年・1.2SEN	36	29
MC005	1層・複乱	—	十錢	17.5	—	1.8	定形 大日本・明治四十二年・10SEN	36	29
MC006	1層・複乱	—	五錢	19.0	4	2.4	定形 大日本 大正九年	36	29

表30 武家屋敷地区第16地点出土煙管観察表
Tab.30 Note on pipes at BK16

登録番号	出土場所	種類	ラウ特徵				吸口特徵		備考	図	図版
			全長 mm	全体 形状	火皿 形状	接合 方法	首部 アワセメ (ラウから 見て)	火皿 直徑 mm	ラウ口 直徑 mm		
M0001	3号溝 平石下埋土	延べ	128.5	II C	2a	3	右	9.8	63× 10.0	II B	6.2
M0002	1層・複乱	雁首	17.1	II C	1a	3	右	10.1	9.5	△	—
M0003	1層・複乱	雁首	56.2	II C	1a	3	左	10.0	10.2	△	37 28

表31 武家屋敷地区第16地点出土金属製品観察表
Tab.31 Notes on metal implements at BK16

登録番号	出土場所	種類	材質	法量	備考	図	図版
M0004	1層・複乱	認識票	銅	長径45.6mm 幅径33.4mm 厚さ0.8mm	刻印「歩□四 機一 五□二」 表面の一部に布付着	—	29

第VI章 出土木材の樹種同定

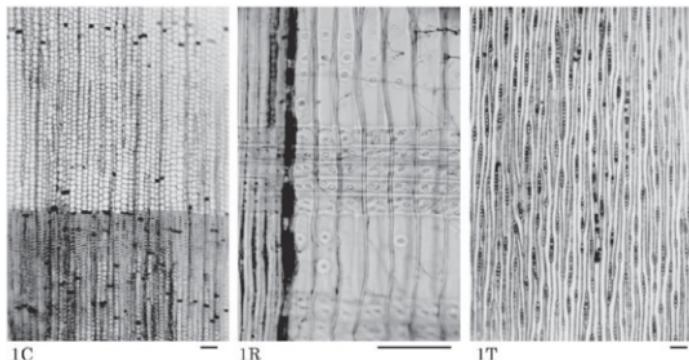
吉川純子（古代の森研究会）

1. 6号溝出土樹木の樹種同定

調査地は仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点である。調査区南端の堀際に考えられる場所には溝状の道構があり、溝中には当時植栽されたと考えられる木材根の痕跡が認められ残存材があった。そこで当時植栽された樹種を確認するため樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の3方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。その結果、出土木材はスギであった。

スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don)：早材から晩材への移行はやや急で晩材部が厚く年輪界が明瞭で晩材部を中心に黒い物質が充填された樹脂細胞が散在する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめの楕円形のスギ型で1分野に2個ある。採取された試料は下半部が広がりのある根材であるが切片を採取した場所は上半部の直通な部分であったため、細胞壁に根材の特徴は見られなかった。

仙台城二の丸北方武家屋敷の堀際に植栽されていた木材はスギであることが確認された。仙台市による北方武家屋敷地区調査では、花粉化石と大型植物化石の調査により、モミ属、スギ、マツ属複雜管束亞属、オニグルミ、クリ、カエデ属、ウルシなど様々な樹木が植栽されていることが推測され、なかでも花粉分析では多地点でスギ花粉が優勢となることや道構からスギ球果を出土しており、武家屋敷地区に多数のスギが植栽されていると考えられていた（吉川昌伸・吉川純子2012）。本報告で根株がスギと同定されたことにより敷地にスギが植栽されていたことが確定した。



1. スギ C : 横断面 R : 放射断面 T : 接線断面、スケールは 0.1mm

図38 6号溝出土木材の顕微鏡写真
Fig38 Photomicrograph of a planting from No.6 ditch at BK16

2. 11号溝出土繼手の樹種同定

調査地は仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点である。11号溝中には当時利用されたと考えられる竹樋が配置され、樋の繼手のうち3点は残存材があった。そこで当時繼手として利用された樹種を確認するためこれら3点の樹種同定を実施した。試料からはステンレス剃刀で横断面、放射断面、接線断面の2方向の切片を採取しプレパラートに封入して生物顕微鏡で観察・同定した。その結果、出土木材は2点がスギ、1点はスギまたはヒノキ科であった。

以下に同定の根拠を記載する。

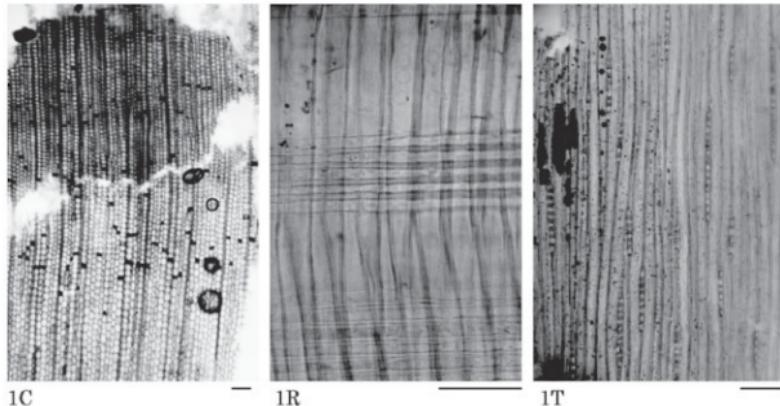
スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn. f.) D. Don) : 早材から晩材への移行はやや急で晩材部が厚く年輪界が明瞭で晩材部を中心に黒い物質が充填された樹脂細胞が接線方向にやや並ぶように散在する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめの楕円形のスギ型で1分野に2個ある。

スギまたはヒノキ科 : 早材から晩材への移行はやや急で晩材部が厚く年輪界が明瞭で晩材部を中心に黒い物質が充填された樹脂細胞が接線方向にやや並ぶように散在する。放射組織は単列で柔細胞のみからなり、分野壁孔は大きめの楕円形の孔が1分野に2個あるのは確認できるが外壁孔縁が溶けて形が確認できない。こうした特徴はスギ以外にヒノキ科の可能性が否定できない。

仙台城二の丸北方武家屋敷の溝中に設置されていた竹樋の支柱材は2点がスギ、1点がスギまたはヒノキ科であることが確認された。仙台市による仙台城跡の樹種同定結果では、扇坂トンネル部において試料40点のうちスギが22点と半数以上を占め、杭、板などの土木建築材に多く利用されている（吉川昌伸・吉川純子2012）。仙台城武家屋敷地区においてスギは様々な面でかなり利用頻度が高かったと考えられる。

表32 竹通樋手の樹種
Tab.32 List of tree species of joint part of bamboo conduit

試料	分類群
支柱B	スギ
支柱D	スギまたはヒノキ科
支柱E	スギ



I. スギ (支柱B) C: 横断面 R: 放射断面 T: 接線断面、スケールは 0.1mm

図39 11号溝出土繼手の顕微鏡写真

Fig.39 Photomicrograph of the joint part of bamboo conduit from No.11 ditch at BK16

第VII章 検出遺構の検討

1. I期の様相

今回の調査では、調査区南部において、二の丸北側の堀と考えられる遺構を検出した。その堀は、堀（古段階）と堀（新段階）に分かれることが判明した。そして、その埋土の特徴から、それぞれの時期の堀の埋没過程をある程度説明することができた。堀（古段階）は、出土遺物から17世紀初頭から前葉頃にはすでに存在していた。同様に、堀（新段階）は、18世紀前半頃には機能していたが、18世紀中葉には水害により埋没していたことが判明した。そう考えると、17世紀中葉から後葉の間に、堀（古段階）は埋没したこととなる。考古学的に設定した時期に具体的な年代を比定するならば、Ia期は17世紀前葉以前、 Ib期は17世紀中葉～後葉、 Ic期は18世紀前葉～中葉となる。今回、堀として調査を進めてきたが、本章では、その性格について詳細に検討する。

堀（古段階）の形状からすると、整備された堀というよりは、南方向に向かって傾斜する自然地形の沢と考えられる。堀（古段階A）と堀（古段階C）で一つの小さな谷を形成していたものと推定できる。そして、削平がなされているため不明はあるが、Ia区付近が谷頭と捉えられる。一方で、堀（古段階B）は、別の谷であると考えられる。そのため、埋土の特徴に違いが現れたと推定できる。次段階の堀（新段階）は、その北側肩部を近代の5・14号溝により破壊されたと考えると、直線的な形状となる。

元禄・享保（1688～1763）年間に成立した『東奥老士夜話』の「千貫沢・筋造橋之事」には、御作事方の堀江伝七の言として、両方の橋に関して当初は板橋であったが、伊達家二代目の伊達忠宗の頃に土橋としたという記録が残されている（鈴木省三編1925所収）。沢を堰き止めて堀とする場合、板橋ではなく土橋であろうことから、土橋に改築した際に千貫沢を堰き止めた堀が整備されたと推定できる。そして、その時期は、寛永13～万治元（1636～1658）年の頃である。

最も古い絵図として、正保2（1645）年の『奥州仙台城絵図』がある（図4-1）。この絵図には、すでに堀として整備された千貫沢が描かれている。従って、千貫沢が整備されたのは、寛永13～正保2（1636～1645）年の頃と言える。この時期はIb期に相当すると考えられるが、調査から得た年代と矛盾していない。

このIb期の遺構群は、千貫沢整備の状況を考える上で、重要な資料であると言える。本調査区は大規模な削平を受けているため確実性にかけるが、本章では今回の調査で得られた資料を元として、Ib期の遺構に関する一つの解釈を試みたい。

Ib期の6号溝の植樹の痕跡は、非常に特徴的である。列状に杉の植樹をしていることから杉並木と考えられる。これを杉並木とするならば、あえてこの場を堀として沈める必要はない。そして、6号溝より南側から南側に向かって急激に落ち始める。それから堀（古段階）埋土最上面の土は固く縮まり、乾裂が多数認められていることから、水を湛える堀が当初よりこの位置にあったとは考えづらい。これらのことから、堀（古段階）上面の場合は、堀として水没させたのではなく筋造橋通そのものと捉え、6号溝を筋造橋通南端の並木と想定したい（図40）。筋造橋通北端は、明確な遺構があるわけではないので判然としない。しかし、遺構の分布状況や溝の軸方向等を考えると、12号溝近辺が想定できる。竹籠を埋設した11号溝や、用途不明のピット群は、屋敷地内の諸施設と考えられる。そして、当初整備された堀は、6号溝より南と推定する。また、先にも上げた『東奥老士夜話』の「千貫沢・筋造橋之事」の中に、土橋にした際に、橋の上に杉を植えたという記載がある。6号溝は土橋そのものではないが、その周囲に杉を植えて整備したということは十分に考えられる。以下では、以上の解釈を前提として、その後の変遷について考察する。

筋造橋通は、18世紀前葉までは機能していたが、18世紀中葉頃に水害により埋没してしまう。文献記録に残された18世紀中葉頃の自然災害としては、千貫橋付近の石垣が破損した元文4（1739）年の梅雨がある（藤澤敦2006）。その様子は、同年の『仙台城修復窓絵図』にて記載されている。そのほかにも、この時期の頃には、複

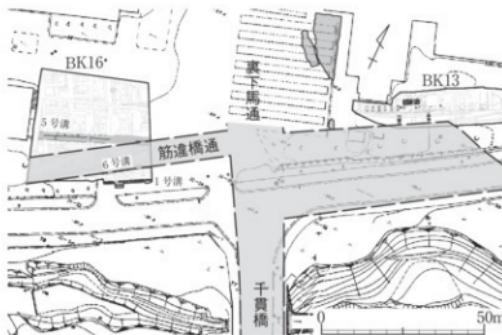


図40 武家屋敷地区第16地点付近のI b期における道路の推定
Fig.40 The reconstruction of the old road around BK16

数回の洪水などの水害が記録されている（斎藤聰雄2004）。今回の堆積層がどの出来事によるものか判別は難しいが、そうした水害により筋違橋通は埋没したものと考えられる。

この想定された筋違橋通は、5号溝より北側で検出した地山面とはおおむね30cm程度の標高差が認められた。北側では近世の面が削平されていることから、当時の標高はより高かったと推定できる。そのような状況からすると、屋敷地が筋違橋通より一段高い場所に位置し、水害が発生した場合には、筋違橋通が埋没する程度で留めるように考えられていたのではなかろうか。そして、そう考えるならば、1号溝等は屋敷地内に位置するのではあるが、一段低いところに設置された排水施設という可能性も想定したい。

以前に調査した筋違橋通と裏下馬通交差点東側の武家屋敷地区第13地点（『調査報告』2）では、1号溝古段階北端を筋違橋通北端と推定し、その北側に「北下馬屨」が位置していたことを考察した。その際には指摘してなかったが、1号溝古段階と「北下馬屨」が位置していた面には、0.7~1m程度の段差が存在していた。このことを考えると、筋違橋通と屋敷地等の構造物が建てられる場所には、段差が存在していたことは指摘できる。

また、宝暦10~明和3（1760~66）年の『仙台城下絵図』（図5-8）では、堀の表現では無く、通常の沢として描かれている。そして、沢と筋違橋通の間に空白地が描かれている。一方で、その絵図の前後の時期の絵図では、通常の堀として表現されている。絵図の正確性が問題となるが、水害等の出来事により、堀が埋まってしまう時期もあったものと想定する。その際には、筋違橋通も埋没していたのではなかろうか。その後の様相は、削平されているため不明ではあるが、埋没した筋違橋通の上部に新規の筋違橋通が復旧されていたと推定する。

今回の考古学的調査では、堀と想定し、古段階と新段階に区分して調査・報告を進めてきた。しかし、その後の整理や絵図・文献等の検討から、堀（古段階）は自然の沢であり、堀（新段階）は筋違橋通が水害によって埋没したものと解釈した。堀（新段階）の北側が直線的なのは、道路筋であるからであろう。また、このように想定した場合、堀が整備される以前、つまり沢が埋まる以前の筋違橋通の位置は、今回の調査区の北側に位置していたものと考えられる。

もちろん、本調査区北側の削平された部分に一貫して筋違橋通が位置し、道筋の変更が一切無かったということも想定できる。堀（古段階）上面に関しては、堀北側に段差を構築することにより、通常は単なる開地であるが、大雨の際に溢水した場所として整備したと捉えることも可能であろう。しかし、並木のあるI b期の遺構群の存在や、堀（古段階）最上面における固く締まった表面や全体に広がる乾裂などの状況、そして最古の絵図（正保2（1645）年）においても、当初から水を湛えた堀として表現されていることから、そのように断言することも難しい。今後の周辺の調査事例を積み重ねて、確実な考古学的証拠により判断したい。

2. II期・III期の様相

II期の土地の使われ方は、検出遺構が溝のみであるので不明である。その中でも5号溝は、その機能から察するに、造成した際に水が湧きやすく地盤が脆弱な堀（新段階）埋土の端に構築したものであろう。そして、5号溝の規模からすると、道路との境であった可能性がある。その後のIIIa期においても、5号溝と同じ場所に14号溝を再構築し、それより北側に建物を建てている。これらのことから、5・14号溝はIIa～IIIa期における筋違橋通北端であることは想定できる。もちろん、この筋違橋通の位置が造成前まで遡るかどうかは不明である。

II期に関しては、今回の調査では建物の存在が確認できなかった。明治初期から第二師団設置以前の絵図（図5-11～13）でも、本調査区の周辺には建物が全く描かれていない。本調査区で明らかにしたように、おそらくII期には、実際に規模の大きな建物は構築されていなかったものと考えられる。今回の調査区から東側に位置する第4地点の調査（『年報』13）の際には、明治初頭に畠として利用された層（4層）を確認している。今回の調査区では、畠などの痕跡は見当たっておらず、畠地として利用されていたかどうかは不明である。

川内北地区では、明治21（1888）年第二師団設置の前、明治14～16（1881～83）年に川内地区の民有地を買収などしたりし、師団司令部周辺に関連施設の造営を推し進めたことが指摘されている（加藤宏2011）。明治15（1882）年の地形図（図5-13）でも、川内地区にはそれ以前には記載されていなかった「陸軍省用地」の文字が明記されている。これ以後に大規模な造成が始まる。

II期の5号溝は、規模の大きな排水用の溝であると考えられる。第二師団は、こうした排水溝を当初に敷地端に構築し、その後の造成作業を進めたのではないかと推定する。この場所では、以前は畠地として利用されていた可能性もあるが、II期当初には、そのような層を含めて地表面から1m程の削平が行われ、整地されたものと考えられる。この第二師団による初期の整備期をII期と考えたい。

また、第13地点の報告書（「調査報告」2）で検討したように、筋違橋通と裏下馬通の交差点東側に設置されていた廃建物は、幕末に撤去されている。そして、それ以後の絵図・地形図、例えば明治8（1875）年『宮城郡仙台町地引図』（図5-11）などでは、その廃建物が設置されていた場所は、屋敷地内に取り込まれている。それに伴い、筋違橋通の北端は裏下馬通の東西で直線的に通るように表現されている。これらのことからすると、幕末の廃撤去時に、道路なども整備された可能性が考えられる。この幕末から明治初頭の時期を、第二師団の造成以前として考え、IIa期よりも前の出来事として推定する。本調査区におけるこの時期の筋違橋通りは不明であるが、その後の展開を考えるならば、5号溝とほぼ同じ場所に位置していたのではないだろうか。

III期は、第二師団設置以後の時期である。IIIa期になると、規模の大きな礎石の建物が建設されている。これらの建物は、その規模や構造から明治38（1905）年地形図（図3-2）に表記されている歩兵第29連隊あるいはその以前に位置していた歩兵第17連隊における建物であろうことが推察される。そして、次のIIIb期になると、14号溝の上にレンガ造りの建物が構築され、1号溝近辺まで伸びる。そして、1号溝によって南側が区画されている（図12）。つまり、IIIb期になると、筋違橋通北端が南に移る様相が見て取れる。

昭和3（1928）年地形図（図3-3）では、筋違橋通の様相が変わり、大堀通交差点から西側付近までの筋違橋通が直線的となっている。そして、大堀通交差点近辺から西側の堀がほぼ消失している。この件については、第12地点の報告書（BK12：『年報』11）に考察がなされており、この時期に堀の大規模な埋め立て等が行われたことが指摘されている。この昭和3（1928）年地形図が描かれた以前の大正14（1925）年には歩兵第29連隊が若松市に転出し、昭和2（1927）年にはその跡地に陸軍教導学校が開設された。この筋違橋通の変更は、こうした動きと連動しているものと推察できる。そして、調査区西半に位置するレンガ造りの建物は、その場所などから、昭和3（1928）年地形図（図3-3）に描かれている陸軍教導学校の建物（「建物b」）と推定できる。これらの様相からすると、筋違橋通を作り変えた際に、敷地を拡幅する目的で、本調査区周辺における筋違橋通をやや南側に移したのではないかと推測できる。

引用・参考文献

東北大大学埋蔵文化財調査室・仙台市教育委員会の報告書に関しては、直接引用したもの以外は省略した。

【東北大大学埋蔵文化財調査室刊行報告書関連】

- 瀧谷悠子 2011 「仙台城下絵図にみる屋敷拵領者変遷と階層性」『仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第11地点・第12地点』東北大大学埋蔵文化財調査室調査報告1
- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1985 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」1
- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1990 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」3
- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1993 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」6
- 東北大大学埋蔵文化財調査委員会 1994 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」7
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 1997 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」8
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」9
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 1999 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」11
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 2000 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」13
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 2001 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」14
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 2005 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」18
- 東北大大学埋蔵文化財調査研究センター 2006~2010 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」19~1・2・3・4・5
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2007 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」21
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2010 「東北大大学埋蔵文化財調査年報」24
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2011 「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第II地点・第12地点」
- 東北大大学埋蔵文化財調査室調査報告1
- 東北大大学埋蔵文化財調査室 2013 「仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第13地点」
- 東北大大学埋蔵文化財調査室調査報告2

【仙台市教育委員会刊行報告書関連】

- 佐藤 洋はか 1985 「仙台城三の丸跡」仙台市文化財調査報告書第78集
- 佐藤 淳はか 2008 「若林城跡－第5次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書323
- 原河英二はか 2009 「仙台城跡」仙台市文化財調査報告書342
- 佐藤 洋・在川宏志 2009 「仙台城跡9－平成20年度調査報告書－」仙台市文化財調査報告書348
- 金森安孝・渡部 紀 2009 「仙台城跡第1次調査 第1分冊本文編」仙台市文化財調査報告書349
- 佐藤 淳はか 2010 「若林城跡－第8次・第9次発掘調査報告書－」仙台市文化財調査報告書377
- 吉川昌伸・吉川純子 2012 「扇坂トンネル上段部と亀岡トンネル進入路部の植物化石」『仙台城跡ほか』仙台市文化財調査報告書402 pp.204-216

【その他の報告書・論文等（50音順）】

- 青山礼志 1982 「新訂貨幣手帳」 ポナンザ
- 阿刀田令造 1976（初出1936） 「仙台城下絵図の研究」 斎藤報恩会博物館図書部研究報告4 東洋書院
- 江戸遺跡研究会編 2001 「図説江戸考古学研究事典」 柏書房
- 大橋康二 1994 「古伊万里の文様 初期肥前陶磁器を中心に」
- 小川啓司 1974 「そば猪口絵柄事典」

- 加藤 宏 2011 「旧第二師団軍事施設配置に関する歴史的研究」(自費出版)
- 関西陶磁史研究会 2006 「京焼の成立と展開－押小路、栗田口、御室－」
- 喜多川守貞著、朝倉治彦・柏川修一校訂編集 1992 「守貞謹稿」第一～五巻 東京堂出版
- 九州近世陶磁学会 2000 「九州陶磁の編年」
- 京都市埋蔵文化財研究所 2004 「平安京左京北辺四坊第二分冊（公家町）」
- 小池一之ほか 2005 「日本の地形3 東北」 東京大学出版会
- 古泉 弘 1987 「江戸の考古学」 考古学ライブラリー48 ニューサイエンス社
- 小林 克 2000 「あかりの道具研究の方向」『江戸文化の考古学』 吉川弘文館 pp.221-242
- 小林清春監修 1994 「絵図・地図で見る仙台」 今野印刷
- 斎藤鉄雄 2004 「城下の災害」『仙台市史 通史編5 近世3』 仙台市 pp.131-137
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1990 「柴田コレクション展I－初期伊万里から柿右衛門へ－」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1991 「柴田コレクション展II」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1993 「柴田コレクション展III」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1995 「柴田コレクションIV－古伊万里様式の成立と展開－」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1997 「柴田コレクションV－延宝様式の成立と展開－」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1998 「柴田コレクションVI－江戸の技術と装飾技法－」
- 佐賀県立九州陶磁文化館 1999 「柿右衛門－その様式の全容－」
- 坂田 啓編 1995 「私本 仙台藩士事典」 創栄社
- 作者不明 「東奥老士夜話」(鈴木省三編) 1925 「仙台叢書」第8巻 仙台叢書刊行会 所収: 1972 平重道解題 宝文堂にて復刻)
- 鈴田由紀夫 1995 「17世紀末から19世紀中葉の銘款と見込み文様」『柴田コレクションIV－古伊万里様式の成立と展開』 pp.272-279
- 瀬戸市史編纂委員会 1993 「瀬戸市史 陶磁史篇四」
- 瀬戸市史編纂委員会 1998 「瀬戸市史 陶磁史篇六」
- 瀬戸市文化振興財团埋蔵文化財センター 2006 「江戸時代のやきもの－生産と流通－」記念講演会・シンポジウム資料集
- 仙台市科学館編 1985 「仙台市地形区分図」 仙台市科学館
- 仙台市史編さん委員会編 2006 「仙台市史 特別編7 城館」 仙台市
- 仙台市史編さん委員会編 2008 「仙台市史通史編6 近代1」 仙台市
- 東北大百年史編集委員会編 2003 「東北大百年史四 部局史一」 東北大学
- 東北歴史資料館 1995 「仙台・堤のやきもの」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 1996 「特別展堺衆のやきもの 堺環濠都市遺跡出土の桃山陶磁」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2005 「第17回織部の日特別展 織部様式の成立と展開」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2006 「第18回織部の日特別展 天下人とやきもの」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2007 「第19回織部の日特別展 ポスト織部の時代 元和寛永の茶陶」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2008 「第20回織部の日特別展 桃山時代の茶陶生産」
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2010 「第22回織部の日特別展 公と武 京と江戸のやきものの文化」
- 根津美術館 2002 「知られざる唐津 二彩・單色釉・三島手」
- 藤澤 敦 2006 「三 元和・寛永前期の様相」『仙台市史 特別編7』 仙台市 pp.253-259
- 山本忠尚 2001 「和英対照日本考古学用語辞典」 東京美術
- 吉岡一男編 2005 「絵図・地図で見る仙台 第二輯」 今野印刷

RESEARCH REPORTS
IN ARCHAEOLOGY ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No.5 MARCH 2016

The Archaeological Research office
On the Campus, Tohoku University
2-1-1, Katahira, Aoba-ku Sendai-shi, Miyagi,
980-8577, JAPAN

Summary

On the campus of Tohoku University a lot of archaeological sites are known. Among them, Sendai Castle is the most famous and largest one. Almost all of the south part of Kawauchi campus is located on its secondary citadel area. The north part of Kawauchi campus is located on the sites of *samurai* residences.

In Japan, if existing circumstances need to be changed in the known site area, excavation research on the buried cultural properties must be carried out. The Office mainly carries out salvage excavations of archaeological sites on campus.

This report carries the research result of salvage excavations of BK16 (Loc.16 of *samurai* residences located at the side of north outer moat of *Ninomaru*, i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle), on Kawauchi campus, which was conducted by the Archaeological Research Office on the Campus of Tohoku University in 2013.

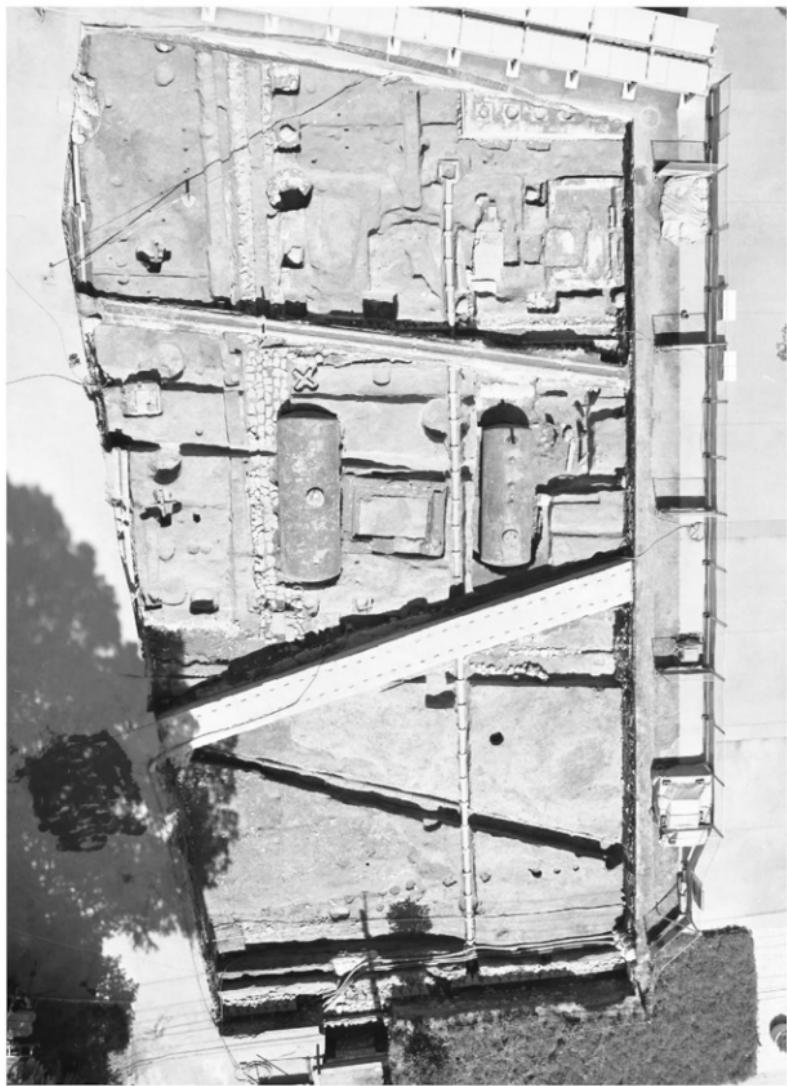
There is a large swamp stream on the south side of this excavation area. The swamp stream is called *Senganzawa* and has been located nearly in the same situation since Edo period. In comparison with old maps in Edo period, this excavation area used to be at the north side of *Senganzawa* swamp stream, at the west side of the crossroads of *Sujikaibashi* Street and *Urageba* Avenue. It was the place around *Sujikaibashi* Street and a north moat of *Ninomaru*.

In this area, the Imperial Japanese army was stationed from the Meiji period until the end of the Second World War. During this period, almost all of the excavation area was leveled in a large scale and were developed to flat places. After that, many buildings, ditches and wells for the army were constructed and produced. A number of porcelain, ceramics, metal implements and glasses belonging to the Meiji period were discovered from these structures.

Almost all archaeological structural remains belonging to Edo period were taken away and destroyed in this development by the Imperial Japanese army. However, relatively deep structural remains such as a moat, some ditches and a well feature exceptionally remained in situ. Some remains of porcelain, ceramics and other artifacts belonging to Edo period were found here for the same reason.

Structural features belonging to Edo period can be classified into two stages, namely the first stage and the second stage based on the evidence of sedimentary layers. The first stage was the period of a natural swamp stream. This place had not yet been constructed as a part of the *Ninomaru* citadel and its samurai residences. The second stage was the period organized as *Ninomaru* and residences. It is indicated that the deposits of these structural remains were caused by some deluges, and then *Sujikaibashi* Street was buried. Judging from the associated artifacts, the first stage was from the beginning to the early stage of the 17th century. The second stage was from the beginning to the middle of the 18th century.

写 真 図 版



1・2区 (2013年8月28日撮影：上が北)

図版1 武家屋敷地区第16地点全景 (1)
Pl.1 Views of BK16 (1)



3区（南端部以外：2013年10月5日撮影：上が北）

図版2 武家屋敷地区第16地点全景（2）
PL2 Views of BK16 (2)



1. 堀(新段階)古段断検出状況(2013年11月20日撮影: 上が北)



2. 調査終了状況(2013年12月11日撮影: 上が北)

図版3 武家屋敷地区第16地点全景(3)
PL3 Views of BK16 (3)



1. 調査区東壁土層断面（B列）（西から）



2. 調査区東壁土層断面（C列）（西から）



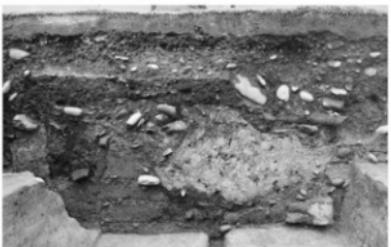
3. 調査区東壁土層断面（D列）（西から）



4. 調査区東壁土層断面（E列）（西から）



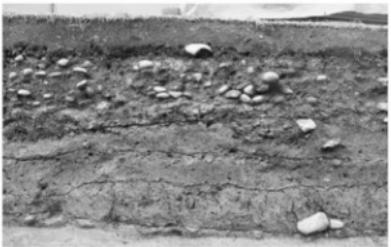
5. 調査区東壁土層断面（F列）（西から）



6. 調査区東壁土層断面（G列）（西から）



7. 調査区東壁土層断面（H列）（西から）



8. 調査区東壁土層断面（I列）（西から）

図版4 武家屋敷地区第16地点の遺構 (1)
Pl.4 Features at BK16 (1)



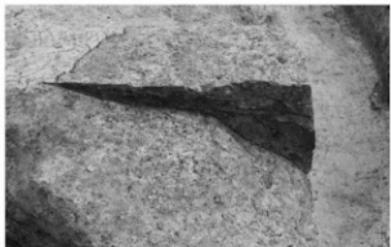
1. 調査区東壁土層断面（J列）（西から）



2. 調査区東壁土層断面（K・L列）（西から）



3. 堀（古段階C）東側調査区東壁断面全景（西から）



4. 堀（古段階C）東側調査区東壁断面北側（西から）



5. 堀（新段階）完掘、堀（古段階C）検出（2区：北西から）

図版5 武家屋敷地区第16地点の遺構 (2)
Pl.5 Features at BK16 (2)

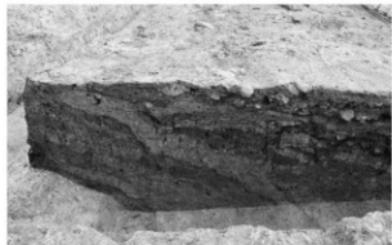


1. 堀（古段階）（3・4区）検出（西から）



2. 堀（古段階B）調査区東壁断面（西から）

図版6 武家屋敷地区第16地点の遺構 (3)
Pl.6 Features of BK16 (3)



1. 堀（古段階C）東側調査区東壁断面中央（西から）



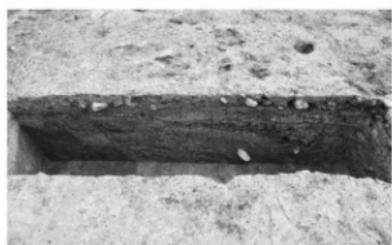
2. 堀（古段階C）東側調査区東壁断面南側（西から）



3. 堀（古段階A）断面（東から）



4. 堀（古段階A）完掘（東から）



5. 堀（古段階C）中央調査区東壁断面全景（西から）



6. 堀（古段階C）中央調査区東壁断面北側（西から）



7. 堀（古段階C）中央調査区東壁断面南側（西から）

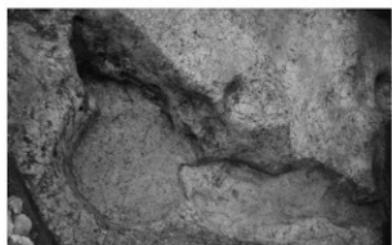
図版7 武家屋敷地区第16地点の遺構 (4)
Pl.7 Features at BK16 (4)



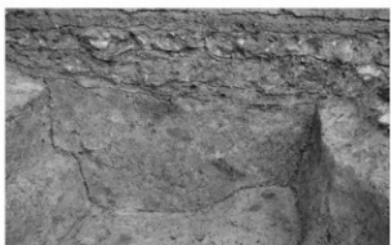
1. 瓢 (古段階C) 西側調査区西壁断面 (東から)



2. 1号土坑断面 (東から)



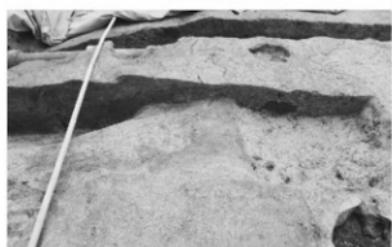
3. 1号土坑完掘 (北西から)



4. 13号溝断面 (東から)



5. 13号溝完掘 (南から)



6. 6号溝・瓢 (K3区西壁) 断面 (東から)

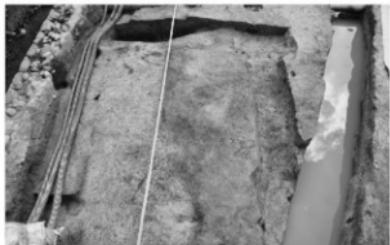


7. 6号溝検出 (東から)

図版8 武家屋敷地区第16地点の遺構 (5)
Pl.8 Features at BK16 (5)



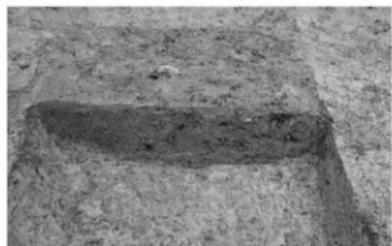
1. 6号溝完掘（東から）



2. 6号溝・掘（K2・3区）完掘（東から）



3. 6号溝・掘（L7区調査区西壁）断面（東から）



4. 10号溝断面（東から）



6. 11号溝竹桶縫手D、E断面（東から）



5. 10号溝完掘（西から）

図版9 武家屋敷地区第16地点の遺構 (6)
Pl.9 Features at BK16 (6)



1. 11号溝竹植検出（西から）



2. 11号溝定掘（西から）



3. 11号溝竹植縦手B断面（東から）

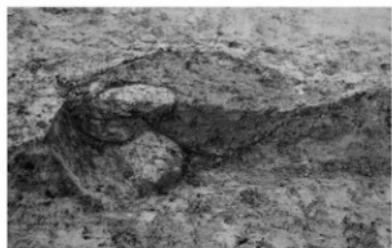


4. 12号溝断面（東から）

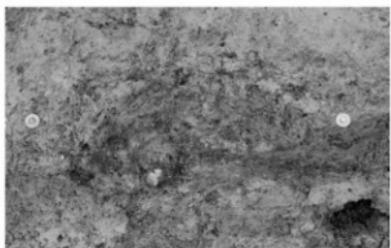


5. 12号溝定掘（西から）

図版10 武家屋敷地区第16地点の遺構 (7)
Pl.10 Features at BK16 (7)



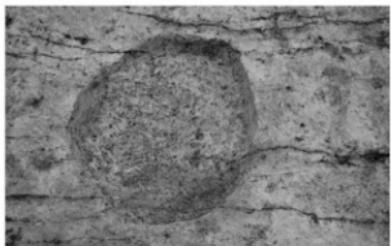
1. ピット7断面（北から）



2. ピット7完掘（北から）



3. ピット9断面（東から）



4. ピット9完掘（南から）



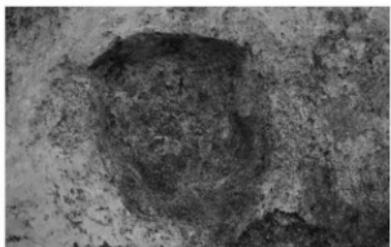
5. ピット10断面（南から）



6. ピット10完掘（南から）



7. ピット11断面（南から）



8. ピット11完掘（南から）

図版11 武家屋敷地区第16地点の遺構 (8)
Pl.11 Features at BK16 (8)



1. 堀（新段階）2区検出全景（北西から）



2. 3区南・4区搅乱除去状況（北西から）

図版12 武家屋敷地区第16地点の遺構 (9)
Pl.12 Features at BK16 (9)

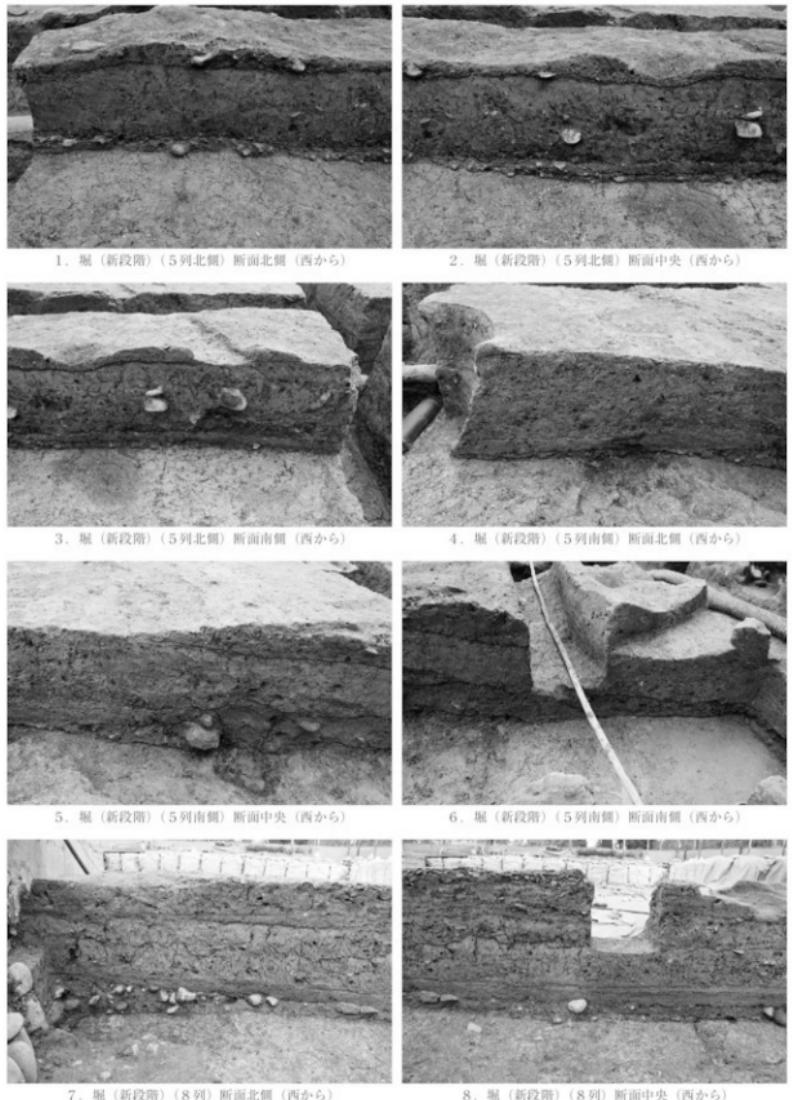


1. 3区南・4区搅乱除去状況（南西から）



2. 堀（新段階）5列断面全景（北西から）

図版13 武家屋敷地区第16地点の遺構 (10)
PL13 Features at BK16 (10)



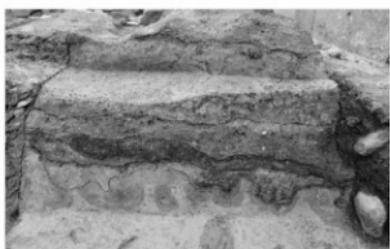
図版14 武家屋敷地区第16地点の遺構 (11)
PL14 Features at BK16 (11)



1. 堀（新段階）(8列) 断面全景（西から）



2. 堀（新段階）(8列) 断面南側（西から）



3. 堀（新段階）(H8I区) 断面（西から）



4. 堀（新段階）(13列) 断面北側（西から）



5. 堀（新段階）(13列) 断面中央（西から）

図版15 武家屋敷地区第16地点の遺構 (12)
PL15 Features at BK16 (12)



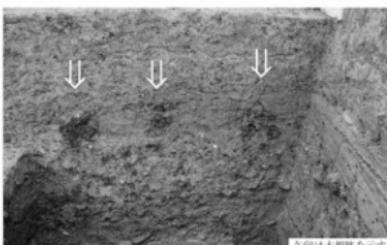
1. 堀（新段階）(13列) 断面南側（西から）



矢印は木根跡を示す
2. 堀（新段階）(L8・9区) 南壁断面東側（北から）



矢印は木根跡を示す
3. 堀（新段階）(L10・11区) 南壁断面西側（北から）



矢印は木根跡を示す
4. 堀（新段階）(L11区) 南壁断面（北から）



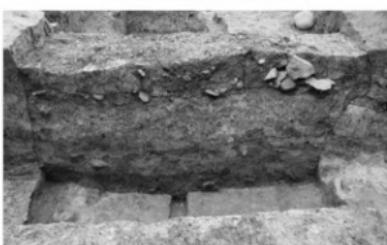
5. 堀（新段階）(G3区) 断面（西から）



6. 2号井口石組検出（南から）



7. 2号井口断面（南から）



8. 5・14号溝 (H・II3区) 断面（西から）

図版16 武家屋敷地区第16地点の遺構 (13)
PL16 Features at BK16 (13)



1. 4号溝 (E9区以西) 完掘 (西から)



2. 5号溝 (2区) 底面溝検出 (東から)



3. 5号溝 (1・2区) 完掘 (東から)



4. 5号溝 (1・3区) 完掘 (東から)

図版17 武家屋敷地区第16地点の遺構 (14)
PL17 Features at BK16 (14)



1. 便所検出（西から）



2. 5・14号溝（H8区）断面（西から）



3. 1号井戸 sondage検出（東から）



4. 1号井戸掘り下げ状況（東から）



5. 西側木桶完掘（南西から）



6. 1号溝（L5E6）検出（西から）

図版18 武家屋敷地区第16地点の遺構（15）
PL18 Features at BK16 (15)



1. 2号溝周辺 (D3区) 断面 (西から)



2. 3号溝 (調査区北壁) 断面 (南から)



3. 3号溝 (C7区) 西側石組 (東から)



4. 3号溝 (B8区) 西側石組 (東から)



5. 1号溝検出 (東から)



6. 3号溝全景 (南から)

図版19 武家屋敷地区第16地点の遺構 (16)
PL19 Features at BK16 (16)



1. 2号溝全景（東から）



2. 2・3号溝接続部（東から）



4. 14号溝（H9区以西）擾乱除去状況（東から）

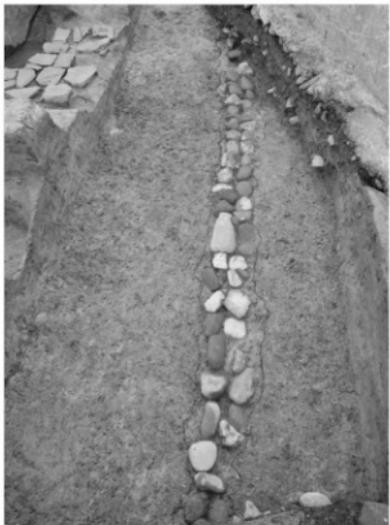


3. 9号溝検出（西から）



5. 3・14号溝接続部上段撤去状況（南から）

図版20 武家屋敷地区第16地点の遺構（17）
PL20 Features at BK16 (I7)



1. 14号溝 (H6~8区) 底面溝検出 (北西から)



2. 3・14号溝接合部検出 (東から)

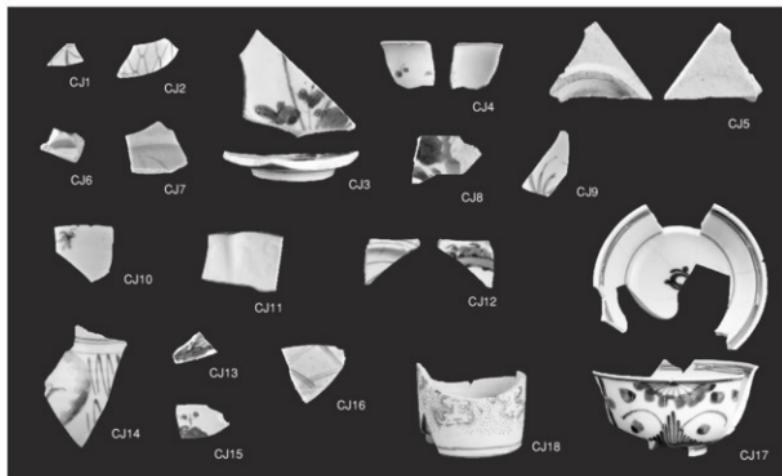


3. 14号溝 (H9区以西) 完掘 (西から)



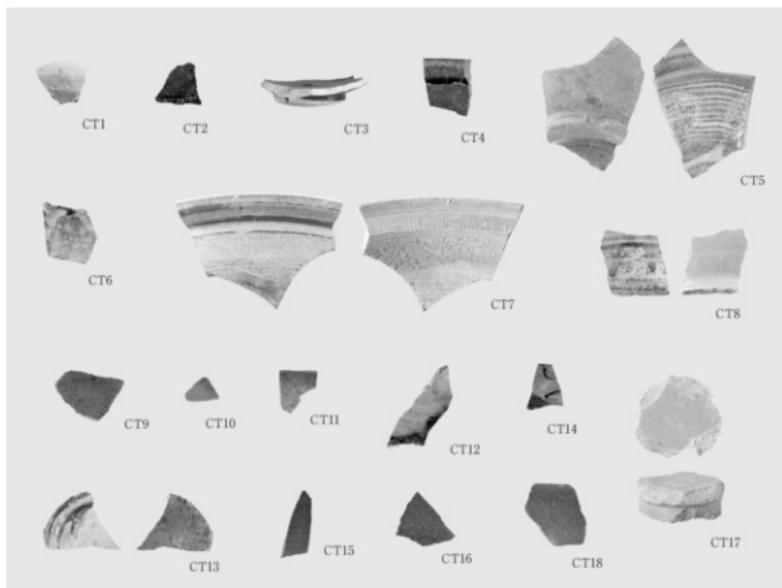
4. 14号溝 (H6~8区) 底面溝完掘 (北西から)

図版21 武家屋敷地区第16地点の遺構 (18)
PL.21 Features at BK16 (18)



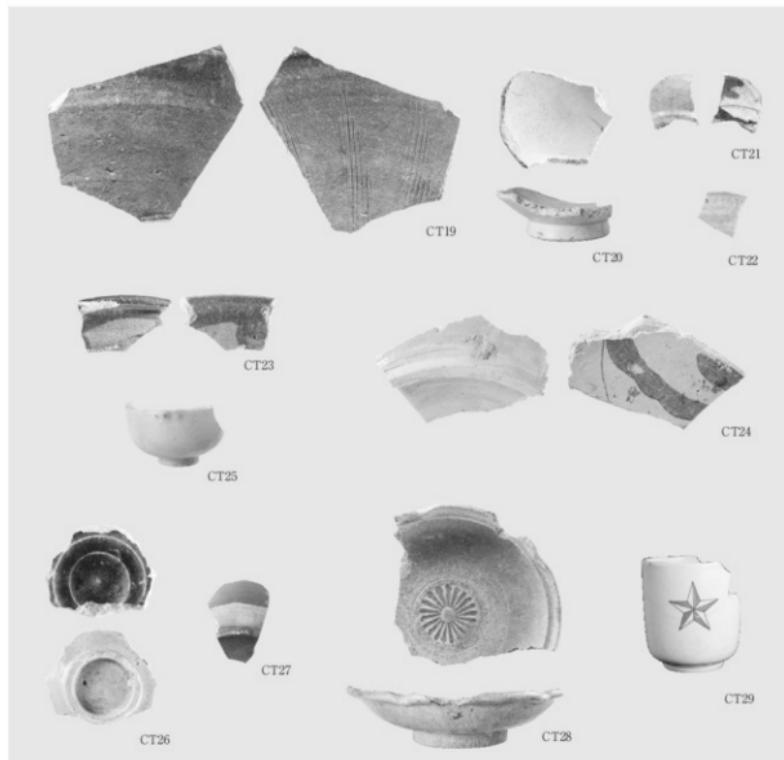
圖版22 武家屋敷地区第16地点出土磁器
Pl.22 Porcelains from BK16

S= 1 : 3



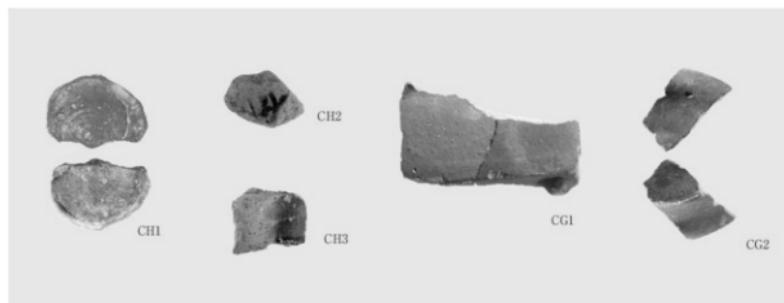
圖版23 武家屋敷地区第16地点出土陶器 (1)
Pl.23 Glazed ceramics from BK16 (1)

S= 1 : 3



圖版24 武家屋敷地区第16地点出土陶器 (2)
Pl.24 Glazed ceramics from BK16 (2)

S= 1 : 3



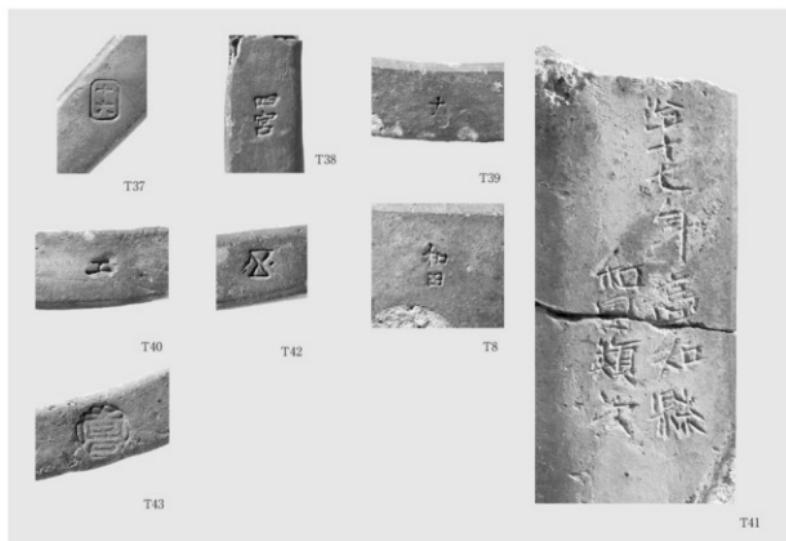
圖版25 武家屋敷地区第16地点出土土師質土器・瓦質土器
Pl.25 Glazed ceramics from BK16

S= 1 : 3



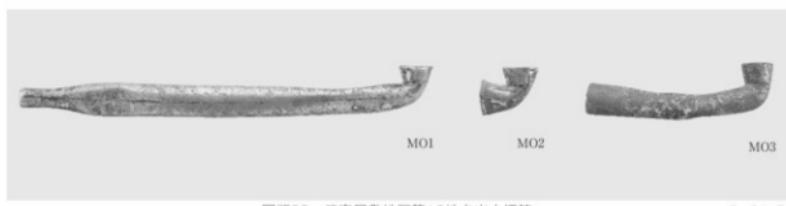
图版26 武家屋敷地区第16地点出土軒丸瓦・軒棟瓦
Pl.26 Various roof tiles from BK16

S= 1 : 3



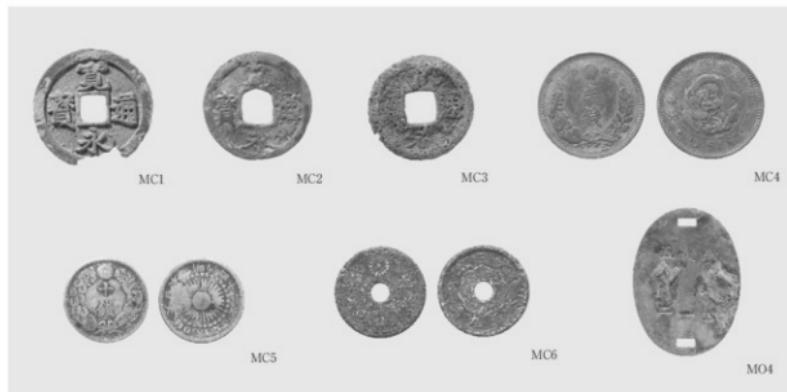
图版27 武家屋敷地区第16地点出土刻印瓦
Pl.27 Roof tiles with seal impression from BK16

S= 4 : 5



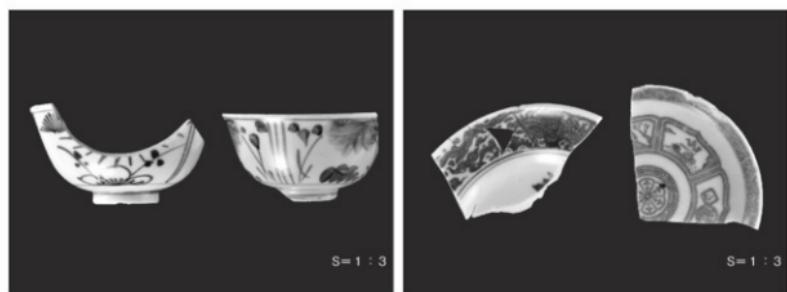
图版28 武家屋敷地区第16地点出土煙管
Pl.28 Pipes from BK16

S= 2 : 3



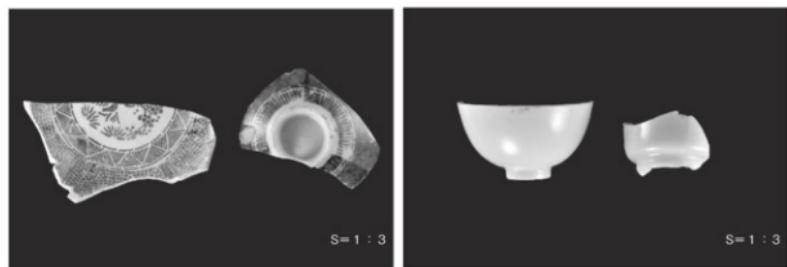
图版29 武家屋敷地区第16地点出土古钱・金属制品
PL29 Coins and metal implements from BK16

S=1:1
MO4S=2:3



近代手描き磁器（1層・搅乱出土）

近代銅板転写磁器（1層・搅乱出土）



近代描繪磁器（1層・搅乱出土）

近代白磁（1層・搅乱出土）

图版30 武家屋敷地区第16地点出土近代遗物（1）
PL30 Various modern implements from BK16 (1)

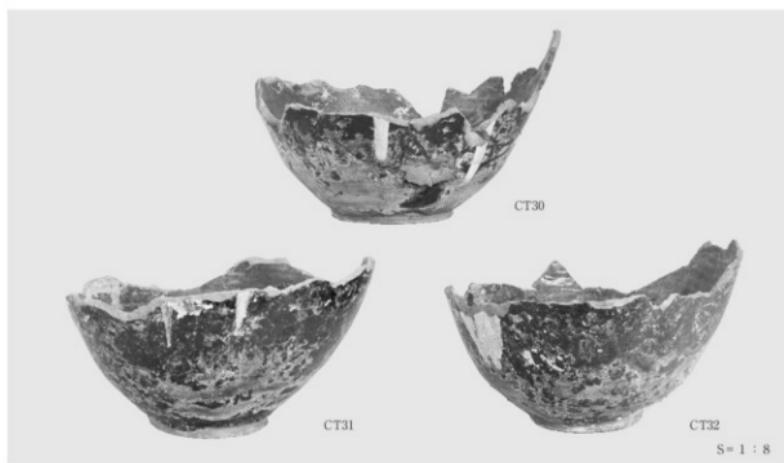


近代金属製品（1層・搅乱出土）



歯ブラシ（1層・搅乱出土）

ボタン（1層・搅乱出土）



便所埋め甌

図版31 武家屋敷地区第16地点出土近代遺物（2）
Pl.31 Various modern mordern implements from BK16 (2)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	せんだいじょうあとにのまるほっぽうぶけやしきちくだい16ちてん							
書名	仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点							
副書名								
卷次								
シリーズ名	東北大学埋蔵文化財調査室調査報告							
シリーズ番号	5							
編著者名	菅野智則・柴田恵子・石橋 宏							
編集機関	東北大学埋蔵文化財調査室							
所在地	〒980-8577 宮城県仙台市青葉区片平二丁目1-1 TEL022-217-4995							
発行年月日	西暦2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	世界測地系 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因	
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区	宮城県仙台市 青葉区川内41	04100	01033	38度 15分 36秒	140度 51分 10秒	2013.4.1 ~12.19	1200m ²	学生支援セン ター新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第16地点	城館	近世	近世：ピット、井戸、溝、 堀（沢、道路跡）		陶磁器・土器・瓦・ 金属製品			
要約								
仙台城跡 二の丸北方 武家屋敷地区 第16地点	近世から近代の遺構・遺物が多数確認できた。調査時には、ピット、井戸、溝、堀として遺構を確認した。近世の出土遺物は堀からの出土が中心であるが、細片で点数も限られている。考察の結果、堀と考えた遺構は、その古段階は自然の沢地形が埋没したものであり、新段階は筋途橋通を埋めた水没の痕跡と推定した。江戸期における筋途橋通の様相と自然災害の痕跡を確認することができた。また、仙台城二の丸に伴う堀は、本調査区より南側に位置するものと考えられる。							

東北大学埋蔵文化財調査室調査報告5

仙台城跡二の丸北方武家屋敷地区第16地点

平成28年3月31日

発行 東北大学埋蔵文化財調査室
〒980-8577 仙台市青葉区片平2丁目1-1 TEL 022 (217) 4995

印刷 株式会社 東北プリント
〒980-0822 仙台市青葉区立町24-24 TEL 022 (263) 1166

Research reports in archaeology on the campus of TOHOKU UNIVERSITY No.5

Samurai Residences around Sendai Castle (BK16 site)

- Excavation reports of Loc.16 of samurai residences located at the side of
north outer moat of Ninomaru i.e. Secondary Citadel of Sendai Castle -

Archaeological Research office on the Campus,
Tohoku University